

書 選 元 創

# 人良の遠永

イキスフエイトスド  
譯 清 西 神

読 者 選 137 巻 137

行 發 社 元 創

983

cD72e

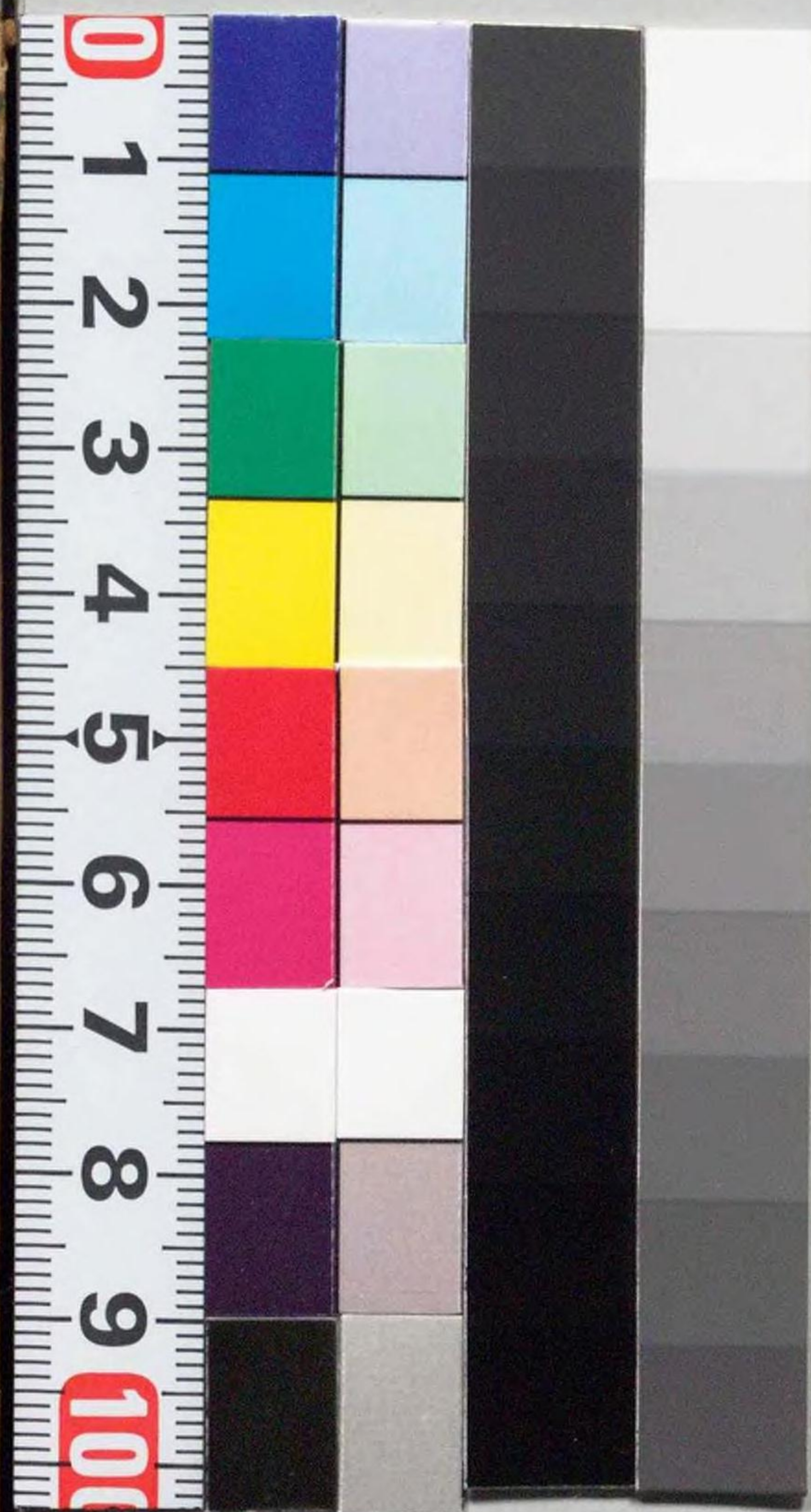
Zs



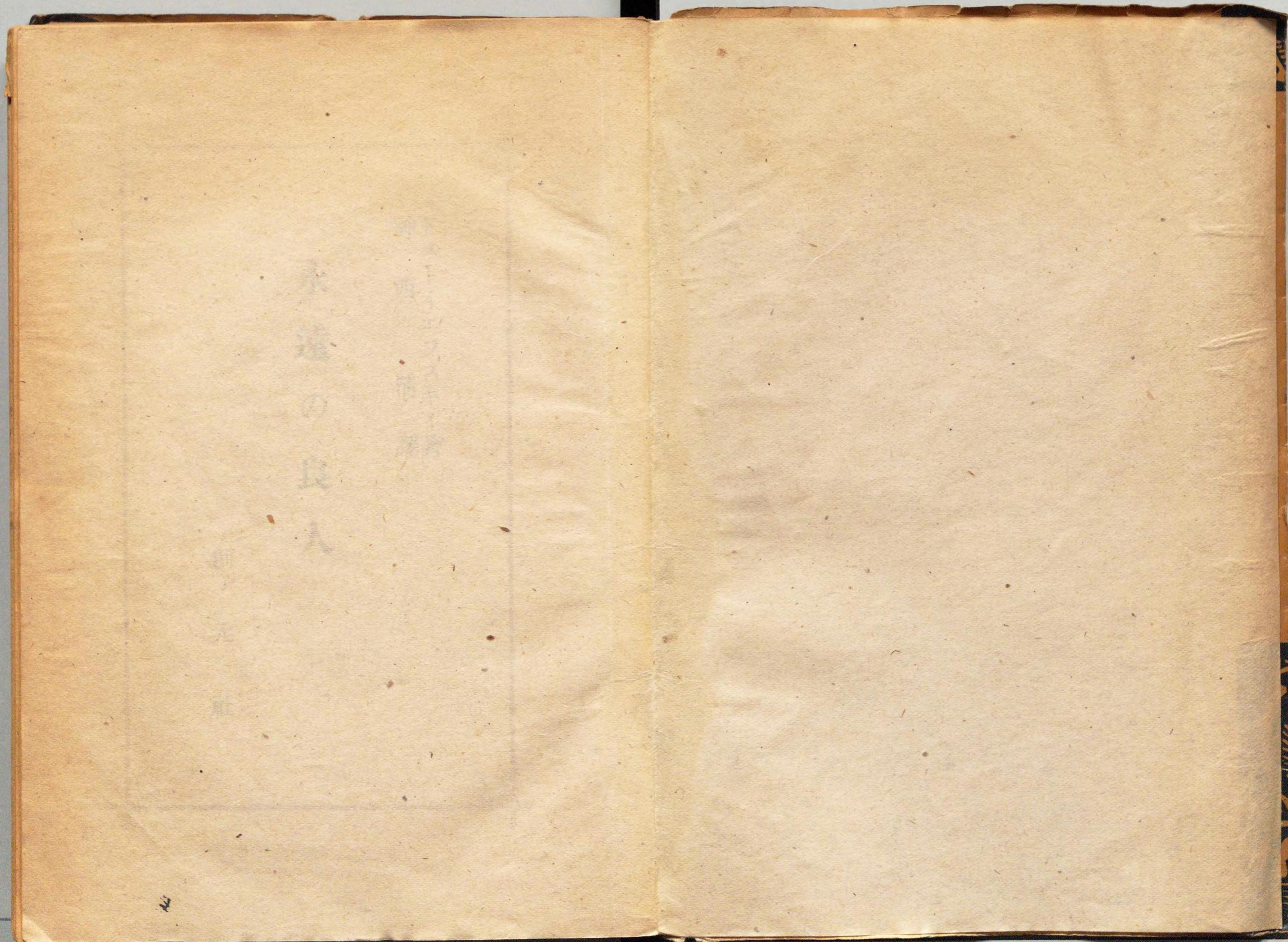
00701713

X

複写









ド  
ス  
ト  
イ  
エ  
フ  
ス  
キ  
イ  
著  
神  
西  
清  
譯

永遠の良人

創  
元  
社

817105



983  
cD72e  
Z<sub>A</sub>



701713

# 永遠の良人 目次

一	ヴェリチャーニノフ……………	二
二	帽子に喪章をつけた紳士……………	一五
三	パーヴェル・パーヴロヴィチ・トルソツキイ……………	三五
四	妻と良夫と情夫……………	五五
五	リ　　　　　ザ……………	六九
六	閑人の新らしい妄想……………	九二
七	良人と情夫が接吻し合ふ……………	一〇六
八	リーザの病氣……………	一二九
九	幽　　　　　靈……………	一四一
十	墓　　地　　で……………	一五八
十一	パーヴェル・パーヴロヴィチの結婚……………	一七三
十二	ザフレービニンの家で……………	一九四



十三	重みはどつちに……………	二三四
十四	サーシェンカとナーヂェンカ……………	二五〇
十五	總勘定……………	二六八
十六	分析……………	二八五
十七	永遠の良人……………	三〇三
	譯者のあとがき……………	三二二

## 永遠の良人



# 一 ヴェリチャーニノフ

夏が来たといふのにヴェリチャーニノフは、案に相違してペテルブルグに踏みとどまることになつた。南ロシアの旅もおちやんになつたのみか、事件はいつ片づく當てもない始末だつた。事件といふのは領地に關する訴訟だつたが、風向きは頗る思はしくなかつた。つい三月前までは、とても單純でほとんど議論の餘地もないものに見えてゐただけけれど、どうかした拍子にがらりと様子が變つてしまつたのである。

『おまけにどうも、何もかも悪い方へ變りだしやがつて!』

とそんな文句を、ヴェリチャーニノフはさも忌々しげに、よく獨り言に繰返すやうになつた。彼は腕利きの、報酬の高い、有名な辯護士を傭つて、費用の點は少しも惜しまなかつた。それでもなほもどかしく、信用の置きぬ氣持がして、自分までが事件に首をつつ込むやうになつた。つまり書類を読む、自分でも書く、そして大抵は辯護士の手で屑籠へ棄てられる。また裁判所から裁判所へ駆けづり廻つて見たり、調査をして見たりするのだつたが、恐らくこれがよほど事件の運びの邪魔になつたの

である。少くも辯護士は苦情を鳴らして、彼を別荘へ敬遠しようとした。ところが彼の方では、別荘へ行くだけの決心さへつき兼ねたのである。埃、蒸暑さ、神経をいらさらせるあのペテルブルグの白夜、——さうしたものを、彼はペテルブルグで享樂してゐたわけなのだ。彼のアパートは<sup>ボリショイ・テアトル</sup>大劇場の傍にあつて、ついこのあひだ借りたばかりだつたが、これも矢張り失敗だつた。まつたく彼の言ひ草ぢやないが、『何もかも巧く行かん!』なのである。彼のヒポコンデリーは目ましにひどくなるばかりだつた。とはいへこのヒポコンデリーの徴候は、久しい前からあるにはあつたのである。

彼は世間を廣く渡つて、色々なことを見て來た男である。もはや決して若いとは言へぬ、三十八かひよつとしたら九にもならうといふ年配だが、一體この『老年』といふ奴は、彼自身の言ひ草によると『まるで抜き打ちに』彼を襲つたのだつた。しかも彼自身の解するところに従へば、彼が老い込んだのは年齢の量によるといふよりは、寧ろ言つてみればその質によるものなので、もし既に老衰が始まつてゐるものとすれば、それは外部からより寧ろ内部からなのであつた。打ち見たところ、彼は今なほ血氣壯んであつた。背の高い、堂々たる恰幅の男で、髪の毛は淡色で房々してゐて、頭髮にも、また殆んど胸の半ばにとどきさうな亚麻色の長い髻にも、白髪なんぞは唯の一筋だつてなかつた。ちよいと見ると、どこか少し間のびのしただらしの無い男に見える。が、もつと眼を凝らして眺めると、諸君はたちどころに、曾ては最高の上流社會の子弟としての教育を受けたことのある、育ちのいい一



人の紳士を彼のうちに見出されるであらう。わざと氣難かしげな、のろくさした態度を身につけてはゐたものの、彼の物腰はいまだに潤達できびきびしてゐるばかりか、優美でさへあつた。そして、今になつてもまだ彼は、非常に根柢よい、上流社會によく見られる例の不遜なまでの自負心に満ちてゐたが、その程度たるや、單に賢明なだけではなく時としては俊敏ですらあり、まづ申し分のない教養と疑ふべからざる才能とを具へてゐる流石の彼だつて、自らまさかそれ程だとは思つてゐなかつたに相違ない。さばさばして、ほんのりと紅味のさした顔の色艶は、その昔は女のやうな優しさを湛へて婦人達の眼を惹いたものだつたが、今でもやつぱり彼を一目みて『何て健康さうな人だらう、櫻色とはこのことだ!』と言ふ人もある。とはいへこの『健康さうな』折角の男振りも、ヒポコンデリーのため散々に害はれてゐた。ぱつちりした眼は空色そらいろをしてゐて、十年ほど前にはやはり頗る魅力があつた。それは實に明るい、實に愉しげな、苦勞のなさうな眼で、出會ひがしらに誰もが思はず知らず引き入れられてしまふ程だつた。それが、やがて四十の聲を聞かうといふ今日になつては、すでに小皺に圍まれてゐるその眼に、明るさも善良な色も殆んど消え失せてしまつたばかりか、逆にあまり品行の芳しからぬ消耗した人間に見られるシニズムや、また狡猾さやが現はれてゐた。なかでも最も頻繁にあらはれるのは嘲笑の色であり、そのうへ以前にはなかつた新しい陰影までが出てきた。それは悲哀と苦痛の影——當てどもないやうでゐてその實は烈しい、一種放心したやうな悲哀の影であつた。

一人でゐるやうな時には、特にこの悲哀が色濃くあらはれた。そしてこれは妙な話だが、つい二年ほど前までは騒々しくつて陽氣で浮うついた質で、おどけた話をするのがあんなに得意だつたこの男が、今では全くの孤獨ほどに好きなものはないのであつた。彼は多くの知人をわざわざ振り棄てた。それは、自分の財政状態が支離滅裂になつてしまつた今日なほ、決して振り棄てる必要のない人達であつた。尤もこれに虚榮心も手傳つたので、つまり彼のやうに猜疑心も深く虚榮心も強い男は、今までの知人たちと附き合つては行けなかつたのである。しかも又この虚榮心までが、孤獨な生活の中で次第に形を變へだしてゐた。それは弱まるどころか、却つて逆ですらあつたが、とにかくそれは以前には見られなかつた一種特別な虚榮心に變化しはじめたのである。と云ふのはつまり、彼の虚榮心は時折り從來よくあつた動機とはまつたく打つて變つた動機のために、傷つけられたしたのである。——それは意想外な、以前なら夢にも思ひ寄らなかつた動機、今までのに比べれば『より高尚な』動機であつた。『但し、若しさう言へるならばさ、もし本當に高尚な動機とか低級な動機とか云ふものがあるならばさ……』これは彼自身の附け加へた言葉である。

實に彼は、そこまで行き着いてしまつたのである。昔なら氣に掛けもしなかつたに相違ない何ものが高尚な動機と、今では闘つてゐるのである。彼は（われながら意外千萬にも）内心でどうしても笑ひ飛ばしてしまへぬ『動機』は一切、自分の意識と良心の聲にしたがつて、高尚な動機と名づけてゐ



た。内心で笑ひ飛ばせぬなどといふことは、未だ曾てなかつたことなのである。但し言ふまでもなくそれは内心での話なので、人中ではとなると話は全然別である。彼は自分でよく心得てゐた——然るべき事態に立ち到りさへすれば、明日の日にも彼は、自らの良心の神祕的で且つ敬虔な判断を敢へて無視して、大びらにしかも極めて平然と、それら一切の『高尚な動機』などといふものの存在を否定するだらうし、また自分が先頭に立つて、勿論身に覚えがあるなどといふ素振りは鵜の毛ほども見せず、それらの動機を笑ひ飛ばすであらうことを。そして、これまで彼を支配してゐた『色んな低級な動機』を克服して彼は近頃では或る程度の、否むしろ頗る著しい思想の獨自性を贏ちえてゐたにも拘らず、實状はまさに右に述べた通りだつたのだ。それに實際、朝の寢床を起き出ながら彼が、その夜の不眠のあひだに訪れたわれとわが思念や感情を、恥かしく思ひはじめたことも幾度か知れなかつたのである。(ときに彼は、この頃はすつと不眠症に悩んでゐた)自分が大切なことにも些細なことにも、一切について極度に猜疑ぶかくなつて來たことは、彼ももうよほど以前から氣づいてゐて、であるから出來るだけ自分を信用せずにもるに限ると思つてゐた。がしかし、もはや如何にしても實在するものと認めぬわけには行かない事實が生じつつあつた。最近では時とすると深夜に、彼の思念や感覺が平生にくらべて殆んど一變してしまふことがあるし、しかもその大部分は、その日の前半に彼を訪れてゐたものとは似てもつかぬものであつた。これには彼も愕いて、かねて知合ひの仲ではあつた

が兎にかく有名なある醫師に、相談をもちかけたことさへあつた。もちろん冗談に紛らして口を切つたのである。ところが相手の返事はかうだつた——夜間不眠の際とか又は一般に夜間に、思念や感覺が變化を來たすといふ事實、更には二つに分裂をさへ來たすといふ事實は、『激しく思考し激しく感覺する』人々にあつてはひろく認められる事實である。終生渝らなかつた信念でさへ、夜陰と不眠のメラニコリックな影響のもとでは、時として急變を來たす例もある。つまり突如として、譯もいはれもなしに、最も致命的な決斷をとつてしまふものである。しかし言ふまでもなく、これは總べて或る程度にとどまるものであるけれど、もしその本人が自己の分裂を感じる度合が過度になつてをり、ために苦痛を覺えるまでに至つてゐるとすれば、それはもはや疾病の域に進みつつある立派な徴候なのであるから、直ちに何等かの方法を講じなければならない。最もいい方法は生活を根本から變へることと食餌を變へること、又はいつそのこと旅行に出ることである。下劑も無論有効である、云々。

ヴェリチャーニノフは、その先の言葉には耳を借さうとしなかつた。もうそれだけで、彼が病氣なことは完全に證據だてられたのである。

「して見ると、あれはみんな病氣なのだ、あの『高尚な』動機といふ奴は、みんな唯の病氣に過ぎないんだ！」

と、彼は時折り獨り言に、さも忌々しげに叫ぶのであつた。この考へを受け容れることは實に厭は



しかつた。

ところが間もなく、これまで夜の間に限つて起こつたのと同じことが、朝になつてからも繰り返されるやうになつた。違ふ點といへば、夜よりも苦澁さの度合の強いこと、そして悔恨の代りに怨恨を、感動の代りに嘲笑を伴つてゐることである。實際のところそれは、目を追うてますます頻繁に、しかも『不意に何の理由もなしに』彼の記憶に上りはじめた彼の過去の、それも遠い遠い過去の生活の色んな出来事なのであつたが、それが一種特別の形をとつて現はれるのであつた。例へばヴェリチャーニノフはもう餘程以前から、記憶力の喪失を歎じてゐた。彼は知人たちの顔を見忘れて、そのため途で行き逢つた彼等の感情を害するのだつた。つい半年前に讀んだ本でさへ、此頃では何が書いてあつたかすつかり忘れてゐることもあつた。それがまたどうした事だらう？——この打ち消すべからざる、日ましに激しくなるこの記憶力の喪失（それを彼はひどく氣に病んでゐた——）にも拘らず、遠い過去に關する一切のこと、十年十五年とたつて今では忘れ果ててゐる一切のことが、今ごろ突然記憶にのぼることがあるといふのは！——それも巨細にわたつて生々しい印象を伴ひ、實に驚くばかりの精確さをもつて現はれるので、まるでもう一度現實に體驗してゐる思ひがするのである。想ひ起された事實のなかには、それが想ひ起されたといふことからしてが既に奇蹟としか思へぬほどに、忘れ果ててゐたものもあつた。だが、實はそれだけの話ではないのである。一體が世間をひろく渡つて來た人

9

でその人なりの回想がないなどといふことはあるものではないのだ。唯ここで大切なのは、さういふ回想のすべてが、恰も何者かの手によつて豫め處理されたかのやうに、事實に對する全く新しい、意想外な、そして何よりも先づまるで夢想も及ばぬやうな觀點をもつて、現在に立ち返つて來たことである。回想のうちの或る種のもものが、今では彼の眼に純然たる犯罪のやうに映るのは何故だらうか？——しかもそれは、彼の智力が下す判決だけの問題なのではないのだ。なぜなら自分の陰鬱で孤獨でおまけに病的な智力など、彼は信じないでも居られたであらうから。しかも事態は、彼をして呪詛の聲を發せしめるまでに進んでゐた。ほとんど涙を——よし外にあらはれる涙ではないまでも少くも内心の涙を、誘ふまでになつた。實際これがつい二年前なら、お前はそのうちに涙を流すぞなどと人に言はれたにしても、眞に受けはしなかつたに相違ない。それはさうと最初のうちは、甘い思ひ出よりは苦澁な思ひ出の方が、よく思ひだされるのだつた。社交上の色んな失策や屈辱が思ひ起こされた。例へば彼が『或る陰謀家に中傷され』てその結果ある家に入りを差し止められたこと、——また例へばこれはさう古い話ではないが、公衆の面前で完膚ないまでに侮辱されたにも拘はらず、たうとう決闘を申込まずに了つたこと、——また非常な美人が集まつてゐる席上で、辛辣きはまる諷罵をつきつけられながら、何の應答もできなかつたこと、——そんなことが思ひ出された。また、二三の借りつばなしになつてゐる負債のことも思ひ出された。それは孰れもとるに足らぬ金高には違ひなかつたが、と



にかく紳士同志としての借金であり、かてて加へてその相手は彼がすでに絶交して、悪口を言ひ廻してゐる人達なのであつた。實に馬鹿げたことで蕩盡してしまつた二つの財産——それは二つとも相當なものだつた——のことも思ひ出されて、やはり彼を苦しめた（尤もこれは餘程癪のたかぶつた時に限つてゐたが）。しかしさうかうするうちに、『高尚な』方のことも思ひ出されはじめた。

一例をあげると、突然、それこそ『譯もいはれもなし』に、忘れてゐたどころか綺麗さつぱりと忘れてゐた或るお人好しの老官吏の面影が念頭に甦つて來たりした。それは胡麻鹽頭の馬鹿げた男だつたが、彼はいつだつたか遠い昔のこと衆人環視の中でその男を侮辱し、しかも何の返報も受けずに済んだ事があつたのだ。事の起りはただ空威張りがしてみたかつただけの事で、つまり折角浮かんだ或る滑稽な巧い洒落を無駄にするに忍びなかつただけの話である。尤もその洒落は大いに彼の男振りを上げ、人々の口から口へ繰返されたものだつた。この事實はすっかり忘れてゐたので、その一件の顛末は残らず不思議なほどはつきりと直ちに腦裡に浮かび出ながら、くだんの老人の苗字すら思ひ出せないやうな始末だつた。彼はその老人が、嫁入りざかりの歳も過ぎてまだ自分と一緒に暮らしてゐ、そろそろ市中に何かと噂の立ちはじめてゐた娘のことを、その時しきりに辯護してゐたのをありありと思ひ出した。老人はいきり立つて抗辯しかけたが、そのうち急に公衆の面前でおいおい泣き出す始末に、一座は幾らか感動を受けたほどだつた。とどのつまり一同は笑談に彼を三鞭酒に酔ひつぶして、

たらふく笑ひ轉げて、それでお仕舞ひになつた。そして今、『譯もいはれもなしに』ヴェリチャーニノフがその爺さんが赤ん坊のやうに兩手を顔に押し當てておいおい泣いた姿を思ひ出したとき、突然彼には、まるで自分がついぞあの事を忘れたことなどありはしなかつたやうな氣がしたのである。おまけに奇妙なことには、あの時は一部始終が頗る滑稽なものに思はれてゐたのに、今ではまるで反對で殊にその細かな點、つまり兩手で顔を蔽つたことなどは、滑稽どころの騒ぎではないと思はれたのである。それからまた彼は、ほんの冗談口に或る小學教員の頗る美しい細君を誹謗し、しかもその誹謗が夫の耳に入つたことを思ひ出した。ヴェリチャーニノフは間もなくその町を去つたので、彼の誹謗がどういふ結末を告げたかは知らなかつたが、今になつて彼は遽かにそれがどんな結果になつたらうかと想像しはじめたのであつた。——そしてもしこのとき突然、一人の娘についての遙かに近頃の回想が浮かんで來なかつたら、彼の想像はどこまで擴がつて行つたか分かつたものではなかつた。それは賤しい町人の娘で、彼の方では別に好きだつた譯でもなく、また正直のところそんな女と關係をつけたことを恥ぢ入つてさへゐたものだが、にも拘はらず吾ながら有耶無耶のうちにその女に子供を生ませ、その擧句あつさり赤ん坊もろとも振り棄ててしまつたのだつた。ペテルブルグを去るときには別れの言葉すら交はさなかつた始末である（尤もその時間もなかつたけれど）。この娘のことは、その後になつてまる一年もかかつて尋ねてみたけれど、もうその時は何としても捜し出せなかつた。それ



はさうと、かうした種類の思ひ出は幾百となく浮かび上がつて来るのだつたし、おまけに一つの思ひ出はその背後に何十といふ別の回想を曳きずつて来るやうな始末だつた。だんだんと彼の虚榮心も苦しみだして來た。

私達はすでに、彼の虚榮心が或る特別な形に變化してゐたことは申して置いた。それは實際のことだつたのである。どうかするとちよいちよい（尤もこれは稀のことだつたが——）彼はひどい自己忘却に陥ることがあつて、自家用の馬車のないことも、徒歩で裁判所から裁判所へ歩き廻つてゐることも、身装りがいささかだらしくなつたことも、一向恥かしく思はない程であつた。——そしてかういふ場合、昔馴染の誰かが往來で彼に嘲りの視線を呉れようが、或ひはわざと知らん振りをしようが彼は實際のところ厭な顔一つしないで済ませるだけの氣位は具へてゐたであらう。この平氣な顔は實に本心から出たもので、必らずしも見得や外聞だけのものではなかつたのである。言ふ迄もなくこんなことは稀にしかないことだつた。つまりそれは自己忘却と興奮の刹那だけのことであつたが、とにかく彼の虚榮心は次第次第に従來普通だつた動機から遠ざかつて、絶えず彼の心に浮かんで来る或る問題の周りに集中しはじめたのである。

『どうやらこりやあ』と彼はときどき自嘲的な調子で考へはじめたのだつた（一たい彼は自分のことを考へる時は殆んど常に自嘲的な調子でやり始める男だつたが）、『どうやらこりやあ、誰か俺の行

狀を矯めてやらうとお節介を焼く奴があつて、さてこそこんな厭らしい回想や「悔恨の涙」を差し向けて來ると見えるわい。どつこい、さうは問屋が卸さんぜ！ 所詮は空彈でぼんぼんやるやうなものさ！ 一たい俺は先刻承知なんだ、承知どころか知り抜いてるんだ、そんな悔恨の涙をいくら流したところで、そんな自己の譴責をいくらやつたところで、馬鹿げた四十面を下げながら、この俺にや一家の見識なんてものは雀の涙ほどもありはしないんだ！ 論より證據、明日の日にも何か誘惑が出て來てみる、さうさ、例へば又してもあの教師の細君が俺の贈物を受けたといふ噂を弘めるのが俺にとつて好都合な場合が生じたらば、——俺はきつとそいつを弘めるにきまつてゐる、けろりとしてな。——おまけに事は今度が初めてぢやなく二度目なんだから、初めての時より一層醜惡な厭らしいものになるだらう。それとも又、あの公爵の小倅がいま此處へ出て來て、もう一ぺんこの俺を侮辱して見ろ、彼奴は母ひとり子ひとりの大事な息子で、十一年前にこの俺が彈丸で片脚折つてしまつた奴だが、——俺は即刻奴に決闘を申し込んで、もう一ぺん義足の御厄介にならせてやる。要するに空彈に過ぎんだ、何の足しにもなりはせんのだ。第一、自己を脱却する術と來たら爪の先ほどの心得もないこの俺が、過去のことを思ひ出したとて何になるものか！』

ところで、教師の細君との一件は二度と繰返されず、誰も義足の厄介になるやうな目には逢はされなかつたけれど、ただもしさうした破目に立ち到つたらきつとさうしたことが再演されずに済むもの



ぢやないといふ考へ一つが、殆んど死ぬほどの苦痛を彼に與へるのだつた。……時たまではあつたけれど。だが實際のところ、人間のべつ幕なしに悩んでばかりも居られないものである。幕間には、一服やりにぶらぶらしても差支へないのである。

實のところヴェリチャーニノフも屢々それをやつた。つまり彼は幕間の漫歩を試みる氣ではゐたのだが、にも拘はらずペテルブルグの彼の生活は、時とともに益々面白くなるばかりだつた。たうとう七月も間近になつてしまつた。ときどき彼の頭には、何もかも、例の訴訟までも抛<sup>ほう</sup>り出して、行き當りばつたりは何處かへ、それも出し抜けに思ひもかけずといった鹽梅式で、例へばいつそクリミヤへでも遠走つてしまへといふ決意が、閃くことがあつた。だが大抵は一時間もすると、もう彼はこの考へを輕蔑して、先づかういつた嘲笑を浴びせかけるのが常だつた。——『この厭らしい想念と來たら、一度はじまつたら最後、またこの俺に些かなりとも人格といふものがある以上、どんな南へ逃げ出したところで金輪際やまるものぢやないんだ。だからつまり、そんな想念から逃げ出すにも當らんし、また第一さうする理由もありやしないんだ。』

『それにまた、逃げ出してどうしようつて云ふんだ』と彼は自棄つぱちで理窟をこね續けた、『なるほどこの市は頗る埃<sup>まち</sup>つぽい、蒸暑い、おまけにこの宿と來たら何から何までひどく薄汚ない。色んな用事で眼の色を變へてゐる連中にまじつて俺がうろつき廻る裁判所と來たら——それこそ二十日鼠み

たいな氣ぜはしさ、古着市場へでも行つたやうな騒ぎだ。どこへも出掛けずにこの市に残つてゐる人達、朝から晩まで鼻先をちらちらしてゐるそれらの顔といふ顔には、——彼等の利己心だの、惡氣のない無自覺な鐵面皮さだの、怖<sup>おっか</sup>なびつくりな小心さだの、鶏<sup>けい</sup>みたいにくせくせした根性だの、無邪氣なくらゐ出しつ放しになつてゐる、——實にこの町こそ、大眞面目で言つてヒポコンデリー患者にとつて極樂淨土なのだ！ 何から何まで開けつ放しではつきりしてゐる。誰一人として、別荘だの外國の溫泉場だのでわが國の奥さん方がよくやるやうな、隠し立てといふことをてんで入用とも考へてゐない。——だからつまり、何事にまれざつくばらんで率直でありさへすれば、それだけでもう遙かに尊敬に値するといふ譯なんだ。……いいや、何處へも行くことぢやないぞ！ よしんば此處で身を滅ぼすとも、金輪際ここは動かんぞ……』

## 二 帽子に喪章をつけた紳士

七月の三日だつた。息ぐるしさと暑氣は堪へられぬほどひどかつた。この日はヴェリチャーニノフにとつても多忙な日だつた。午前中は徒歩や馬車で駆けずり廻らなければならなかつたし、おまけに



まだその先には、是非とも今晚のうちに或る必要な人間——これは法律通で五等文官の地位にある紳士だが——を、どこか黒河（譯註。——ベテルブルグの西北約五十軒、芬蘭灣に臨む風光明媚な避暑地。）邊の別荘に訪ねて、不意打ちを喰はせなければならぬ要件が横はつてゐた。五時を廻るとヴェリチャーニノフはやつとのことで、ネフスキイ通りの警察橋の袂にある或るレストラン（頗るあやしげな板前だがとにかく佛蘭西料理の）の扉を押して、いつもの通り隅つこの定め卓子に陣取り、例日どほりの夕食を命じた。

彼は毎日ルーブルの夕食を認めることにして、但し別勘定ときめてゐた。そしてこれを、自分の傾いて來た財政状態に捧げられる賢明な犠牲と觀念してゐた。一體どうしてこんな汚らしい物が食へるのだらうと内心には呆れながら、それでゐてその都度さながら三日三晩も絶食したあとのやうな旺盛な食欲で、最後の一片まできれいに平らげてしまふのだつた。

『こりやどうも病的だな。』

と彼は、時々自分の食欲に氣がついて、獨り言を言ふのだつた。ところが今日はその彼が、頗る御機嫌ななめの態でいつもの卓子に陣取ると、腹立たしげに帽子をそこらへ抛り出し、そのまま頰杖をついて考へ込んでしまつたのである。もし今この時、隣の卓子で食事をしてゐる客がどうかした拍子で浮かれ出したり、それとも御用を伺ひに來たボーイが彼の希望を最初の一言で覺らなかつたりしたら、それこそ事である。平生は頗る禮儀正しく振舞ふすべも心得てゐるし、また時と場合によつては

物に動ぜぬ尊大さを見せもする彼ではあるけれど、今日の様子ではてつきり士官學校の生徒みたいに喚きだして、恐らく一悶着もちあげるに相違ない。

スープが出たので、彼は匙をとつたが、一掬ひもせぬうちに遽かに匙を卓上へ投げ出して、椅子から跳びあがらんばかりの恰好をした。ある思ひもかけぬ考へが突如として彼を襲つたのである。といふのはつまりその瞬間——どういふ筋道を辿つてかは皆目わからないが——矢庭に自分の煩悶の原因をはつきりと悟つたのである。それは、もうこれで數日のあひだぶつ通しに、いや最近ずつと悩まされ續けて來た、或る特殊格別な煩悶であつたが、それがどうした譯だか彼に纏はりついたなり、どうしても離れようとしなないのだつた。が今や彼は、一ぺんにその全貌を見抜いたのである。己が五本の指のやうにはつきりと見てとつたのである。

『こりやあみなあの帽子のせゐなんだ！』と彼は、まるで靈感でも得たもののやうに呟いた、「あの胸くその悪い喪章を卷いたあの忌々しい中山帽子だ。あれ一つが一切の原因だつたのだ！」

彼は考へはじめた、——そして考へ込めば考へ込むほど益々彼は不機嫌になり、『その出來事の全體』なるものが、いよいよ彼の眼には異様に見えて來るのだつた。

『だが待てよ……一體あれは、出來事といふほどのものかな？』と彼は自分を信ぜずに、抗辯して見た、『あれに何かしら出來事らしいものが少しでもあるかしら？』



事の次第はつまり斯うなのである。もうかれこれ二週間ほどになるが（本當のところは覚えてゐないが、とにかく二週間まへのやうに思はれるのだつた）、彼は初めて往來で、ボヂヤーチェスカヤ街とメシチャンスカヤ街の街角の邊だつたが、帽子に喪章をつけた一人の紳士に出喰したのだつた。その紳士といふのは、別にこれも取り立てて變つたところもない世間並の人品で、さつさと通り過ぎて行つたけれど、ただそのときヴェリチャーニノフの顔をちよいと氣になるほどぢつと見つめて、その途端にどうした譯か彼の注意は極度に相手に惹きつけられてしまつたのだつた。少くもヴェリチャーニノフには相手の顔附は見覚えがあるやうな氣がした。たしかに何時か何處かでこの顔を見かけたことがあるのである。

『と云つたところで、何しろ俺も生まれてこの方、何千と知れない顔にお目にかかつて來たものな——一々思ひ出すわけにも行かんて！』

二十歩も行き過ぎると、さうした妙な第一印象だつたにも拘はらず、彼ははやこの出會ひのことを忘れてゐるやうな風だつた。ところがその印象は終日拭ひ去られなかつたばかりか——かなり奇妙な印象をとどめたのだつた。つまり、何だか一種特別な、漠然たる憎念として残つたのである。彼は二週間を経た今になつて、かうしたことを残らずはつきりと思ひ浮かべた。同時にまた、一體どこからそんな憎念が湧いて來たものやら、その時は全く見當もつかず、沉んやその日ひと晩ぢう彼を苦しめ

たあの不快極まる氣持を、その朝の出會ひに結びつけ乃至は思ひ合はせて考へようなどとは思つても見なかつたこと——を思ひ浮かべた。ところがその紳士の方では、躍起になつて自分のことを思ひ出させようと掛かつて來て、その翌日もまた、ネフスキイ通りでヴェリチャーニノフと面とつき合はせ又もや一種異様な眼で彼を見つめた。ヴェリチャーニノフはべつと唾を吐いたが、吐いた途端に俺はなぜ唾なんか吐いたのだらうと怪訝に思つた。——實際、一目みるや直ちに、漠然とした是といふ目當でもない嫌惡の情を咬るやうな顔附があるものである。

『いや、俺はたしかにあいつには何處かで出喰はしたことがあるぞ。』

と彼は、その出會ひから半時間ほどして、すつかり考へ込んで呟いた。それから又してもその晩は一晩ぢう實に不快な氣持で過ごしたのである。のみならず夜半には何か厭な夢まで見たのであるが、それでも矢張り、この新らしい一種特別な憂鬱の原因が残らず先刻出會つた喪章の紳士にあるなどは、その晩一再ならず彼のことが思ひ浮かべられたにも拘はらず、一度だつて念頭にのぼりはしなかつた。それどころか却つて、『あんな碌でなし』のことがかう何時までも思ひ出されて來るのが、この大事な場合癪でならなかつた。そんな譯だから、自分の不安な思ひの一切はその男のせゐではあるまいかななどと云ふ考へが萬一念頭に萌してもしたなら、彼は恐らく屈辱にさへ感じたに相違ない。ところが、それから二日すると彼等は又もや、ネヴァ河通ひの蒸汽船の出口の人混みの中で出會つてしま



つた。この三度目の時にはヴェリチャーニノフは、帽子に喪章をつけたその紳士が相手が彼と知つて、人混みに隔てられ揉みくしやにされながら、わざわざ人波を掻きわけて彼の方へ近づいて來たに違ひない、てつきりさうに違ひないと思つた。そののみか、『臆面もなく』彼に向つて手を差しのべたやうにさへ思はれた。のみならず、ひよつとしたら大聲を出して彼の名を呼んだかも知れない。尤もその聲をヴェリチャーニノフはつきり耳にした譯ではない。が、しかし……。

『だが一體あん畜生は何者なんだらう？もし本當にこの俺を知つてて、それほど傍へ來たいんならさつさとやつて來ればよささうなもんぢやないか？』

と彼は辻馬車に腰をおろし、スモリーヌイ修道院（譯註。ネヴァ河畔にある。當時は貴族女學校になつてゐた。）の方へ向かひながら、忌しげにさう考へた。それから半時間のちには、彼はもう自分の辯護士と議論をして大聲で喚き散らしてゐたのだが、晩方から夜へかけては又もや、何ともかとも厭はしい、奇怪きはまる憂鬱に沈んでしまつたのだつた。

『こりや黄痘にでもなつたんぢやないかな？』と彼はぢつと鏡を見ながら、疑はしげに自分に問ひかけるのだつた。

それが三度目の邂逅だつた。それから五日ほどといふものは、彼は絶えて『誰にも』出喰はさず、『あの野郎』なるもののことは噂にさへ聞かずに過ごした。でありながら、帽子に喪章をつけた例の

紳士のことは、ひつきりなしに念頭に浮かんで來るのだつた。かうなるとヴェリチャーニノフも、幾分呆れ氣味で、自分の氣持を思ひ咎めざるを得なかつた。

『ぢやつまり彼奴のことが胸糞が悪くてならんとでも云ふのかね？——ふん！……だがあの男だつてきつと、このペテルブルグでどつさり用事を抱へてゐるに違ひなからうぢやないか、——それにあの喪章は誰のためなのかな？向ふでは確かに俺を知つてゐる、が俺の方ぢやどうも思ひ出せん。だが何だつてあゝした連中は喪章なんか着けるんだらう？あの男にはどうも似つかんがなあ。……だが待てよ、もつと近くへ寄つて眺めたら、奴が誰だつたか思ひ出せさうな氣もするなあ。……』

すると彼の追憶のなかで、何ものか蠢きはじめたやうな氣がした。それはよく知つてゐながら、どうかした拍子にひよいと胸忘れした言葉を、一所懸命に思ひ出さうとしてゐるやうな具合だつた。その言葉は實によく知つてゐるのである——且つ自分がそれを知つてゐるといふこともちゃんと知つてゐるのである。またその言葉の意味も知つてゐるし、現にその鼻先まで辿りついてゐるのだが、それがどうしたものかいくら頑張つても、その言葉が思ひ出されるのを嫌つて、いつかな出て來ない。——まあそんな具合だつた。

『あれはその……たしかだい昔に……何處やらであつたことだな……たしかその時……その時それ……。ええ、勝手にしろ、あつたことか無かつたことか、どつちだつて構はんぢやないか！……』



と彼は急に忌々しげに叫んだ、『それに第一、とるにも足らんあんな野郎のことをくよくよ氣に病むなんて、俺の名折れになるだけだ!……』

彼は凄い劍幕でいきり立つた。ところがその晩になつて、先刻自分が『凄い劍幕で』いきり立つたことを不圖思ひ出すと、ひどく不愉快になつてしまつた。妙な眞似をしてゐるところを誰かに見つかつたやうな氣持だつた。彼は狼狽し、且つ驚き訝しんだ。

『して見ると、譯もいれもなく……たつた一つの思ひ出のことで……俺があんなにむしやくしやするのは、やつぱり何か曰くがあるに相違ないぞ……』

彼は自分の想念を中途でおつぽり出してしまつた。

ところがその翌る日になると、彼は一層向つ腹を立ててしまつた。が、今度は腹を立てる理由が立派にあるし、自分の怒りは正當だと思はれた。相手が『前代未聞の無禮な仕打ち』をしたのである。といふのはつまり、四度目の邂逅があつたのだつた。喪章をつけた紳士はまるで地から湧いて出たやうに、まともや姿を現はした。それは丁度ヴェリチャーニノフが往來で、例の五等官を首尾よく捉まへたばかりのところだつた。これは前にも言つた通り彼にとつて必要な人物で、よくよくの場合には不意に別荘へでも押しかけて行つて捉まへる他はあるまいと覺悟をきめてまで、いまだに探し廻つてゐたところであつた。何故それほどに熱心かといふと、この役人はヴェリチャーニノフにとつて殆ど

面識もない間柄ながら、とにかく今度の訴訟事件については是非とも會つて置かねばならぬ人物なのに、向ふでは相變らずぬらりくらりとすり抜けてばかりゐて、今になつてはもう、ヴェリチャーニノフに逢ふのが厭さに百方手をつくして逃げてゐるとしか見えないのだつた。だから、やつとこさでその彼に出喰はせたと思ふとすつかり嬉しくなつて、ヴェリチャーニノフは相手の眼色をうかがひうかがひ彼と肩を並べて足早に歩を運びながら、何とかしてこの白髪頭の老獺漢がうつかり口を滑らして、自分が久しい前から待ちあぐみ求めあぐんでゐる或る一言をひよいと漏らしさうな、さういふ話題の方へ彼をおびき出さうと懸命になつてゐた。ところが相手の古狸もなかなかさる者で、急所を笑ひにはぐらかしたり、聞こえぬふりを極め込んだり、巧者に引つ外して行く——といふ實に何とも氣が氣でないその瞬間に、ヴェリチャーニノフの視線はふと、往來の向ふ側の歩道に、帽子に喪章をつけた例の紳士を見出したといふ譯であつた。彼はそこに突立つて、じつと二人の方を見つめてゐた——少くもそれは明かだつた。おまけにどうやら、嘲笑さへ浮かべてゐるらしかつた。

『ええ、畜生め!』五等官の後姿が見えなくなるとヴェリチャーニノフは、折角の大きな魚を取り逃がしたのもあの『破廉恥漢』が不意に姿を現はしたせゐだと思つて、すつかり業を煮やしてしまつた。

——『畜生、あいつ俺の内懷をさぐらうとしてゐると見えるぞ!』とにかく俺のあとをつけ廻してゐることは確かだ! 誰かに頼まれたのかな……。それに……それにあいつは、確かに嘲笑ひやがつたぞ!



よし斷然目にも見せて呉れる……ちえつ、ステッキがないのが残念だわい！ よしステッキを買はう！ このままぢや濟まされん！ 一體あいつは何者だらう？ 何としてもあいつの正體が知りたいものだ』

そして到頭——この（つまり四度目の）邂逅ののちちょうど三日たつて、私達は前に書いたやうにあのレストランで、すっかりもう興奮し切つて、幾分は茫然自失の氣味ですらあるヴェリチャーニノフの姿を見出すわけである。なんぼ傲慢な彼でも、この自分の状態だけは認めない譯には行かなかつた。今度といふ今度は彼も、一切の事情を思ひ合はせて見て、自分にとりついた鬱ぎの蟲、この只事ならぬ悶々の情、そしてこの二週間にわたる不安——それらの一切の原因は、『取るにも足らぬ下らん奴ではあるけれど、』やつぱりあの喪章の紳士に他ならぬことに思ひ當らざるを得なかつた。

『なるほど俺はヒポコンデリー患者かも知れん』とヴェリチャーニノフは考へた。『で、そのため蠅ほどのことが象ほどに見えるのかも知れん。だが然し、かうした事がみんな恐らくは幻想に過ぎんだらうなどと思つて見たところで、それで一たい氣が休まるものだらうか？ 全く、あんなならず者が出てくる度毎に人間一匹が根もとから引繰り返されてしまふものとしたら、つまりそりや……つまりそりやあ……。』

實をいへば、今日の（といふのは五度目の）邂逅がヴェリチャーニノフをひどく動揺させたのは、

象ほどのことがまるで蠅ほどにしか見えなかつたからであつた。その紳士は例の通り素早く傍をすり抜けて行つたのだが、今日はヴェリチャーニノフの方を見やりもせず、いつものやうに彼を知つてゐるやうな素振りも見せず、——打つて變つて伏眼になつて、何とかして相手の眼に觸れたくないと望んでゐるやうな様子だつた。ヴェリチャーニノフはくるりとあとを振り返ると、あらん限りの聲で呼びかけた。——

「あ、もしもし君！ 喪章の先生！ 今日は逃げるんですかい！ 待ち給へ、君は一たい何者です？」

この問ひも（そして絶叫も）、頗る筋のとほらぬものであつた。だがそれにヴェリチャーニノフが氣がついたのは、もう嘔鳴つてしまつた後だつた。この叫びに應じて、例の紳士は振り返つて、ちよつと足を停め、困つたやうな顔をし、にやりと笑ひ、何やら言ひたげな風をし、何か爲たげな素振りを見せ、——ほんの一瞬間、ひどく迷つたやうな態度をありありと示したが、急に背を返すと、そのまま振り向きもせずすんすん行つてしまつた。ヴェリチャーニノフは呆れてその後姿を見送つた。

『だが待てよ』と彼は考へた。『本當のところは、奴が俺につき纏つてのぢやなくて、逆にこつちが奴に付き纏つてゐるんだとしたら、ただそれだけのことだとしたら、一體どうなるんだ？』

夕食を済ますと、彼は急いで例の五等官の別荘へ出掛けて行つた。相手は留守だつた。『朝がたお出掛けになつたまま、まだお歸りになりません。今日は誕生祝ひのお招ばれで都へおいでですから、



夜中の二時か三時すぎでなければ先づお戻りはありますまい』といふ挨拶であつた。實に『失敬きはまる』挨拶だと思つたので、一時は赫としてしまつて、ヴェリチャーニフはその足で誕生祝ひの席へ乗り込んでやうかと思つたし、また實際にも馭者にさう言ひつけたのだつたが、途中で道のりの遠いことを考へだすと、そのまま馬車を乗り棄てて、大劇場ボリショイ・テアトルの傍の宿まで足を引きすり引きすり歸つて來た。彼は運動の必要を感じてゐたのである。興奮しきつた神経を鎮めるには、不眠症も何もあつたものではない。是が非でも夜の熟睡が必要だつた。ところでぐつすり眠るには、せめて肉體なりと疲らせなければならなかつた。といふ譯で彼が宿へ辿りついたのは、何しろちつとやそつとの道のりではなかつたから、もう十時半だつた。——そして實際ひどく草疲れた。

この三月に引移つたその宿のことを、彼は自分ながら言譯がましく、『ほんの一時の雨しのぎ』だとか、あの『忌々しい訴訟沙汰』のお蔭で思ひもかけずペテルブルグへ『沈没に及んで』しまつたとかさもさも憎さげに腐したり罵つたりしてゐたが、——その實どうしてこの宿は、彼がいふほど悪くも無様でもなかつた。なるほど入口は少々暗いし、門のくぐりの邊は『薄ぎたない』には違ひなかつたけれど、二階にある彼の住家と來たら、ひろびろとした、明るい、天井の高い二間ふたまから成り立つてゐて、あひだにある薄暗い控間で隔てられてゐる。といふ譯でひと間は往來に面し、もう一つは中庭に臨んでゐた。窓を中庭に開いてゐる方の部屋の横手には、小さな隠れ間が附屬してゐて、これは寢室

に宛てるやうになつてゐる。ところがヴェリチャーニフは、この小部屋に本や書類をこちやこちやと散らかして、寝るのは大部屋の一つ、つまり往來に窓を開いた部屋にしてゐた。寢具は安樂椅子の上に敷いて貰つた。家具類は相當使ひ古したものであつたが、なかなか立派だつたし、そのうへになほ貴重な品も幾らかあつた。それは以前工面のよかつた頃の名残りで、陶製や青銅製の玩具だの、大きな正銘のブハラ絨毯などといった類ひである。二枚の相當な晝も残つてゐた。とはいへそれらは皆、ペラゲーヤといふ小間使の少女が彼を一人残して、ノヴゴロドの親戚へ休暇をとつて歸つてからといふもの、何もかも散らかり放題、亂れ放題になつてゐて、おまけに埃をかぶつてゐるといふ始末だつた。とにかくまだ紳士の體面は保つて行きたく思つてゐるヴェリチャーニフであつて見れば、年頃の獨身娘が同じく獨身の世なれた男の傍に召使はれてゐるといふ妙な事實に思ひ到るたびに、そのペラゲーヤの奉公振りには至極満足ではありながら、やはり赤面せずにはをられなかつた。この娘は、今では外國へ行つてゐる彼の知り合ひの家庭に使はれてゐたのだが、彼がこの春いまの宿を借りた時からこつちへ住み替へて來て、部屋の整頓をして呉れたのだつた。しかし彼女が歸つて行つてからも、彼はほかの小間使を置かうといふ氣にはなれなかつた。また急場の凌ぎに従僕を傭ふほどのこともなかつたし、第一彼は、従僕といふものが嫌ひでもあつた。といつた譯で、部屋の掃除には毎朝マーヴラといふ家番の女房の妹に來て貰ふことになつて、彼は外出するときは鍵をその女に預けるの



だつた。ところがその女はただ金をとり込むだけの話で全く何一つして呉れず、どうやら手癖もよくないらしかつた。彼の方ではもう諦めて一切見ない振りで済まし、やつと一人きりの生活ができるやうになつたことに寧ろ満足を感じてゐた。とはいへ、物には總べて程合ひといふものがある。——で時々、蟲のゐどころの悪い時などには、かうした『薄汚なさ』が神経に障つて何としても我慢がならず歸宅するときはまづ大抵、むかむかするやうな氣持で部屋へはいるのであつた。

ところが今日ばかりは、ろくろく着物も脱がぬうちからいきなり寢床へ飛び込んで、もう一切何事も考へまい、是が非でも『今すぐさま』眠つてしまはうと、いらいらして思ひ定めた。そして不思議なことには、頭が枕に觸れるが早い、たちまち睡りに落ちてしまつた。これはここ一ヶ月來、たえてなかつたことだつた。

彼は三時間ほど眠つたが、安らぎのない睡りであつた。熱病のときに見るやうな、何だか妙な夢をみた。何でもそれは、彼が或る犯罪をおかして、それを匿してゐるところらしく、おまけに何處からとも知れずひつきりなしに彼の部屋へ押しかけて來る人々が、異口同音に彼の罪を鳴らすのであつた。集まつた群衆は怖ろしいほど澤山で、おまけに引きも切らず後から後からと部屋へはいつて來るため、扉はもう閉まらなくなつて、あけつばなしになつてゐた。ところが彼の全身の注意は、やがて一人の奇妙な男に集中されてしまつた。それはその昔彼が非常に親しくしてゐた友人で今では死んで

ゐる筈なのに、どうしたものか群衆にまじつていきなり彼の部屋にはいつて來たのであつた。ヴェリチャーニノフにとつて何よりももどかしくてならないのは、その男が何者なのか分からず、名前も胸忘れして何としても思ひ出せないことだつた。彼に分かつてゐることは、その昔自分が非常に好きだつた男、といふことだけだつた。押しかけて來た他の連中はこの男の口から、ヴェリチャーニノフの有罪無罪をきめる最後の一言の漏れるのを待つてゐるらしく、みんなじりじりしてゐた。しかしその男は卓子の前に腰をおろしたまま身じろぎもせず、默然として口を利かうとしなかつた。喧騒はやまず、苛立たいしい空氣はますます濃くなつて行つた。と突然ヴェリチャーニノフは赫として、その男が口を開かうとしないのを理由に殴りつけた。するとそのため異様な快感をおぼえた。彼の心臓は自分のしたことに對する恐怖と苦痛のため、じいんと凍りつく思ひだつたが、しかもこの惡寒のなかに快感が籠つてゐるのだつた。怒りの燃え狂ふにまかせて彼は二度三度と續けざまに殴りつけながら、忿怒と恐怖から來る一種酔ひ痴れたやうな氣持は、ほとんど狂氣の境にまで來てゐたが、しかもそのなかには無限の快感も籠つてゐるのだつた。そして彼はもはや自分の揮ふ鐵拳の數も知らず、のべつ幕なしに殴りつづけた。彼はあれを一切合財、残る隈なく粉碎してしまひたかつたのだ。と不意に何事かがもちあがつた。一同は物凄い叫び聲をあげて、何ものかを待ち設けるやうに扉の方を振り向いた。するとその瞬間に、扉口の鈴が三度けたたましく鳴つたが、その烈しさといつたらまるで鈴を扉



からもぎとらうとでもするやうだつた。ヴェリチャーニフははつと眼を覺ますと、忽ち吾に返つてがばと寢床からはね起きざま扉口へ駆け寄つた。いま鈴が鳴つたのは夢ではない。何者かが本當に今しがた案内を乞うたのだ——と、彼は固く思ひ込んだのである。

『あんなにもはつきりした、あんなにも眞に迫つた、ありありと耳に聞こえる鈴の音が、ただの夢にすぎんとしたら、それはあんまり不自然ではないか!』

ところが意外なことには、その鈴の音もやはり夢だつたことが分かつた。彼は扉をあけて玄關へ出て見た。階段まで覗いて見た。——が人つ子ひとりゐはしなかつた。鈴はだらりと揺れもせず下がつてゐた。意外ではあつたが、とにかくほつとした氣持で、彼は部屋へ引き返した。蠟燭に火を移しながら彼は、扉はただ閉めたきりで、錠もおろさず掛金もかけてないことを思ひ出した。尤もこれまでも、歸宅してつい何の氣なしに夜の戸じまりをし忘れることは再々のことだつた。そのためペラゲーヤから小言を喰つたことも二三度あつた。彼は扉の錠をおろしに控間へとつて返して、もう一度開けて玄關を覗いて見、そして内側から掛金をおろした。が鍵を廻すのはやつぱり億劫なのでやめにした。時計が二時半を打つた。してみると三時間眠つた譯である。

夢のためすつかり氣が立つてしまつたので、彼は直ぐさま寢床に戻る氣もしなかつた。で彼は、三十分ほど——つまり『葉巻を一本喫ひ切るあひだ』、部屋の中をぶらぶら歩いて見ようと決心した。手

早く着物をつけると、彼は窓ぎはに寄つて、厚ぼつたい花緞子の窓掛をもたげ、その外の眞白な捲上カーテンを少し上げて見た。往來はもうすつかり明るくなつてゐた(譯註。いはゆる。白夜である。)。明るいペテルブルグの夏の夜は、いつも彼の神経を苛立たせずにはゐないし、殊に近頃では彼の不眠症を募らせるばかりなので、彼は二週間ほど前にわざわざ自分の部屋に、すつかり下ろしてしまへば光を透さぬ厚手の緞子の窓掛をつけさせたのであつた。明るい光の流れ込むにまかせ、卓上にともした蠟燭のこと忘れて、彼は相變らず何やら重苦しい惱ましい感情を抱きながら、部屋のなかを行きつ戻りつしはじめた。夢の印象が依然として作用してゐた。あの男に自分が手を振りあげた、殴りつけた——それから来る深刻な苦悶がまだ疼いてゐた。

『しつかりしろ、あの男なんて居はしないんぢやないか、この世にゐたことだつてありはしないんぢやないか。あれはみんな夢なんだ、一たい何を俺はくよくよしてゐるんだ?』

ひどく腹立たしい氣持で、まるでそこに自分の一切の惱みが凝つてゐてもするやうに、彼は愈々自分分は病氣になりかけた、『病人』になりかけてゐる、と考へはじめた。

自分が老い込んで來たこと乃至は衰へて來たことを意識するのは、彼にとつていつも辛かつた。で彼はむしろしやすする時には、わざと自分を焦らすため、この二つを意地悪く誇大して考へるのが常だつた。



「老境さ！ すつかり老い込んで来たのさ」と彼は歩きながら呟いた、「記憶力はなくなるし、幻影には脅かされるし、夢は見ると、呼鈴は鳴るし……。ええ、畜生！ 今までの経験で知つてゐるが、俺があんな夢をみるのは必らず熱病の起こる前觸れだつたつけ……。一體あの喪章先生の『一件』だつて、やつぱり夢らしいぞ、いやさうに極まつてる。俺が昨日考へたことは、ありや斷然ほんとだつたのだ。つまりこの俺が、この俺の方で奴に付き纏つてゐるんで、向ふが俺に付き纏つてゐるんぢやないんだ！ 彼奴を種に夢物語をでつち上げて置きながら、自分で怖くなつてテーブルの下へ潜り込んだといふ次第なんだ。それに俺は、あの男のことを野郎だなんて呼んだんだらう？ 頗る立派な紳士かも知れんぢやないか。そりや御面相はあまりぞつとはしないが、さりとて別にこれと取りたてていふほど厭らしいところもないんだ。身なりだつて十人並みだ。ただあの眼附きが何となく……。いや、また始まつたぞ！ またしても彼奴のことだ！ ええ、奴の眼附がこの俺に何だといふんだ？ ああ……。碌でなしがゐないぢや、俺が生きて行けないとでも言ふのかい？」

彼の腦裡に相ついで湧きあがつて来た想念のなかに、やはり彼の心をひどく傷けた或る一つの想念があつた。つまり不意に彼は、あの喪章の紳士は、その昔彼が友達づきあひをしたことのある男に違ひない、そして今になつて彼と出喰はすたびに嘲笑を浮かべるのは、何か彼の過去の大きな秘密を知つてゐるからなのだ。おまけに現在かうも尾羽うち枯らした彼の境涯を眼にするからなのだ——どう

してもさうに違ひないと思つたのである。窓をあけて夜氣を吸はうと思つて、彼は何氣なく窓ぎはに歩み寄つた。と突然、彼はぞつと顫へあがつた。曾て見たことも聞いたこともない異様な何事かが、思ひもかけず眼前で行はれつつあるやうな氣がしたのである。

窓はまだ開けてはなかつたけれど、彼はいそいで窓の側壁に退り込んで身をかくした。と忽然として彼の眼には、往來の向ふ側、ちようど家の眞向ひにあたる人氣のない歩道のうへに、帽子に喪章をつけた例の紳士の姿が映じた。紳士は彼の窓へ顔を向けて歩道に佇んでゐたが、たしかに彼が覗いてゐるとは露しらず、何事か思ひめぐらすやうな風で、じろじろと家の様子を窺つてゐるのだつた。打ち見たところ、何かしきりに思案しながら、決心を固めようとしてゐるところと見える。片手をもち上げて、ちよいと指を額に當てるやうな恰好をした。たうとう決心がついたと見え、素早くあたりに眼をくばると、爪先だてて足音を忍び忍び、大急ぎで往來をつつ切つて來た。果然、彼は門口のくぐり（それは夏になると時には朝の三時ごろまで門をかけずにあることがあつた）を抜けて、はいつて來るではないか。『さあやつて來たぞ』といふ考へが、さつとヴェリチャーニフの腦裡に閃くと同時に、矢庭に彼も爪先だちになつて、控室の表扉の方へ一散に走り寄ると、——そのまま息を殺し、はやる心に片唾を呑んで立ちすくみ、おののく右手をつい先刻おろして置いた扉の掛金にそつとかけながら、今にも階段に聞こえてくる筈の相手の足音に、一心こめて聽耳を立てた。



心臓の鼓動があんまり烈しいので、爪先だてて昇つてくる見知らぬ男が聞きつけはせぬかと彼は心配だつた。一たい何事が始まつたのか、さつぱり合點は行かなかつたけれど、一切の成り行きは十倍もの強度で感知されるのであつた。まるで先刻の夢が現實と溶け合つたやうな工合だつた。ヴェリチャー・ニノフは生まれつき豪膽な男であつた。時には危険に當面して泰然自若たることを、一種見得のやうにして愛する男であつた。——それも誰一人見てゐる者はなくとも、自分で自分に感心するだけで結構なのであつた。ところが今の場合、そのうへにまだ何物かがあつた。今しがたまでヒポコンデリー患者であり、疑心暗鬼の愚痴男だつた彼は、がらりと一變してしまつて、今ではもう全然別人の觀があつた。引攀つたやうな聲なき笑ひが、胸底からこみ上げて来るのだつた。閉まつてゐる屏のかげから、彼は見知らぬ男の一舉一動を想像してゐた。『やー！いよいよ昇つてくるな、たうとう昇り切つたぞ、あたりをきよきよろ見廻はしてやがる。階段の下の様子を聴耳たてて窺つてゐるな。息を殺してゐるな、ほれ、忍び足でこつちへ来るぞ……。やー！把手に手をかけたな、引張つてゐる、試つて見てゐるぞ！ ははあ、さては奴さん、錠がおりてないつもりでゐたんだな！ してみると、俺が時掛け忘れるのを御承知と見えるわい！ また把手を引張つてやがる。一たいこんなことで掛金が外れるとも思つてゐるのか知らん？ このまま別れるのは残念だなあ！ 空しく歸すなんて残念ぢやないか？』

そして實際のところ、萬事は彼が思ひ描いてゐる通りに展開して來たのであつた。何者かが本當に屏のそとに佇んで、そつと音も立てずに錠を試つて、そこから把手を引張つてゐるのであつた。つまり『かうなつてはもう、目的あつてやつてゐるに極まつてゐる』のである。しかしヴェリチャー・ニノフの方でも、問題を解決しようといふ決心は既についてゐたので、彼は一種の法悦をもつて、あせらずあはてず、ぢつと潮時を狙つてゐた。矢庭に掛金を外す、さつと扉をあけはなす、そして『怪しもの者』といきなり面とつき合はせる——彼はそれがやつて見たくて堪らなくなつた。『もし、あなたは此處で何をしてらつしやるんです？』と言つてやらう。

實際その通りになつた。潮時を捉へると、彼は矢庭に掛金を外して、扉をどすんと突きあけた拍子に——帽子に喪章をつけた紳士とすんでの事で鉢合はせをするところだつた。

### 三 パーヴェル・パーヴロヴィチ・トルウソツキイ

相手はまるで唾みたいにその場に棒立ちになつてしまつた。二人は園の上で鼻をつき合はせてつ立つたまま、身じろぎもせず、眼と眼を睨み合つてゐた。そのままの状態で暫く過ぎた。と突然、



——ヴェリチャーニノフはこの來訪者が誰だつたかを思ひ出した！

同時に來訪者の方でも、ヴェリチャーニノフがはつきり自分を思ひ出したことを、見てとつたらしかつた。さういふ氣配が彼の眼差しに閃いた。一瞬のうちに彼の顔は残る隈なく、何ともいへぬ甘い微笑に溶け込んでしまつた。

「あなたは、たしか、アレクセイ・イヴァーノヴィチさんでしたな？」と彼は、殆んど歌でもうたふやうな調子でいつた。何ともいへぬ優しさの籠もつた、したがつてこの場には滑稽なほど不似合ひな聲だつた。

「してあなたは、本當にあのパーヴェル・パーヴロヴィチ・トルウソツキイなんですか？」とやがてヴェリチャーニノフも、當惑さうに口をひらいた。

「あなたとは九年ほど昔、Tでおちかづきでしたな。それも、——かうしたことを申してお氣に障りませんなら——お互ひに頗る親しい間柄でしたな。」

「左様、左様……まあそんなところで……ですが、今は夜中の三時ですよ、だのにあなたはかれこれ十分間も、この扉が閉まつてるか開いてるかのことやつて見て……」

「三時ですつて！」と來訪者は時計を出してみて、寧ろ慨歎に堪へんといった風の驚きの色を浮かべて叫んだ、「なるほど三時だ！失禮しましたな。アレクセイ・イヴァーノヴィチ、上がつて來るとき

時間を考へるのが本當でした。まつたく汗顔の至りですよ。二三日うちにまた伺つてお話をするとして、今夜はこれで……」

「いや、それはいけません！お話があるならあるで、いつそ今すぐ承ることにしませう！」とヴェリチャーニノフは急いで言ひ直した、「どうぞまあ闕をまたいで、中へおはいり下さい。——だつてあなたは、もともと中へはいられる心算だつたぢやありませんか。まさかこのよる夜中に、錠前をしらべにだけ來られた譯でも……」

彼は興奮する一方どうやら狼狽氣味で、一體どうしたものやら吾ながら見當がつき兼ねた。しまひには氣恥かしくなつて來た。とにかく自分の描いてゐた途方もない幻影からは、祕密も危険も——何一つ出ては來ずに、たかがパーヴェル・パーヴロヴィチなんぞの馬鹿げた姿が出現しただけだつたのだ。とはいへ然し、これが單にそれだけの話だとはどうしても思へなかつた。何かしら朧ろげながら不氣味な豫感がするのである。客を肘掛椅子につかせると、自分も坐る間ももどかしいといった風で、その椅子からすぐ一步ひとあしの寢臺に腰をおろし、膝の上に兩手をそろへて前屈みになつて相手が口を切るのをじりじりしながら待ち受けた。彼は貪るやうにじろじろと見やりながら、暗に相手を促すのであつた。ところが不思議なことに、向ふはいつかな口を開かうとはせず、今すぐ口を切る「義務のある」こともどうやら氣づいてゐないらしかつた。それどころか、あべこべに何か待ち受けるやうな眼附で



主人を眺めてゐるのであつた。尤も、彼は初手から捕鼠器ねずみとりにかかつた鼠のやうな、一種の氣まづさを感じてゐただから、單に氣おくれがしてゐただけかも知れない。しかしヴェリチャーニフは赫となつてしまつた。

「あなたはどうしたんです！」と彼は叫んだ、「まさかあなたは夢でも幻でもありますまいね！ 亡者ごつこをやりに見えたんですかね？ さあ、あなたのそのお話といふのを承はらうぢやありませんか！」

客はもじもじし始め、にやりと笑つて、用心深く話した。

「お見受け申すところ、私がこんな時刻に、しかも——こんな妙な工合にして伺つたのが、何よりも先づあなたをお愕かせたやうでして……。つまりその、昔のことどもや、私どもがどんな風にお別かれしたかを思ひ出しますと——私はいまなほ不思議でならない位で……。それはさうと、私は實はお邪魔にあがらうなどとは思つてもゐなかつたのでしたが、それがこんな事になつちまつたのは、その——ほんの偶然で……」

「何がほんの偶然です！ 現に私はこの窓から見てゐたんですが、あなたは爪先だちで往來をつつ切つて來たぢやありませんか！」

「ああ、あなたは御覽でしたか！ それぢやあなたは、私なんかよりよつぽどお詳しい筈だ！——で

すがこんな事を申してゐては、あなたを益々いらだたせるだけです……。實はかういふ譯なんです。私は自分の用向きで三週間ほど前から當地に來てゐるんです……。私があのパーヴェル・パーヴロヴィチ・トルソツキイだといふことは、あなたもお氣づきの通りです。そこで私の出て來た用向きといふのは、實は他の縣へ轉任になるやうに運動をしてゐますんで、その椅子がきまればかなりの昇進になる譯なんです……。それはさうと、申し上げたいのはこんな事ぢやなかつたつけ！……お望みとなら肝腎かなめのところを申し上げますが、實は私はこれでもう三週間ちかくも、この町をうろつき廻つてゐるんでして、それがどうやら、その用向き、つまり轉任の件ですな、それをわざわざどつち附かずに引張つてゐるやうな工合なんです。そして實際の話が、その方の片が附いたにしてもどつち道おなじことで、きつと片が附いたことなんか自分で忘れちまつて、相變らずのかうした氣持でこのペテルブルグに居坐つてゐるに違ひありません。まるで自分の目當てを失つたやうな、しかもそれが却つて嬉しいやうな——つまりさういつた現在の氣持で、私はうろつき廻つてゐる次第なんです……」

「といふと、どんな氣持でせうな？」とヴェリチャーニフは眉を擡めた。

客は落してゐた眼差を彼の方へ向け、帽子をとりあげて、今はもうきつぱりと物に動ぜぬ面持ちで例の喪章を指さした。

「つまり——私の氣持はこれです！」



ヴェリチャー・ニノフは茫とした眼附きで、その喪章と客の顔を交る交る眺めてゐた。と不意に彼はさつと頬を紅らめると、おそろしく動揺しはじめた。

「ぢやあのナターリヤ・ヴァシーリエヴナが！」

「左様！ ナターリヤ・ヴァシーリエヴナです！ この三月のことでした……。胸を悪くしましてな、殆んどあつといふ間で、ほんの二三ヶ月のうちのことでした！ そして私は——御覽のとほり一人ぼつちで生き残つたわけでした！」

言ひ終へると、客は感きはまつて兩手を左右にひろげ、喪章のついた例の帽子を左手につまみ上げたまま、少くも十秒ほど禿げた頭を低く垂れてゐた。

相手のこの様子と身振りとは、俄かにヴェリチャー・ニノフを立ち直らせたやうだつた。嘲けるやうな、寧ろ挑みかかるやうな微笑が彼の唇をちらりと掠めた——が、今のところはほんの一瞬間に過ぎなかつた。それといふのも、あの婦人（それは彼が實に遠い昔に知り合ひだつた婦人で、しかも遠の昔に忘れ果ててゐたのだつた）の死んだといふ報らせが、今やわれながら意外なほど烈しい感動を彼に與へたからだつた。

「まるで夢のやうです！」と彼は最初に唇に浮かんだ言葉をそのまま呟いて、「であなたは、何故すぐいらして報らせてくださらなかつたんです？」

「御同情くださつて有難う。あなたが同情して下さるのを拜見して、しみじみ有難いと思ひます。それも……」

「それも？」

「つまりその、こんなに永年お會ひせずになのに、私の悲しみにのみか私個人にさへ、實に深い同情を寄せていただいて、ただただ感謝のほかはない——と、それを申し上げただけです。尤も私だつて別に親しい方々の氣持を疑つてゐた譯でもないんでして、當地でも探しさへすりや今すぐだつて心からの親友が見附け出せるわけです（早い話があのステパン・ミハイロヴィチ・バガウトフですな）。しかしです、アレクセイ・イヴァーノヴィチさん、あなたとの御交際は（いや恐らく親友の交りでしたな——今なほ感謝の念をもつて思ひ出されてるところを見ると）、何しろ九年間も絶えてゐたんですからなあ。あなたは私どもの町へは戻つておいでにならなかつたし、手紙のやりとりもなかつたのですし……」

客はまるで樂譜を見ながら歌でもうたふやうな調子で喋つてゐたが、そのあひだぢう床へ眼をおとしてゐた。とはいへ絶えず上目を使ふことを忘れなかつた。一方主人の方も幾分われを取り戻した。

刻々に益々強まつて行くばかりの何やら頗る奇妙な印象を受けながら、パーヴェル・パーヴロヴィチの話に耳を傾け、その顔をじろじろ眺めてゐたが、相手がふと口をつぐんだとき、實に突拍子もな



い入り亂れた考へが、いきなり彼の頭に湧きあがつた。

「それにしても何故わたしは、今の今まであなただと云ふことが思ひ出せなかつたんだらう？」と彼は急に活氣づいて叫んだ、「もう五度ばかりも往來で行き會つてゐながら！」

「左様、それなら私も覚えてゐますよ。いつもあなたの方でひよつこり私の前に出てらつしやるんです。——二度でしたか、それとも三度でしたかな……」

「さうぢやないですよ——いつもあなたの方でひよつこり出て來られるのですよ、私の方からぢやありません！」

ヴェリチャーニノフは起ちあがると、いきなり大聲をあげて突拍子もなく笑ひだした。パーヴェル・パーヴロヴィチはちよつと言葉をやめて、ぢつと彼を見つめてゐたが、すぐまた話を續けた。

「あなたが私の顔が思ひ出せなかつたのはですな、——まづ第一にお見忘れだつたのでせうし、それにまた、私はその後瘡瘡をやりましたのでね、その痕が少し顔に残つてゐるせうでせう。」

「瘡瘡ですつて？ なるほどさう仰しやれば、あの男には痘痕あはたがあつたつけ！ ですが何だつてまたあなたは……。」

「そんな目に逢ひやがつたかと仰しやるんですか？ 何が起るか全く知れたものぢやありませんよ、アレクセイ・イヴァーノヴィチ。よくある圖ですよ！」

「ただどうも、馬鹿に滑稽ですな。まあとにかく先をお続け下さい、先をお続け下さい、どうぞあなた！」

「私は幸ひあなたと行き會へたのですが……。」

「お待ちなさい！ 何だつてあなたは今、『そんな目に逢ひやがつた』なんて仰しやつたんです？ 私はもつと丁寧な言ひ方を考へてゐたんですよ。ぢや、どうぞ先を續けて下さい、どうぞ先を！」

どうした譯か彼は次第に氣が晴れ晴れして來た。戰慄的な印象は全く別の印象にとつて代られた。彼は足早やに室内を行きつ戻りつしてゐた。

「私は幸ひあなたと行き會へたのですが、そもそも當地へ、このペテルブルグへ出掛けて參るときから、かならずあなたを探し當てようと思つてゐたわけでした。ところで、先程の話の繰り返しになりますが、私はやつぱり御覽の通りのみじめな氣持でして……三月さんぐわつからこつち私の心はすっかり臺無しになつちまつて……。」

「いや、なるほど！ 三月からこつちね……。まあちよつとお待ちなさい、あなたは煙草は召上がりませんか？」

「御承知のとほり、ナターリヤ・ヴァシーリエヴナの存命中は……。」

「さうさう、さうでしたね。だが三月からは？」



「巻煙草一本ぐらゐならばね。」

「ぢや一つこれをどうぞ。まあそれをやりながら、先をお続け下さい！どうぞ先を話して下さい！  
實にどうもあなたの話は……」

さう言ひさして、自分は葉巻に火をつると、ヴェリチャーニノフは素早くまた寢臺に腰を据ゑた。  
パーヴェル・パーヴロヴィチは暫く黙つてゐた。

「ときに話は違ひますが、あなたはひどく興奮してらつしやるやうですね。おからだの方はどうなん  
です？」

「へつ、私のからだの具合なんか糞くらへですよ！」とヴェリチャーニノフは急にむかつ腹を立て  
た、「先を續けてください！」

すると主人の興奮の態を見て、今度は客の方がだんだん満足さうな自信ありげな様子になつた。

「だが一體なんの話し續けることがありませうかな？」と彼は再び口をひらいた、「まあ思つても見  
てください、アレクセイ・イヴァーノヴィチ、先づここに打ちのめされた一人の男がある、それも唯  
打ちのめされただけぢやなくて、謂はば徹底的に打ちのめされた男なんですな。つまり二十年にわた  
る結婚生活のあとで生活ががらりと一變してしまひ、別にこれといった目當てもなしに、殆んどまあ  
茫然自失の態で、しかもその茫然自失の中に一種の陶醉をさへ見出しながら、埃っぽい街頭を、まる

で曠野を歩くやうな氣持でうろつき廻つてゐる男なんです。とすれば、その私が、ひよつとして往來  
で知合ひの人に出逢つた時、たとひそれが心からの友達だつたにしろ、やつぱりさうした瞬  
間——つまり茫然自失の狀態でゐる瞬間に、その相手に近づきたくないばかりに、わざと避けるやう  
にするのは、こりやあまづ自然の成行きぢやありませんか。ところがまた別の瞬間には——過去のこ  
とが一々はつきり思ひ出されて、そのつい昨日のことのやうに思はれながら而も今に返す由もない過  
去の生活の目撃者であり關係者である誰かに會ひたくて堪らなくなり、そのためもう胸がどきどきし  
て抑へられず、それが日中ならまだしも、夜陰を冒して、まで親しい友達のところへ駆けつける、そし  
てそのため相手をわざわざ夜中の三時過ぎに叩き起こすやうな羽目になる、といった氣持になること  
もあるのです。なるほど私は時刻については思ひ違へをしてゐましたが、友情については果して思つ  
てゐた通りだつたのです。だつて今この通り過分なほどのおもてなしを受けてゐますものね。時刻の  
ことは全く一言もありませんが、實もつて正直のところまだ十二時前とばかり思つてゐたのです。な  
にせ、かうした氣分でゐるものですからね。まあ己れの悲哀の杯をのみながら、ついそれに酔ひ痴れ  
たといった工合です。しかもこの私を打ちのめしたのは、實は悲哀ぢやなくて、寧ろこの新しい境涯  
なんです……。」

「それはさうと、あなたは何て妙な言ひ廻しをなさるんでせうな！」ヴェリチャーニノフは急にまた



ひどく眞面目な氣持に返つて、暗い顔色をして言葉を挿んだ。

「さやう、いかにも言ひ廻しまで妙でせうて……」

「しかもあなたは……冗談を言つてをられるでもない！」

「冗談ですと！」とパーヴェル・パーヴロヴィチは悲しげな當惑の色を浮かべて絶叫した、「しかも選りに選つて、こんなお話をしてゐる時にですか……」

「ああ、それを仰しやらないで下さい、お願いです！」

ヴェリチャーニノフは起ちあがつて、ふたたび大股で歩きはじめた。

さうしてもものの五分ほど過ぎた。客も椅子を起たうとして腰をもちあげたが、ヴェリチャーニノフが「そのまま、そのまま」と叫んだので、すぐさまおとなしく肱掛椅子に身を沈めた。

「それにしてもあなたは、實に變りましたなあ！」とヴェリチャーニノフは急に相手の前に立ちどまつて、再び口を切つた。——不意にこの考へに愕かされたといつた風だつた。「怖ろしい變りやうですよ！ 全くひどい！ まるつきり別人ですなあ！」

「別に不思議はないですよ。何しろ九年ですからね。」

「いや、さうぢやない、年月の問題ぢやない！ 外見からいふとあなたはまだそれほど變つてはゐない。あなたの變つたのは他の點ですよ！」

「それだつて、九年といふ年月のせゐだらうぢやありませんか。」

「それとも、この三月以來ね！」

「ふ、ふ」とパーヴェル・パーヴロヴィチは人の悪い薄笑ひを漏らした、「あなたもなかなか面白いことを考へる人だ。……ところで不躰ながらお尋ねしますが、——一體わたしの何處がそんなに變りましたかね？」

「變つたのなんのつて！ 昔のパーヴェル・パーヴロヴィチさんは實に手堅い、分別のある人でしたよ、實に才物でしたよ。ところが今のパーヴェル・パーヴロヴィチさんと來たら、全くのやくざ者ぢやありませんか！」

彼は極度に興奮状態に陥つてゐた。さういふ状態になると、平生どんなに控へ目な人でも餘計なことを口走りはじめるものである。

「やくざ者ですつて！ あなたはさうお思ひですか？ そしてもう『才物』ぢやなくなつたと仰しやるんですね？ ふむ、才物にあらずか？」とパーヴェル・パーヴロヴィチはさも楽しさうに忍び笑ひをした。

「いや『才物』なんかどうでも宜しい！ 今ぢや賢過ぎて困る位かも知れませんぜ。」——「俺も随分と傲慢な人間だが、この野郎と來たら俺に輪をかけた傲慢者だわい！ それに……それに一體、



奴は何を目當てにやつて來たんだらうな？」とヴェリチャーニノフは絶えず考へてゐた。

「ねえ、懐かしい何ものにも換へがたく貴いアレクセイ・イヴァーノヴィチさん！」と、客は突然猛烈な興奮に驅られて、椅子のなかで身もだえした、「こんな話をして何になるもんですか？ 私達はいま社交界にゐるわけぢやないんですものね。綺羅を飾つた豪勢な社交場裡にゐるわけぢやないんですものねえ！ われわれ二人は、心を許し合つた舊友なのだ、昔馴染なのだ、そして謂はば誠心誠意でもつて今ここに再會して、曾ての何ものにも換へがたいお互ひの交誼を偲び合ひ、且つはまた貴くも懐かしい環としてわれわれ二人の友情をつなぎ合はせて呉れた亡妻のうへを、偲んでゐるところですものねえ！」

さう言ひながら、彼は自分の感情の大法悦にうつとりとなつて、またも先刻のやうにぐつたりと頭を垂れ、今度は例の帽子で顔をかくした。ヴェリチャーニノフは嫌惡と不安を半々につきませた氣持で、その姿にちつと眼を注いでゐた。

「だが、もしもこれが單に奴のお芝居だつたらどうなる？」といふ考へが彼の頭に閃いた。「いや、違ふ、斷じて違ふ！ どうやら酔つ拂つてもゐないらしい。——いやしかし、酔つ拂つてゐるのかも知れんぞ。赤い顔をしてるからな。だが、よしんば酔つ拂つてゐるところで、——所詮は同じことだ。一たい何であんなおべんちやらを言ひ出したんだらうな？ この野郎め、一たい何が欲

しいのかな？」

「あなたは覺えて、覺えておいでですか？」とパーヴェル・パーヴロヴィチは少しづつ帽子を顔から離しながら、ますます深く追憶に溺れ込んで行くらしい様子で叫んだ、「われわれのやつた郊外の遠乗りや、夜の集まりや、それからまた、あの客好きなセミヨーン・セミヨーンヴィチ閣下のお宅の氣のおけない夜會で、舞踏をしたり罪のない賭事に興じたりしたことを、あなたは憶えておいでですか？ また私ども三人で、讀書に靜かな宵を過ごしたときのことを？ それから、私どもがはじめてお近附きになつた時のことを？ あの朝あなたは何か用向きのことで、問合せに私のところへおいでになつたのでしたね、そして些か語氣を荒らげさうな雲行きするとき、不意とあのナターリヤ・ヴァシリエヴナがはいつて來たもので、十分後にはもうあなたは家のもの同様の、心を許し合つた友達になつてしまはれたのでしたね。そして、それからまる一年と云ふもの、——ちようどそれ、トゥルゲーネフ氏の『田舎夫人』といふ芝居そっくりで……。」

ヴェリチャーニノフは緩りと歩を移しながら、床に眼をおとしたまま、焦躁と嫌惡の情をもつて相手の言葉を聽いてゐた。とはいへちつと聽き入つてゐたことは事實である。

「わたしはその『田舎夫人』といふ芝居のことなんか、ついぞ思つて見たこともありませんでしたよ」と、彼は些か度を失つて相手を遮つた、それにあなたは、昔はついぞそんなめそめそした聲で話



をしたことも、またそんな……他所ゆきの文句で喋つたこともなかつたですね。一體どうしようと仰しやるんで？」

「まづたく私も昔は黙り込みがちの男でしたね、つまり今よりは無口でしたな」とパーヴェル・パロヴィチは急いで相手の言葉を引き取つた、「知つての通り、昔の私は亡妻が何か話しはじめると、寧ろ聴き役に廻る方が好きだつたものです。あなたも覚えておいでせう、まづたく家内の話は機智に富んだいい話でしたものね……。ところでその『田舎夫人』——とりわけあの『ストゥペンヂェフ』のことですが、なるほどあなたが思つてみたこともないと仰しやるのは御尤もです。何故つて、あの話は私と亡妻が二人きりでした話でしたものね。つまりあなたが發つて行つてしまはれたあとで、追憶に適はしい静かな折々にあなたのことを思ひ浮かべながら、——私どもの初めてお目にかかつたときのことをあの芝居に引き較べて考へ考へしたのでした。……なつて本當にそつくりそのままですものねえ。殊にあの『ストゥペンヂェフ』と來たらもう……」

「何です、その『ストゥペンヂェフ』つて云ふのは、くそ面白くもない！」とヴェリチャーニノフは呶鳴つて、思はずどしんと足踏みをした。この『ストゥペンヂェフ』といふ言葉を耳にすると同時に、或る不安な追想が彼の胸に翳りはじめ、そのためもうすつかり混亂してしまつたのである。

「いや、その『ストゥペンヂェフ』といふのは、その芝居の、芝居の登場人物なんですよ。つまり

あの『田舎夫人』といふ芝居で『良人』の役割をする人物なんです」とパーヴェル・パロヴィチは甘つたるい猫撫聲を出した、「ですがね、この話はもう私どもの尊くもまた美しい追憶の、全く別の時代に屬するものなんです。といふのはつまり、それはあなたが既にお發ちになつたあとのこととして、その頃はもうステパン・ミハイロヴィチ・バガウトフといふ人が丁度あなたそつくりな友人を、私どもに恵んで下すつてをられたわけでした、これはそれ以來まる五年のあひだ續いたのでした。」

「バガウトフですつて？ それはどういふ人です？ そのバガウトフといふのは何者なんです？」と、ヴェリチャーニノフはいきなり化石したように立ちどまつてしまつた。

「バガウトフ、——詳しく云へばステパン・ミハイロヴィチ・バガウトフですが、これはあなたが發たれてから、丁度一年たつて、私どもに友情を恵んで下すつた人です。……ちようどあなたと同じ友情をね。」

「ははあ、あいつか、そんなら私も知つてゐる！」とヴェリチャーニノフはやつと思ひ當たつて叫んだ、「バガウトフ！ さうさう、やつぱりあなたの役所に勤めてゐた……」

「さうです、さうです！ 知事の官房に勤めてゐたんです！ ペテルブルグの最上流社會からやつて來た、實に優美な青年でしたよ！」と、感きはまつてパーヴェル・パロヴィチは大聲を立てた。

「さう、さう、全くさう！ 俺は何をばやばやしてたんだ！ するとあの男もやつぱり……」



「さうです、あの男もやつぱり、さうなんです！」とパーヴェル・パーヴロヴィチは、主人がうつかり口を滑らした言葉を引きとつて、相變らずの感激口調で繰返した、「あの男もさうだつたんです！そのときですよ、私どもがあの客好きのセミヨーン・セミヨーン・ヴィチのお宅の私設舞臺で、例の『田舎夫人』を上演したのは。——ステパン・ミハイロヴィチは『伯爵』の役を、私は『良人』を、それから亡妻は『田舎夫人』をそれぞれ演ずることになつてゐたんですが、——ところが亡妻の主張で私は『良人』の役をとりあげられちまつた次第なんです。ですからつまり私は『良人』の役は演じなかつたんですが、——まあ、その役どころぢやないといつた譯でしてな……。」

「こりや大笑ひだ、あなたがストゥペンヂエフになるなんて！ あなたは何と云つたつてパーヴェル・パーヴロヴィチ・トルソツキイですよ、ストゥペンヂエフなんかぢやないさ！」と興奮のあまり身を顫はさんばかりの勢ひで、ヴェリチャー・ニコフはづけづけと遠慮會釋もなしに言つてのけた。「それはさうと、そのバガウトフはここにゐますぜ、このペテルブルグにゐますぜ。私はこの春あの男を見掛けましたよ、この眼でぢやんとね！ 一たい何故あなたは、あの男のところへも會ひに行かないんです？」

「いや、これでもう三週間といふもの、殆んど毎日のやうに訪ねて行くんですが、その都度會つて貰へませんのさ！ 病氣で會へん！ とかう云ふんです。ところがどうでせう、あの人が本當に病氣

で、しかも極めて重態だといふことが、手近かな人の口から分かつたぢやありませんか！ 何せ六年越しの親友ですからねえ！ ああ、アレクセイ・イヴァーノヴィチ、このことは繰返して申し上げますがね、人間かうした氣持であると、時にはいつそ本當に地の底へ沈み込んでしまひたいと云つた氣になるかと思へば、また別の瞬間には、誰でもいい、昔の生活のそれ、謂はばその目撃者とか關係者とかいつた人間を探しだして、いきなりかう抱きついて、ただもう泣いて見たいやうな——全くただもう聲をあげて泣いてみたいやうな、そんな氣にもなるんですよ……。」

「ところで、まあ今日これらでお開きにしようぢやないですか、どうです？」とヴェリチャー・ニコフは鋭い語勢で言ひ放つた。

「いや、結構です、結構すぎるくらいですよ！」さう言つてパーヴェル・パーヴロヴィチは即座に席を起つた、「もう四時ですよのね。それに、何しろこんな身勝手なことで折角お寝みのところをすつかりお騒がせしてしまつて……。」

「ぢやあ、私の方からもそのうちお訪ねしませう、きつとお訪ねしませう、きつとお訪ねしますよ。そしてゆつくり落ちついてお話を承るとしませう。……ところで、さつくばらんのところを伺ひたいんですが、あなたは今夜酔つておいでぢやありませんかね？」

「酔つてゐる？ 飛んでもない……。」



「こちらへお出掛けの前か、それともその以前に、召上がつたんぢやありませんか？」

「これはまあ、アレクセイ・イヴァーノヴィチ、あなたはてつきり熱病にかかつておいでですな。」

「とにかく明日うかがひませう、早目に、さう一時までにね……」

「もう夙<sup>きん</sup>から氣がついてゐたんですが、あなたはどうもまるで熱に浮かされてらつしやるやうだ——さも會心の至りといった調子で、パーヴェル・パーヴロヴィチは相手を遮つて、同じ話題に執着した。「本當に何ともお恥かしい次第です、私がこの通りの口不調法だもんで、そのため……。いや、もう失禮ませう！ あなたも横になつて、少しお寝みになつて下さい！」

「だが、あなたは何だつて宿所を仰しやらないんです？」ふと氣づいて、ヴェリチャーニノフは相手の後姿に浴せかけた。

「おや、申し上げませんでしたか？ ポクロフスキイ・ホテルにをりますよ。」

「ポクロフスキイ・ホテルといふと？」

「ポクロフ寺のすぐ傍です。あそこの横町にあるんですが、——さてと、何といったかなあ、あの横町は。おまけに番地まで忘れちまつた。とにかくポクロフ寺のすぐ傍ですよ……。」

「いいです、探ませう！」

「ぢやどうぞいらして下さい。」

彼はもう階段にかかつてゐた。

「お待ちなさい！」と又もやヴェリチャーニノフは叫んだ、「あなたは私を撒いて逃げるんぢやないでせうね？」

「と仰しやるとどういふ意味です、その『撒いて逃げる』といふのは？」とパーヴェル・パーヴロヴィチは階段の三段目からくりりとこちらを振り向いて、眼をまるくして、微笑みながら訊き返した。返事の代りにヴェリチャーニノフはばたんと扉を閉めて、念入りに錠をおろし、そのうへ掛金をしつかり掛けた。部屋に戻つて來ると、まるで穢い物にでも觸つたやうに、べつと唾を吐いた。

部屋のまん中にももの五分ほどちつと立ちつくしてゐたが、やがて上着一つ脱がずにどさりと寢臺に身を投げると、忽ちのうちに寢入つてしまつた。消し忘れた蠟燭はそのまま卓子のうへで、ぢりぢりと燃え盡きて行つた。

#### 四 妻と良人と情夫

彼はぐつすり寢込んで、九時半きつかりに眼をさました。素早く半身を起こすと、そのまま寢臺の



うへに坐り込んで、すぐさま考へはじめた——『あの女』が死んだことに就いてである。

彼女が死んだといふことをいきなり昨夜聞かされたときの、あの全身を揺するやうな烈しい感銘はいまだに彼の身うちに一種の胸騒ぎ、いや寧ろ痛みをとどめてゐた。この胸騒ぎや痛みは、昨夜パーヴェル・パーヴロヴィチがゐたあひだだけは、或る奇妙な考へのおかげで一時和げられてゐたのであるが、それがいま眼が覺めるとともに、九年前にあつたことの一切が、極度にありありと、遽かに彼の眼の前に描き出されたのである。

その女といふのは、『あのトルッソツキイといふ男』の今は亡き妻のナターリヤ・ヴァシーリエヴナで、彼がある所用で（それも矢張り或る遺産相續にからまる訴訟沙汰であつたが）まる一年もT市に滞在していたとき彼が戀し、その情夫になつてゐた女であつた。——もちろん用事そのものは、そんなに長い滞在を要するものでも何でもなかつたので、長逗留の本當の原因はこの情事にあつたのだ。まつたくこの情事といひ、又その際の彼の愛情といひ、頗る強烈に彼を支配してゐたもので、彼はまるでナターリヤ・ヴァシーリエヴナの奴隷みたいになつてゐた程だつた。だからこの女が、ほんの假初の氣まぐれからさうして呉れと言ひ出したなら、彼は即座にどんな奇怪極まる馬鹿げたことでもやつてのける氣になつたに相違ないのである。これほど首つたけになつたことは、後にも先にもついでないことだつた。

その一年の終りが來て、どうしても別かれなければならぬことになる、ヴェリチャーニノフはその悲しい日の近づくにつれて怖ろしい絶望にとらはれてしまつた。全く身も世もあらぬ絶望で、その別離はほんの僅かの間で済むあてがついてゐたにも拘らず、いつそナターリヤ・ヴァシーリエヴナを良人の手から引渡つて駈落ちをしよう、良人も世間も棄てて一緒に外國へ逐電してしまはう、とそんな話をナターリヤ・ヴァシーリエヴナに持ち出した程だつた。ところがこの婦人の冷笑と小動きも見せぬきつぱりした態度に逢つて（尤も彼女ははじめの内この目論見に全く賛成してゐたのであつたが、思ふにそれは單に退屈まぎれのほんの氣慰みのつもりだつたに違ひない）、やつと思ひとどまつて、餘儀なく獨りで立去らせたのだつた。それなのに又どうしたことだらう？ 別かれてまだ二た月もたたぬうちに、彼はもうペテルブルグで、彼にとつては永久に解けぬ謎である次のやうな疑問を、われとわが身に掛けてゐるのであつた。『俺は本當にあの女を愛してたのだらうか、それともあれはみんな、ただの「出來心」にすぎなかつたのかしら？』しかもこんな疑問が彼の胸に湧いたのは、何も彼が浮氣な質だつたせゐでもなければ、また別に新しい色事が始まつてゐたせゐでもなかつた。ペテルブルグに舞ひ戻つての最初の二た月といふもの、彼は一種自己忘却みたいな状態で暮らしてゐたので、すぐさま以前の交際仲間<sup>（カ）</sup>に吸ひ寄せられ、女などは幾らも見<sup>（カ）</sup>る機會はあつたとはいへ、その一人だつてろくろく眼にははいらぬやうな始末だつた。それはさうと、たとひ今云つたやうな疑問がいく



ら胸中を往來してゐるにたところ、一たんT市へ舞ひ戻つたら最後もうその途端に、又もやあの女の蕩かすやうな魅力の俘になつてしまふだらうことは、彼もちやんと心得てゐたのである。それから五年たつてのちも、彼のこの信念に變りはなかつた。とはいへ五年後となつては、彼はもはやさうした自分を意識するのが癪にさはるやうになり、『あの女』のことを思ひ出すたびに憎惡の念を感じずにはをられなかつた。彼はTで過ごした一年を思ふと氣恥かしかつた。このヴェリチャーニフともあらうものが、あんな『痴情』に囚はれるなんてあつてよいことか——彼はわれながら腑に落ちないのだつた。で、あの戀情についての追憶の一切は彼にとつて不面目としか思へぬやうになつてしまひ彼は思ひだすたびに危く涙がこぼれさうなまで赤面し、きりきりと良心の苛責を覺えるのであつた。尤もそのときから更に數年たつと、多少は心の平靜を取り戻すことができた。彼はあの出來事などはすつかり忘れようと努力し、——また實際にも殆んど忘れかけてゐた。そこへ突如として、九年後の今になつて、昨夜ナターリヤ・ヴァシーリエヴナの計報を耳にしたのを機會に、再びあの當時のことが遽かに奇怪な色彩をもつて、眼の前によみがへつて來たのである。

さて今、雜然と腦裡にむらがり寄る亂れた想念を抱きながら寢臺のうへに坐りこんでゐる彼には、ただ一つの事がはつきりと感得され意識されるのであつた。それは、昨夜あの報らせを耳にしたときは、あれほどまでに『全身を揺るがすばかりの感銘』を受けたに拘らず、それでゐて彼女の死そのもの

のについては、案外すこぶる平氣だといふ事であつた。

『「たい俺は、あの女を可哀想だとも思はないのだらうかしら？」』

と彼は自分に訊いてみるのだつた。尤も、今になつてはもはや彼があの人に憎惡を感じず、従つてまた今までよりは一層公平な、當を得た判斷を下せることは事實であつた。そしてこれは何も今更はじまつたことではなかつたが、別かれて九年の歲月の流れる間に形成された彼の意見によると、ナターリヤ・ヴァシーリエヴナは田舎の『上流』社會にさらに見られる平凡な田舎の貴婦人の一人に過ぎず、そして更に彼の言葉を借りれば、『全くのところ唯それだけの代物だつたかも知れんのさ。それをこの俺ひとりで勝手にあんな幻影の女を作り上げてゐたのかも知れんのさ』なのである。とはいへその一方では、この自分の見解には何か間違ひがありはしまいかといふ疑念も、絶えず頭を離れなかつた。そして今もその疑念が萌したのである。それに又、事實もこの見解と矛盾するのである。現にあるバガウトフといふ男だつてやはり、何年かのあひだ彼女と關係を結んで、しかも矢張り『蕩かすやうなあの女の魅力の俘』になつてゐたらしいではないか。あのバガウトフは正銘のペテルブルグの上流社會の青年だつたし、且つ彼が『何の取柄もない男』(といふのはヴェリチャーニフが彼に加へた評言であるが)であつて見れば、彼が立身出世できる世界はペテルブルグを除いては他にない筈である。然るにその彼が、ペテルブルグといふ自分にとつては掛換へのない地の利を抛擲してまで、



T市で五年の歳月を空費したのも、誰ゆゑかと云へば、他ならぬあの女のためなのだ！ しかもその彼がやがての果てにペテルブルグへ舞ひ戻つたのも、元をたたせば矢張り自分と同様、『弊履のごとく』振り棄てられたからに相違ないのだ。してみるとあの女にはやつぱり、何かしら普通の女には見られぬ——男を惹きつけ、奴隷にし、心のままに操る一種の力が具つてゐたのだ！

とはいへ、またその一方では、それほど男の心を惹きつけ奴隷にするほどの器量のある女とも思へなかつた。つまり『どつちかと云ふと美人の方ぢやなかつたし、ひよつとしたら不纏綴な方だつたかも知れない』のである。ヴェリチャーニノフが彼女を知つたときは、もう二十八になつてゐた。大して美しいとは言へぬ顔ではあつたがそれでも時として氣持のいい生氣を帯びて輝くこともあつた。だが眼附に難があつた。その眼差しには何かどぎつすぎるところが現はれてゐたのである。それにひどく痩せ形だつたし、知育の方も貧弱極まるものであつた。尤も才智にかけてはなかなか優秀で寧ろ俊敏な方であつたけれど、それなりにまづきまつて偏頗な物の見方をしてゐた。物腰は田舎町の婦人のそれで、おまけに正直のところ、色んな手管を弄する癖があつた。趣味は洗練されてはゐたけれど、主としてそれは衣裳の着附けにしか現はれなかつた。はきはきした氣性で、ともすれば人を抑へたがる傾きがあつた。何事にまれ、彼女といい加減なところで妥協することは出来ぬ相談で、『一切か然らずんば無』だつた。困難な問題にぶつかつた場合に彼女の見せる不屈さと根柢よさには、驚嘆すべき

ものがあつた。生まれつき鷹揚なところがあつたが、一方それと並んで殆んど常に、底の知れないほど意固地なところもあつた。この奥さんとは議論しても何にもならなかつた。二々が四などといふことはてんで受けつけないからである。いつ如何なる場合でも、自分が間違つてゐたとか自分が悪かつたとか思つたことはついぞ無かつた。しよつちう、一々數へ切れぬくらゐ良人を裏切つてゐながら、それが少しも良心の重荷にはならない女だつた。ヴェリチャーニノフ自身が彼女に下した比喻によれば、彼女は、自分が本物の聖母だと思ひ込んでゐる『鞭身教の聖母』みたいなもので、ナターリヤ・ヴァシーリエヴナは自分の一舉一動に極度の自信を抱いてゐたのである。情人に對しては忠實であつたが——それも厭きの來ないうちだけのことだつた。情人を苦しめることも好きだつた代りには、その報酬を與へることも好きだつた。型からいへば情熱的で、殘酷で、肉慾的な女だつた。彼女は淫蕩な生活を憎んで、殆んど信じられぬほどにいきり立つてそれを非難するのだつたが、そのくせ自分も淫蕩な女だつたのである。しかもどんな事實を並べ立てたところで、彼女に自分の淫蕩さを氣附かせることはとても出来ない相談だつた。『あの女はきつと「本心から」それを知らずにゐるんだ』とまだT市にゐた頃ヴェリチャーニノフはよく考へたものである。（序でに言つておくが、さういふ彼女について彼女の淫蕩生活のお仲間だつたのである。）

『つまりあの女は』と彼は考へるのだつた、『まるで不貞の妻たらんがために生まれて來たやうな女



の一人なのだ。ああした女といふものは、決して老嬢になんかなれるものぢやない。さうした要求から必らず嫁に行く——これがああした女の自然法則なのだ。そこで良人が最初の情人になるわけだが、それも婚禮が済んでからときまつてゐる。實際あの手合ひほど巧く手取り早く嫁に行く連中はないものな。さて最初の不貞については、かならず良人の方に罪があるものだ。といった調子で、極度の誠心誠意で次々に男をこしらへる。だからああした女はいつまでたつても、相變らず自分が絶対に正しいもの、従つてももちろん自分には罪とがなんぞ全然ないものと思つてゐるのだ。」

ヴェリチャーニノフは、さうした型の女が實際にゐるものと固く信じ込んでゐた。が同時にまたその一方では、女に對應するやうな良人、つまりさうした型の女に對應するのを唯一の使命として生まれて來たやうな良人の型も、やはり存在するものと信じてゐた。彼の見解によれば、さうした良人の存在の意義は、謂はば『永遠の良人』たるところに、或ひはもつと的確に言へば、一生涯ただただ箇の良人たるにとどまつて、それ以外の何ものでもあらぬところに存する。『この種の男はただただ妻帶せんがためにのみこの世に生まれ、生長してゆくのだ。そして一たん妻帶したのちは、よしんば獨自の立派な性格の持主であつたにしても、直ちに自分の妻の腰巾着に變じてしまふのだ。かうした男の主要な特徴は、一種めかし立ててゐることである。太陽が輝かすにはゐられないと同じ理窟で、かうした男は寢取られ男にならずには濟まない。しかし彼はその事實に決して感づく斬がないばかり

か、自然の法則によつて一生涯決して悟れぬことになつてゐるのだ。』といった譯でヴェリチャーニノフは、この二つの型の存在することは固く信じて疑はず、そしてT市にゐた頃のパーヴェル・パーヴロヴィチ・トルウソツキイこそは、その一つの型の完全な代表的人物だと確信してゐたのである。昨夜のパーヴェル・パーヴロヴィチが、Tにゐたころ彼の知つてゐたパーヴェル・パーヴロヴィチではなかつたことは、勿論申すまでもない。とても信ぜられぬほどの變りやうだと彼は思つたが、とはいへヴェリチャーニノフは、彼が變らざるを得なかつた次第も、またそれが全く自然だといふことも、よく知つてゐたのである。トルウソツキイ氏なる人物が、あの昔のままの人間でゐられるのは、ただ妻の存命してゐるうちだけのことで、今となつてはあの男はもう、いきなり宙有に抛り出された完全體の破片——つまり何とも譬へやうもない、何かしら奇態な代物にすぎないのである。

Tにゐた頃のパーヴェル・パーヴロヴィチについては、次のやうなことがヴェリチャーニノフの記憶に残つてゐて、彼は今それを思ひ出したものである。

『もちろん、T時代のパーヴェル・パーヴロヴィチは單に良人に過ぎず』それ以外の何ものでもなかつたのだ。よしんば彼が良人たると同時にまた官吏であつたにしろ、それは官職なるものが彼にとつて謂はば夫婦生活の義務の一つとなつてゐたからに他ならない。彼自身としても頗る勤勉な官吏ではあつたが、底を割つていへば彼のその勤務も、女房のためであり、また彼女のT市に於ける



社交上の地位のために他ならなかつたのである。彼はその時分三十五歳で、幾らかの財産——といつても決して馬鹿にはならない財産があつた。役所では別にとり立てていふほどの手腕も示さなかつたが、さりとて無能振りを發揮したわけでもない。縣内の上役と見れば誰彼の選り好みなしに交際<sup>つきあ</sup>つて頗る受けがいいといふ評判であつた。ナターリヤ・ヴァシーリエヴナはT市の人々の尊敬を擅<sup>た</sup>まにしてゐた。とはいへ別段それを有難がるでもなく、當然受くべき敬意を受けるまでだといつた顔をしてゐた。しかし自宅での客のもてなしは頗る手に入つたもので、おまけにパーヴェル・パーヴロヴィチまでが彼女のお仕込みのお蔭で、縣下のどんな高官貴紳をもてなす場合でも、恥かしくないだけの行儀作法を身につけてゐた。恐らく（とヴェリチャーニノフには思はれた）、この男には相當の才智もあつたのだらう。ただしナターリヤ・ヴァシーリエヴナは亭主がお喋りをするのを餘り好まなかつたので、折角の才智も大して人眼に觸れる機会がなかつたのであらう。そのみならず彼には、色んな悪いところもある一面、さまざまな美質も持つて生まれてゐたらしい。ただ美質の方はいつも陰にくれてばかりゐて表面に現はれず、一方悪い性癖の方は殆んど完全に抑壓されてゐたと見える。例へばヴェリチャーニノフは、トルソツキイ氏には時として、親しくしてゐる連中を嘲笑したがる傾向の生ずることのあつたことを記憶してゐる。しかしこれは固く禁ぜられてゐたのである。また時には何か面白いことを言ひだすのが好きであつたが、これにもまた監視の眼が光つてゐて、何かたわいの

ないことを手短かに話すことしか許されなかつた。彼はまた家庭の外での友人同志のつきあひに加はつて、おまけに酒杯をともしたがる傾向があつた。しかしこの後の方は、未然のうちにその禍根を絶たれてゐたといつてよい。しかも特筆に値する事實は、よそ目には誰一人として、この亭主が女房の尻に敷かれてゐると氣づく者がなかつたことである。ナターリヤ・ヴァシーリエヴナは打ち見たところ全く従順な妻に見え、のみならず自分でもさう信じてゐたかも知れない。パーヴェル・パーヴロヴィチの方ではナターリヤ・ヴァシーリエヴナに首つただつかも知れないが、そんな氣振りは誰一人の眼にもうつらず、また見ようとしても恐らくは不可能だつたに違ひない。これも矢張りナターリヤ・ヴァシーリエヴナが家の中ですら采配を振つてゐたからである。

T市にゐた一年のあひだにヴェリチャーニノフは一再ならず、こんな問ひを自分にかけて見たものである。——一體あの亭主は、自分の女房と俺との仲を、少しも疑つてはゐないのだらうか？ と。彼は三四度この事について、本氣でナターリヤ・ヴァシーリエヴナに問ひ訊したことがあつたが、返事はいつも同じで、良人<sup>ヤ</sup>は何一つ感づいてはゐないし、またこれから先も感づくことは決してありはしない、それに『かうしたことがらは、あの人の知つたことぢやありませんもの』と、幾分心外だといつた語調で答へるのであつた。彼女についてはまだ特筆すべきことがある。それはパーヴェル・パーヴロヴィチのことをついぞ嘲笑つたことはなく、彼がどんなことを言つても、それが滑稽だとも大



してみつともない事だとも思はず、もし誰か他人に對して何か無禮でも働かうものなら、極力彼をかばつたに相違ない。子供がないものだから、彼女が社交婦人型に變つて行つたのは寧ろ自然の數であつたが、さりとて彼女にとつては自分の家庭も無くては叶はぬものだつたのである。社交界のさまざまに楽しみを打ち込んでゆくことの決して出来ない女で、家にゐるときは家事や手藝にいそむことが頗る好きだつた。パーヴェル・パーヴロヴィチは昨夜、T市にゐたところ靜かな晩を讀書に過ごしたことを追想してゐたが、それは實際よくあつたことで、ヴェリチャーニノフが讀み役に廻ることもあれば、パーヴェル・パーヴロヴィチが引き受けることもあつた。これはヴェリチャーニノフにとつて意外だつたが、トルウツキイは朗讀が頗る上手だつた。さういふときナターリヤ・ヴァシーニエヴナは何か針仕事をしながら、しんみりとなごやかな面持ちで聽いてゐるのが常だつた。讀まれたのはディケンスの小説とか、ロシヤの雜誌に載つてゐるものとかだつたが、時には何か『堅いもの』が讀まれることもあつた。ナターリヤ・ヴァシーニエヴナはヴェリチャーニノフの教養の高さに敬服してはゐたが、といつて別に口に出してそれを言ふでもなく、謂はばもう出来あがつた濟んでしまつた事實として、別に今さう言ふものはないといつた扱ひをしてゐた。一般に話が書物のこととか學問のことになると、それは有益なことかも知れないけど自分の知つたことぢやない——といつた風な冷淡な態度をとるのが常だつた。一方パーヴェル・パーヴロヴィチは時として、さうした話にかなりの熱

を示すことがあつた。

T市での情事は、ヴェリチャーニノフの方がすつかりのぼせ上つて、殆んど狂氣せんばかりになつたところで、いきなり破れてしまつた。自分が『弊履のごとく』振り棄てられたとは露氣づかずに彼が發つて行くやうにと、萬事は巧みに仕組まれてゐたとはいへ、底を割つて云へば、手もなくぽいと抛り出されたのに違ひなかつた。それにはこんないきさつがあつた。——彼が立ち去る一と月半ほど前のこと、幼年學校を出たばかりの子供みたいな砲兵士官がひよつこりT市に現はれて、トルウツキイ家へ出入りするやうになつた。そこで三人組が變じて四人組になつたのである。ナターリヤ・ヴァシーニエヴナはこの乳くさい少年士官を愛想よく迎へ入れたが、それはまるで子供でもあやすやうな態度だつた。ヴェリチャーニノフは一つ完全に氣づかずにゐたし、またその頃だしぬけに一時的とはいへ兎にかく別かれ話を切り出されたのであつて見れば、感づくの感づかぬの騒ぎではなかつたのだ。そのとき、彼が是非とも大至急にT市を立退かなければならぬ理由として、ナターリヤ・ヴァシーニエヴナが數へ立てた無慮無數の理由のなかには、どうやら妊娠したやうな氣がするといふ事もはいつてゐた。だからよし三月でも四月でもいい、とにかく至急に一時身をかくして貰はなければ困る、さうすれば後日になつて妙な噂が立つたにしても、何ぶん九ヶ月もたつた後のことであつて見れば、良人が何かの疑ひを挿む餘地がよほど少くなる筈だ——といふのである。どうもかなり牽強附



會な論法であつた。次いでヴェリチャーニフの方から、いつそ巴里かアメリカへ駈落ちしようといふ亂暴な提案が持ち出されたのち、彼は孤影悄然とペテルブルグへと立去つた。『何の疑念を抱かず、ほんの一時のつもりで』——つまりたかだか三月ぐらゐのつもりだつたのである。それでなかつたらたとひどんな理由を並べたてられ、どんな理窟で押して來られたところで、彼は立去らなかつたに相違ない。それからちやうど二ヶ月して、彼はペテルブルグでナターリヤ・ヴァシーリエヴナからの手紙を受取つたが、それには二度と再び歸つて來て下さるな、今ではもう他の男を愛してゐるからとあつた。また例の妊娠については、あれは自分の思ひ違ひだつたとしてあつた。今さら思ひ違ひなどと報らせて貰ふまでもなく、彼には既に何もかも明瞭だつた。例の少年士官を思ひ出したのである。といふ次第で事は永遠に終りを告げてしまつた。それからまた數年して彼は、バガウトフなる者が登場してまる五年のあひだ居坐つてゐたといふ話をふと風の便りに耳にした。今までになくこの關係が長續きをしたといふ事實について、彼が下した色んな解釋のなかには、てつきりあのナターリヤ・ヴァシーリエヴナももうよほど老けてしまつたのだな、それで昔よりしつこくなつてゐるんだな、といふ考へも加はつてゐた。

彼は一時間ちかくも寢臺のうへに坐り込んでゐた。やがてふと吾に返ると、ベルを押してマーヴラに珈琲を持つて來させ、急いで飲みほし、着物をきて、十一時きつかりに宿の門を出てポクロフ寺を

めざした。例のポクロフスキイ・ホテルを探さうといふのである。そのポクロフスキイ・ホテルなるものについても、今ではもう昨夜とは違つた、一種特別の、いはば朝の感じともいふべきものが彼の胸に形作られてゐた。なかんづく昨夜の自分のパーヴェル・パーヴロヴィチに對する態度を思ふと、吾ながら幾分氣恥かしいほどだつた。まづこの氣持を何とか解決しなければならなかつた。

扉口の錠前についての昨夜の色んな幻想は、偶然の暗合だとか、パーヴェル・パーヴロヴィチが酩酊の状態だつたこととか、まだ何とかとか理窟を持ち出して説明をつけてゐた。ところが何だつて自分が今、あの女のもとの亭主のところへ、折角かうして二人のあひだにあつたことは残らず極めて自然にひとりでに結着がついてしまつてゐるものを、今更また新らしい關係をつけに出掛けて行くのか——といふことになる、正直のところ彼にははつきりした解釋がつき兼ねるのだつた。彼は何物かに吸ひ寄せられてゐるのだ。あるとき彼は何か一種特別な印象を受けとり、その印象のお蔭で、かうして吸ひ寄せられて行くのだ。……



パーヴェル・パーヴロヴィチは『撒いて逃げ』ようななどは考へてもゐなかつたし、それにまた何だつて昨夜ヴェリチャーニノフが彼にそんなことを訊いたのやら、それは神様しか御存知があるまい。何しろ當の本人にもどうした譯やらさつぱり見當がつかないのである。ポクロフ寺の傍の小店で行き當りばつたりに尋ねて見たら、ポクロフスキイ・ホテルならついでこのあの横町だと教へて呉れた。そこでホテルに行くと、トルウツキイさんは此頃はこの中庭に突き出てゐる翼屋の、マリヤ・スイソエヴァの家具つきの部屋に『御逗留中で』といふ挨拶だつた。鼻のつかへさうな、ぼちやぼちやと水の撒いてある、ひどく不潔な石の梯子段をつたはつて、その教へられた部屋のあるといふ翼屋の二階へ昇つて行くと、彼はふと人の泣聲を耳にした。泣いてゐるのは七つか八つの子供らしかつた。いかにも苦しさうな泣聲で、押し殺さうとしながら、しかも後から後からとこみ上げてくる歎歎なのである。それとともに地団駄を踏む音と、やはり押し殺してはゐるが、烈しい怒りに燃えた唖鳴り聲——わざと唖れた裏聲を出してはゐるけれど、明瞭に大人の男聲である——が聞こえた。その大人は泣き叫ぶ子供を鎮めようとしてゐるらしく、その泣聲が外に漏れるのをひどく苦にしてゐる様子だつたが、そのくせ自分の方が子供よりひどくがなり立てるのだつた。それは無慈悲な唖鳴り聲で、子供の方はまるで泣きながら赦しを願つてゐる風に思へた。階段を昇り切ると小さな廊下で、兩側にそれぞれ二つの扉口があつた。ヴェリチャーニノフはそこで、でつぷり肥つた、背の高い、なりふり構はず

髪をばさばさにした女房に逢つたので、パーヴェル・パーヴロヴィチの住居はどこかと尋ねて見た。すると彼女は、泣聲の漏れてくる扉口を指さして見せた。この四十女のでつぷりと赤黒い顔には、何か忌々しげな色があつた。

「ほれまあ、大した道樂もあつたものさあね！」そんな口小言をいひながら、女はさつさと梯子段の方へ行つてしまつた。ヴェリチャーニノフはノックしようと思つたが、思ひ返していきなり案内もなしにパーヴェル・パーヴロヴィチの扉を開けた。あまり廣くはない部屋には、粗末な色塗りの家具が亂暴に、しかし豊富に並べ立てられてゐ、その真中にパーヴェル・パーヴロヴィチが服を着かけたところと見えまだ上着もチョッキもなしの姿で突立つてゐた。興奮のあまり満面に朱をそそいで、唖鳴りつけたり、手振り身振りを使つたり、それのみか恐らく（とヴェリチャーニノフには思はれた）足蹴にかけてまで、まだ八つばかりのいたいけな女の子を、押し黙らせようとしてゐるところであつた。女の子にはお嬢さん然と黒い毛織の短い子供服が着せてあつたが、一見してみすばらしい代物に違ひなかつた。彼女は紛れもないヒステリーの發作を起こしてゐるらしく、ヒステリックにしきりにしゃくり上げながら、兩手をパーヴェル・パーヴロヴィチの方へ差し伸べてゐる。その様子は、彼のからだにすがりつき抱きついて、何事かを哀訴し哀願しようとしてゐるらしい風である。と、一瞬にしてがらりと場景が一變してしまつた。客の姿をみると、女の子はきやつと一こゑ叫んで、隣りの



小部屋へ矢のやうな勢で駆け込んでしまふし、パーヴェル・パーヴロヴィチの方は一瞬間思ひ惑ふ風に見えたが、たちまち顔ぢうが例の微笑に溶け込んでしまつた。ちやうど昨夜、階段口に突立つてゐた彼の鼻先へ、いきなりヴェリチャーニノフが扉を開け放したときに見せた微笑と、寸分たがはぬ微笑であつた。

「これはアレクセイ・イヴァーノヴィチ！」と彼は意外に堪へんといつた聲で叫んだ、「まさかあなたがおいでに下さらうとは……とにかくまあこちらへ、こちらへどうぞ！ ま、その安樂椅子におかけ下さい、それともこつちの肘掛椅子になさいますか。私はちよつと御免を蒙つて……。」

そして彼は、チョッキを着るのを忘れて、いきなり上着をひつかけた。

「まあ他人行儀はおよしなさい、どうかその儘で」と言ひながら、ヴェリチャーニノフは木の椅子に腰をおろした。

「いや、その段ぢやありません、とんだ恰好を御覽に入れて。さあこれでどうやら恰好がつきました。おや、あなたはまた何故そんな隅っこへなんぞ？ さあこちらへ、この肘掛椅子にどうぞ、テーブルの傍へお寄りなすつて……。いや全く思ひがけませんでしたよ、あなたがいらして下さらうとは！」

さう言ひながら、彼の方でも籐椅子の端っこへ腰をおろしたが、ヴェリチャーニノフと肩を並べる位置にではなく、この『思ひがけぬ』客の顔がよく見えるやうに長椅子をくると半回轉させたので

ある。

「思ひがけないなんて、何故です？ ちやうど今頃お伺ひすると、昨夜ちやんとお約束しといったぢやありませんか？」

「來ては下さるまいと思つたのです。今朝目がさめて昨夜のことを残らず思ひ返して見ましたら、もうとても、恐らく永遠に、あなたにお目にかかれる望みも絶えた、とそんな風に思はれたんですよ。」

ヴェリチャーニノフはその間にぐるりを見廻した。部屋の中は雜然たる有様で、床は取りつぱなしになつてゐるし、着物はそこらに脱ぎつぱなしだし、テーブルの上には飲み乾した珈琲カップがあるかと思へば、パン片が轉がつてゐる、まだ半分も飲んでないシャンパンの壺が、栓もせず立つてゐる横には、コップも伏せずにあるといつた始末であつた。彼は横目でちらりと隣室を盗み見たが、そこではこそりとも音はしなかつた。女の子は隠れたまま、ちつと息を殺してゐるらしい。

「これを飲つてらつしやるところぢやなかつたんですか？」とヴェリチャーニノフはシャンパンを指さした。

「昨夜の飲み残しですよ……。」とパーヴェル・パーヴロヴィチはへどもどした。

「いや、全くあなたは變りましたなあ！」

「實は、ひよいとこんな悪い癖がつきましてね。全く妻が亡くなつてからのことなんです。嘘は申し



ませんよ！ 何とも我慢がきんのでしてね。ですが今日は御心配には及びませんよ、アレクセイ・イヴァーノヴィチ、大丈夫今日は酔つちやをりませんし、従つて昨夜お宅でやつたやうな管を卷く氣づかひはありませんからね。とにかく正直の話が、こんなことはみんな妻が亡くなつて以來のことなんですよ！ まつたく假りに半年前に誰かが、私が矢庭に心をもち崩して今日のやうなぐうたらになると言つたところで、またその私の姿を鏡にうつして見せて呉れたにしろ、とても本氣にしないかつたに違ひないでさ！」

「ぢやあなたは、昨夜は酔つてらしたんですね？」

「實はね」とパーヴェル・パーヴロヴィチは小聲で白狀して、やり場に窮した眼を伏せた、「ですが、本當をいふとあれは酔ひの絶頂ぢやなくて、幾分もう下り坂だつたんですよ。私がそれを申すのはつまり、私の酒は後の方がむしろ悪いといふことが分かつて頂きたいからなんです。酒つ氣はもう幾らも残つてゐない、そのくせ一種残忍な氣分と無分別な氣持だけは尾をひいてゐる、おまけに悲哀といふ奴が一層身にしみて感じられる、とまあさういつた工合で。尤も悲しいからこそ飲むでせうけどね。さうなるともう私は、愚にもつかん厭がらせでもなんでも、どしどしとやつてのけるやうになるんですし、人に赤恥をかかせるぐらゐ平氣の平左です。昨夜はさだめし、よほど變なところをお目にかけたでせうね？」

「覺えがないと仰しやるんですか？」

「覺えがないどころか、残らず知つてゐますよ……。」

「そら御覽なさい、パーヴェル・パーヴロヴィチ、私もてつきりそんなことだらうと思つて、さう解釋してゐたんですよ」とヴェリチャーニフは和解するやうな口調で言つた。「それに私も、昨夜はあなたの前で少々激し過ぎましたよ……おまけに妙にいらいらして失禮でした。これははつきり白狀させて貰ひます。實はときどきどうも氣分のよくないことがあるんでして、そこへあなたがいきなり眞夜中に見えたものだから……。」

「さうさう、眞夜中でしたからねえ！」とパーヴェル・パーヴロヴィチは、さも驚いたやうに、また自分を非難するやうに、頭を振りながら言つた、「全く何といふ魔がさしたものでせうなあ！ あなたの方で扉を開けてさへ下さなけりや、私は決してお寄りしなかつた筈なんです。扉口のところで引き返したに違ひないんです。實はね、アレクセイ・イヴァーノヴィチ、私は一週間ほど前にも一度お訪ねしたことがあるんですがね、あひにくお留守だつたんです。で、とにかくもう二度とお訪ねはしない筈だつたんです。かう見えても私だつて多少の自尊心はありますものね、アレクセイ・イヴァーノヴィチ。現在自分がこんな……境涯になつてゐるとは百も承知でゐながら、やつぱり抜け切れないものでしてね。往來でちよいちよいお目にかかつたときにも、私はいつもこんな風に考へてゐた



ものです——『私だといふことが分からん筈がない、だのに外方そつぽを向いて行く、なるほど九年の歲月は争はれんものだ』とね。ですからお傍へ寄つてみようといふ氣にもなれなかつたのです。ところが昨夜ペテルブルグスカヤ區を振り出しにぶらぶら歩き廻つてゐるうちに、つい時間まで忘れちまつたのです。みんなこれと（と彼は酒壺を指さした）、それから感情のさせたことなんです。いやは何ともしや、馬鹿げた話でして！ ですから、もしこれがあなたのやうな方でなかつたら、——だつてあなたは、昨夜のやうな醜態があつたにも拘はらず、昔の友誼に免じてこの通り訪ねて来て下すつたですものね、——私には定めし昔の交誼を結び直さうといふ希望も失せてしまつたに違ひないのです。」

ヴェリチャーニノフはぢつと耳を澄ましてゐた。この男は打ち見たところ、誠意をもつて一種の權威をさへもつて、語つてゐるらしい。それにしても彼は、そもそもこの部屋へはいつて來た瞬間からこの男の言ふことには何一つ信を置いてはゐなかつたのである。

「ときに、パーヴェル・パーヴロヴィチ、あなたはぢやあ、一人ずまひといふ譯でもないんですね。さつきあなたの傍にゐたあの娘さんは、あれは誰のお子さんなんですか？」

パーヴェル・パーヴロヴィチは寧ろこの問ひが意外だといつた面持ちで眉を釣り上げたが、そのくせ晴々と樂しげな眸でヴェリチャーニノフを眺めた。

「誰の娘かつて仰しやるんですか、驚きましたね。あれはリーザぢやありませんか！」と、彼は人懷

こい微笑を浮かべて口走つた。

「リーザといふと？」とヴェリチャーニノフは呟き返したが、その瞬間不意にどきりと胸にこたへたものがあつた。あまりにも突然な衝撃だつた。先刻この部屋へはいつて來てちらとリーザの姿を認めたときも、意外の感はあるにはあつたが、とはいへ豫感だとか特別な想念だとかいふものは、爪の先ほども浮かんでは來なかつたのである。

「さうですよ、うちのリーザですよ、うちの娘のリーザですよ！」とパーヴェル・パーヴロヴィチはにこにこした。

「娘さん？ ぢやあなたとナターリヤさん……亡くなられたナターリヤ・ヴァシーリエヴナとの間には、お子さんがあつたと仰しやるんですか？」おづおづとさも訝かしげにヴェリチャーニノフは問ひ返したが、その聲はもう殆んどひそひそ聲に近かつた。

「何だつてまたそんな？ あ、さうでしたか、なるほどこりやあ、あなたのお耳にはいる譯はない筈でした！ 全く私は何をばやばやしてたんだらう！ あの子を授かつたのは、あなたがお發ちの後のことでしたものなあ！」

パーヴェル・パーヴロヴィチは妙に興奮して、椅子から跳びあがつたほどだつた。とはいへそれはやつぱり嬉しさのあまりだつたらしい。



「私はちつとも知らなかつた」とヴェリチャーニノフは言つて、さつと蒼くなつた。

「ご尤もです、ご尤もです、全くお耳にはいる筈はありませんよ！」とパーヴェル・パーヴロヴィチは感動に聲を曇らして、同じ文句を繰り返した、「あなたも覚えておいでせうが、私も亡妻ももうとても子供は出来ないものと二人して諦めてをりましたのですよ。そこへ思ひがけなく神様のお恵みがあつたわけです。そのときの私の氣持といつたら、これは神様にしか分かつては頂けませんよ！ たしかあれば、あなたがお發ちになつて、ちようど一年してからだつたでしたな！ いやそれとも、いや一年ぢやない、とてもさうはならない、ちよつとお待ち下さい。あのときあなたがお發ちになつたのは、私の覚え違ひでなければ、たしか十月でしたな、それとももう十一月にはいつてからでしたかな？」

「私がT市を發つたのは九月のはじめでしたよ、九月の十二日です。今でもよく覚えてゐますが……」

……。

「おや、九月でしたかしら？ ふむ……何だつてそんな思ひ違へをしたもんだらう？」パーヴェル・パーヴロヴィチはひどく吃驚した様子だつた、「ぢやまあ、さうとすると、ええとどうなりますかな。

——あなたの發たれたのが九月の十二日と、そしてリーザの生まれたのが五月の八日とすると、——九、十、十一、十二、一、二、三、四——つまり八ヶ月と少しになりますね、ね！ せめてあなたが

御存じだつたらと思ひますよ、亡くなつた家内がどんなに……。」

「見せては頂けませんかしら……ここへ呼んで下さいませんか……」と、妙に上ずつた聲でヴェリチャーニノフは口籠つた。

「よござんすとも！」とパーヴェル・パーヴロヴィチは、自分の言ひかけてゐたことなど全く無用のことのやうにあつさり思ひ切つて、せかせかと言つた。「すぐ、今すぐ御覽に入れませう！」そして急ぎ足でリーザのある小部屋へはいつて行つた。

それから三四分はたしかに經つたと思はれる。隣の小部屋では何か早口にひそせそと囁き合ふ氣配がして、リーザの聲もかすかにそれにまじつて漏れて來た。『引つ張り出されるのが厭だと謝つてゐるんだな』——とヴェリチャーニノフは思つた。やがて二人は出て來た。

「何せこの通り、はにかんでばかりゐましてな」とパーヴェル・パーヴロヴィチは言つた、「どうも恥かしがりで、そのくせ氣位が高くて……まるでもう亡妻に生き寫しですよ！」

出て來たリーザはもう泣いてはゐなかつた。目を伏せて、父親に手を引かれてゐる。見ると年の割には身丈が伸びてすらりとした、非常に美しい少女だつた。彼女は大きな空色の眼を、物珍らしげにちらと客の方へあげた。しかし彼の顔は無愛想に一瞥するなり、すぐまた目を伏せてしまつた。子供といふものは知らない人と二人きりにされると、部屋の隅へ逃げて行つて、そこからこのついでまだ



お客に來たこともない目新しい人の顔を、妙に生眞目な不審さうな眼附でじろじろと眺めるものだが、ちやうどそれと同じ子供らしい他所所しい生眞目さが、彼女の眼差しにも浮かび出てゐた。と同時にまた、何かしらもう子供の考へとはいへぬやうなものも、どうやら現はれてゐるらしい——とそんな風にヴェリチャーニノフには思はれた。父親は娘を彼のすぐ傍まで連れて來た。

「そらね、この小父さんはお前のお母さんを御存じだつた方だよ、お父さんたちの仲好しだつたんだよ。だからちつとも怖くはないんだよ、さ、お手をお出し。」

少女はかるく會釋をして、おづおづと手を差しのべた。

「私どもでは、ナターリヤ・ヴァシーリエヴナが、あのお客を迎へるとき膝頭でやる禮をこの子にお教へるのを嫌つて、かうして英國流に、かるく會釋をしてお客に手を差しのべるやうに仕込んで置いたんですよ」と、父親はヴェリチャーニノフの顔にちつと眼をつけながら、言譯がましく言葉を添へた。ヴェリチャーニノフは見つめられてゐるとは知つてゐたけれど、もうかうなつては自分の動搖を押し包まうとしなかつた。彼はぢつと身じろぎもせず椅子にかけたまま、リーザの手をわが手に握りしめて、その子の顔につくづくと見入つてゐた。一方リーザは何かひどく氣にかかることがあると見え、自分の手を客に預けてゐることも忘れて、父親の顔から眼をそらさなかつた。彼女はおどおどした様子で、父親の話を何一つ聞きもらすまいと耳を澄ましてゐた。ヴェリチャーニノフは早速その

大きな空色の眼に目をつけて、これはと思ひ當つたが、何よりも烈しく彼の胸をうつたのは、彼女の顔の人並外れた抜け出るばかりの美しい白さと、も一つ髪の毛の色合ひであつた。これらの特徴は彼にとつて餘りにも意味深いものだつたのである。之に反して顔だちや唇の恰好は、ナターリヤ・ヴァシーリエヴナをさながらに彷彿させた。一方パーヴェル・パーヴロヴィチは、その間に何かしきりに喋りはじめてゐた。ひどく熱の籠つたしみじみとした語調でやつてゐるらしかつたが、ヴェリチャーニノフの耳には一言もはいつて來なかつた。彼がちらと耳にはさんだのは、こんな最後の一句だけだつた。

「……といふ譯でね、アレクセイ・イヴァーノヴィチ、この子を授かつたときの私どもの喜びやうと來たら、とてもあなたには御想像もつきはしませんよ！ 何しろこの子が生まれてからといふもの、この子が私の一切になつてしまつた譯でして、ですからよしんば不幸にして私の靜かな幸福が消えてしまつたにしたらと、——このリーザだけはこの通り私の手許に残つてゐるとまあかう考へてゐるんですよ。これだけはまあ、私が固く信じて來たことなんですよ！」

「で奥さんの方は？ あの人はどう思つておいででした？」とヴェリチャーニノフは訊いた。

「家内ですか？」とパーヴェル・パーヴロヴィチはちよつと鼻白んで、「あなたは家内を御存知だから覚えておいでせうが、何しろあのとほりの至つて口數の少ない女でしたからな。がその代り、臨



終の床でこの子と別かれの言葉を交はしたときの様子といったら……その際になつて平生胸の底に押し込んでゐたことが、すっかり發してしまつたといふ譯ですよ！ いま私は『臨終の床で』と申しましたね。ところが實は、息を引きとる前の日になると、遽かに興奮してぶりぶりだしましてね、——こんな藥なんかで癒さうとしてゐるが、自分のはただほんの當り前の熱病にすぎない、第一いまのお醫者は二人ともてんで盲目なんだ、あのコッホさん（御記憶でせう、私どもの町で一等軍醫をしてゐたあの老人ですよ）、あのコッホさんさへ歸つて見えたら、二週間もすればもうお床上げが出来るんだ、とこんなことを口走る始末なんです！ それからまた、臨終がもう五時間さきに迫つてゐるといふ時になると今度は、三週間すると叔母さんの誕生日だ、誕生祝ひにはぜひとも行つて上げなければならぬなどと、そんなことを言ひ出したものです。この叔母さんといふのはリーザの教母でしてね……」

ヴェリチャーニノフは急に椅子を起つたが、リーザの小さい手はやつぱり放さなかつた。この娘が父親の顔にちつと注いでゐる燃えるやうな眼差しに、何かなじるやうな色のあるやうなのが、彼にはどうも氣になつてならなかつたのである。

「お子さんは加減がお悪いんぢやないですか？」と彼はあはてたやうな、何か變てこな調子で訊いた。

「そんなことはない筈ですがね。尤も……何しろ御覽の通りの状態だもんでして」とパーヴェル・パーヴォヴィチは憂はしげな心痛の色を見せて、しんみりと言つた、「どうも一風變つた子でしてね。ただでも神経質なところへ持つて來て、母親が亡くなつたあとでは二週間ほど病みつきましてね、す

つかりヒステリックになつてしまひました。そら先刻も、あなたがはいつてらつしやる時、泣聲がしてましたでせう、それから、『これ、リーザ、これ！』つて、あれもお耳に入りましたでせう？ 事の起こりはそもそも何だと思ひです？ みんなそれこの子が、お父さんが行つてしまふ、あたしを捨てて行つてしまふ、つて言ひ出したからなんです。つまりその、ママが生きてらつしやる頃みたくにもう可愛がつては下さらないんですもの——とさう言つて、この私を責めるんです。まだ玩具でもかかへて喜んで遊んでゐる筈のこんな小つぽけななりをして、頭の中ちやそんな飛んでもないことを考へてゐるんですからねえ。尤もここではこれといふ遊び相手もないには違ひないんですが。」

「ぢやそのあなたは……あなたは本當にこのお子さんとお二人きりの暮らしなんですか？」

「まつたくの親一人、子一人です。そのほかは女中が日に一度、身の廻りの世話にちよつと來て呉れるだけでして。」

「すると外出されるときは、お子さんを一人のこして行かれる譯ですか？」

「ほかに仕様もないぢやありませんか？ 昨日なんぞは、それあの小部屋に閉ぢ籠めて鏡をおろし



て出掛けたんでして、そのため今日はかうして涙が降りだしたといふ次第なんです。だつてあなた、考へてもみて下さい、他に何とも仕様がなかつたんですよ。一昨日なんかはこの子は私の留守に階下へ降りて行きましたね、男の子に石を頭へぶつけられたといふ始末ですものね。さもないやまた、おいおい泣き出しちまつて、やたらに屋敷うちの人に飛びついて、お父さんはどこへ行つたか？つて訊き廻すんですよ。外聞が悪くつてやり切れませんやね。尤も私の方も相當なものでしてね、ちよつと一時間ほどと言つて出掛けちゃ、朝歸りといったことをやらかすんで、現に昨日なんかもさうだつたんです。まあいい鹽梅に、ここの主婦が錠前屋を呼んで来て錠前を外して呉れたから、とにかく助かつたやうなものです、——全くいい恥づ曝しですよ。吾ながらつくづく人でなしだと思ひますよ。それもこれもみんな私の心に締りがなくなつたせゐでして……」

「お父さん！」と少女はおづおづと心配さうに口を入れた。

「そら、またお前は！ 性も懲もない奴だ！ さつきお父さんは何と言つたかね？」

「もう言はないわ、言はないわ」と恐ろしさに顔色を變へて、急いで父親の前に兩手を合はせながら、リーザは繰り返した。

「とにかくあなた方は、かうした環境の生活を續ける譯には行きませんね」とヴェリチャーニノフは、もう我慢がならぬといった調子でいきなり口を切つた。權威のこもつた聲だつた。——「だつて

あなたは、……あなたは財産のある人ぢやありませんか。それを何だつてあなたは、こんな——第一こんな翼屋の、しかもこんな下卑た環境のところををられるんです？」

「翼屋になんぞと仰しやるんですか？ ですがもう一週間もすれば、この町を發つことになるかも知れんですし、それによしんば財産があるにしたところが、それでなくても随分と出費がかさみましてねえ……」

「いや、もう澤山です、澤山です」と、益々じりじりして來るばかりのヴェリチャーニノフは相手を遮つた。まるで、「もう何も言ふな、貴様が何を言はうとしてるか位ちやんと知つてゐるぞ、貴様がどんな魂膽でそんなことを言ふかも、こつちが先刻御承知なんだ！」と浴びせ掛けでもするやうな勢ひだつた。——「それよかまあお聞き下さい、物は相談ですがね、今あなたはたかがもう一週間の滞在だと仰しやつたですな、しかしそれがまた二週間にならないものでもないです。そこで實は、當地にさる知り合ひの家がありましたね、それがもうこの二十年來、わが生まれた家も同然の心易さで出入りをしてゐる家なんです。ポゴレーリツェフといふ家なんですがね。亭主のアレクサンドル・パーヴロヴィチ・ポゴレーリツェフといふのは三等官でしてね、さういふこともまあ、貴方の今度の御用件の何かの足しにならないものでもありません。今は一家をあげて別荘の方へ行つてゐます。貸別荘なんかぢやありません。豪勢な自分の別荘があるんです。細君のクラウヂヤ・ベトロヴナ・ポゴレーリ



ツェヴァといふのが、姉か母親みたいに私のことを可愛がつて呉れるんでね。八人の子持ちなんです。どうでせう、早速ですが今すぐ、リーザさんをこの私がその家へお連れしようぢやありませんか……善はいそいで、この私が一つ走り行つて来ませうよ。……よろこんで預つて呉れますよ。そしてあなたが發たれる迄のあひだ、わが娘のやうに、生みの娘のやうに可愛がつて呉れますよ！」

彼は怖ろしく苛だつてゐたが、別にそれを隠さうとしなかつた。

「どうもそれは出来さうありませんな」と、パーヴェル・パーヴォイチに澁面をつくり、絞るさうに（とヴェリチャーニノフは思つた）彼の眼を覗き込みながら言つた。

「それはまた何故です？　なぜ出来ないんです？」

「何故つてあなた、こんな小さな子を、それもいきなり、どうして手放せませう。——もちろんそりやあ、あなたのやうな真心の籠つた方が仲に立つて下さるのですから心配はないわけでして、そこを兎や角申すのぢやありませんが、それにしても矢張り見も知らぬ家へやるんですからなあ。それに又、先様がさういふ御大家のことであつて見れば、どんな扱ひを受けるものやら、この私にもとんと見當がつかんものでして。」

「だから今も、この私が内輪の者同然に出入りをしてゐる家だと申し上げたぢやありませんか」と殆んど怒氣を含んだ聲でヴェリチャーニノフは呶鳴りだした。「クラークヂャ・ペトロ・ヴナにしたつて

この私がひと言たのむと言つたら、リーザさんの面倒をみるのをどんなに喜ぶか知れませんか。まるで私の娘でも預るつもりで……ちえつ糞！　現にあなただつて、ただ文句が並べたいばかりにそんなことを言つてをられることを、御自分でも知り抜いてをられるんぢやありませんか。……さあ、もうかれこれ言ふことはないでせう！」

彼は思はずどしんと足踏みまでした。

「いや私の言ふのは、頗るその變なことになるはしないかと云ふことなんです。私だつてやつぱりせめて一二度はお伺ひしてからでなくちやね、さもないと、まるで父親<sup>ていおや</sup>がないみたいになりはしませんかな？　へ、へ、……おまけに向ふがそんな格式の高いお家柄と來ちやあね。」

「なあに、極く氣さくな家ですよ、決してあなたの言はれるやうな『格式』ぶるの何のといふ家ぢやありません！」とヴェリチャーニノフは叫んだ、「それに今も言ふ通り、何しろ大勢の子供ですからね。あそこへ行けば娘さんはきつと生き返つたやうになるでせうよ、何しろそれが大眼目なんですからね……。で、もし何でしたら、あなたは明日お引合せすることにしませう。それにどうせ一度は禮をいひに行かなきやなりませんものね。もしお望みでしたら、毎日でも御一緒に行つて見ませうよ……」

「でも、やつぱり何だか……。」



「まだそんなことを——ちゃんと自分で知り抜いてゐるくせに——あなたの悪い癖ですよ！　ぢやかうしませう、今日は夕方から私のところへお出でになつて、一晩泊つて下さい。そして明日は、十二時には向ふへ着くやうに、ひとつ早目に出かけるとしませう。」

「何から何まで親切に取計らつて下さつて、お禮の言葉ありません。おまけに泊れとまで仰しやつて下さる」——感動に聲をうるませて、パーヴェル・パーヴロヴィチは急に折れて出た、「實にはや痛み入つた次第ですよ……ところで、その別荘といふのは何處にあるんですか？」

「あのうちの別荘はレスノエにあるですよ。」

「ただ、どうしたものでせうなあ、この子の衣裳は？　何しろそんなお家柄の邸へ行くんですし、おまけに別荘だと来ちやあ、——分かつて下さるでせう……父親の氣持としてですな！」

「衣裳がどうだと仰しやるんです。ちやんと喪服を着てゐますね。このほか何か着せたい衣裳があるとでも仰しやるんですかね？　いやいや、これが一番です、これほどお誂へ向きの衣裳がほかにあるもんぢやありませんよ！　ただその下着だけは、もう少しきれいな奴と取り替へるんですな、その襟當てもね……（襟當ても下着ののぞいてる部分も、實際ひどく汚れてゐた。）」

「成程こりやあ、直ぐ着替へさせなくちやなりませんわい」とパーヴェル・パーヴロヴィチはせかせかして言つた、「そのほかの入用の下着類もすぐ揃へてやることにしませう。マリヤ・スイソエヅナ

のところ洗濯に出してあるですよ。」

「ぢや一つ馬車をさう言つて頂きませうか」とヴェリチャーニノフは相手の言葉を遮つた、「それも出来ることなら大急ぎで願ひたいですな。」

ところが困つたことが出来た。リーザがどうしても厭だと言ひ出したのである。最前からの話の模様を彼女は怖ろしさうにちつと聴き耳を立ててゐたのだが、もしヴェリチャーニノフがパーヴェル・パーヴロヴィチを説きつける合間に、氣をとめて彼女の顔をさし覗く暇があつたなら、必らずやそのいたいけな顔に、身も世もあらぬ絶望の色の浮かんでゐるのを認めたに違いないのである。

「あたし行かないわ」と彼女はきつぱりと、小聲で言つた。

「ほうらね、どうです、母親そっくりですよ！」

「あたし母さんになんか似てゐないわ、母さんになんか似てはゐなくてよ！」とリーザは、母親そっくりといふ言葉が彼女にとつては怖ろしい譴責の聲と響くと見え、まるで父親の前にその身の明かりを立てようとするかのやうに、懸命に自分のかほそい兩の手を揉みながら、叫び返すのだつた、

「お父さん、ねえお父さん、もしお父さんがあたしを捨てるんなら……。」

と言ひさして彼女はいきなり　あつけにとられてゐるヴェリチャーニノフに飛びついて來た。

「もしあなたが、あたしを連れて行くんなら、あたしもう……。」



が彼女にはその先を言ひつゝ暇がなかつた。パーヴェル・パーヴロヴィチが、殆んど頸根つこを押へんばかりの劍幕でぐいと彼女の片手を引つ捉へると、今はもう包み隠せぬ憎惡に顔を引つ攣らせながら、無理やりに例の小部屋へ引すり込んでしまつたのである。そこで又もや暫くのあひだ、ひそひそ聲や、押し殺した泣聲やらが洩れて来るのだつた。ヴェリチャー・ニコフはすんでのことに自分もその部屋へ出掛けて行くところだつた。しかしパーヴェル・パーヴロヴィチの方がそれより先に戻つて来て、妙に歪んだ微笑を浮かべながら、あの子はすぐ行くことになりましたと告げた。ヴェリチャー・ニコフはつとめて彼の顔を見まいとして、外方<sup>そつぽ</sup>を向いた。

そこへマリヤ・スイソエヴナもやつて來た。それは彼がさつき廊下へ差しかかつたとき出會つたあの女房で、持つて來た下着類を、リーザの小さな可愛らしい手提袋に詰め込みはじめた。

「ぢあ旦那、あんたがこの娘つ子を連れて行きなさるんですかね？」と彼女はヴェリチャー・ニコフに話しかけた。「ぢや、あんたは家庭<sup>うち</sup>がおりなさるんですね？ 何ほかいい功德でござんすよ、ねえ旦那。このおとなしい子を、焦熱地獄から助け出してやりなさるとはねえ。」

「もういいぢやないかね、マリヤ・スイソエヴナさん」とパーヴェル・パーヴロヴィチは呟きかけた。

「あらまあ、マリヤ・スイソエヴナさんだなんて！ 皆<sup>みんな</sup>してそんな呼び方をして人をおひやかす

んだよ。全體お前さんとこが焦熱地獄でないとでもお云ひかね？ 物どころのついた子供にさ、恥つ曝しの幕ばかり見せてさ、それで済むとでもお思ひですかね？ さあ馬車が參りましたよ、旦那。——レスノーエまででしたね？」

「さう、さう。」

「ぢやあまあ、道中お氣をつけなすつて！」リーザは眞蒼な顔をして、眼を伏せながら出て來ると、手提袋をとり上げた。ヴェリチャー・ニコフの方にはちらとも眼をやらす、ぢつと自分を抑へて、別れ際になつても、先刻のやうに父親に抱きつかうともしなかつた。それどころか、父親の顔は見るのも厭だといった風に見えた。父親は様子ぶつて彼女の髪に接吻して、それから撫でてやつた。すると彼女の唇が引攣つて、顎がびりびりと顫へだしたが、眼はやつぱり父親の方へ上げずにゐた。パーヴェル・パーヴロヴィチはどうやら顔色がわるく、兩手はわなわなと顫へてゐた。彼の方を見まいとあらん限りの努力をしてゐたヴェリチャー・ニコフにもそれだけははつきりと見てとれた。彼はもう唯一つのことしか考へてゐなかつた——一刻も早くここを出て行きたい。

『でーたいこれが、俺の罪だらうか』と彼は考へた、「いやいや、かうなる約束事だつたんだ。』

どやどやと階下<sup>した</sup>へ降りて行つた。そこでマリヤ・スイソエヴナはリーザと接吻を交はした。そしていよいよ馬車に乗り込んでしまつてから、リーザははじめて眼をあげて父親を見て——いきなり兩手



を打ち合はし、何か一聲たかく叫んだ。もう一瞬間の餘裕があつたら、彼女は馬車を飛び出して父親に抱きついたに違ひないが、車はもう動き出してゐた。

## 六 閑人の新らしい妄想

「おや、加減が悪いんじゃないの？」とヴェリチャーニノフは吃驚りして尋ねた。「馬車をとめて、水を持つて來させませうね……。」

彼女は彼の顔をふり仰いで、非難を籠めた燃えるやうな眼でぢつと見た。

「あたしを何處へ連れて行くのよ？」と彼女はだしぬけに鋭い聲で口走つた。

「とてもいいお家へ行くんですよ、リーザ。その人達はいま、それは立派な別荘にゐるの。大ぜいお友達がゐてね、みんなで可愛がつて呉れますよ、とてもいい人ばかりなんだから。……私のことを怒るんぢやありませんよ、リーザ、私はあんだの爲めを思つて……。」

もしこの瞬間に、誰か平生の彼を知つてゐる人が彼を眺めたとしたら、定めし彼の姿が奇怪なものに映つたに違ひない。

「あなたはまあ、——あなたはまあ、——ほんとに何て悪い人でせう？」と、ぢつと堪へてゐる涙のため息をはづませながら、怨みに燃えた美しい瞳を彼の方へきらりと投げかけて、リーザは言つた。

「リーザ、私はただ……。」

「いいえ、悪い人、悪い人、悪い人、悪い人よ！」と彼女は兩の掌を揉みしぼつた。ヴェリチャーニノフは途方に暮れてしまつた。

「リーザ、ねえ可愛いリーザ。そんなに駄々をこねて、この小父さんを困まらせるんぢやありませんよ、ね、いい子だから！」

「お父さんが明日來て下さるつて、あれは本當なの？ 本當？」と彼女は、おつかぶせるやうな勢ひで返事を迫つた。

「本當だとも、本當だとも！ 小父さんが連れて來て上げよう。しつかり捉まへて連れて來て上げますよ。」

「お父さんはまた謔をつくのかも知れないわ」とリーザは足もとに眼を落して囁くやうに言つた。

「ぢや、お父さんはあんだを可愛がつて呉れないと思ふの、リーザ？」

「可愛がつてなんか呉れないわ。」



「あんたを酷い目に逢はせたかい？ え、逢はせたかい？」

リーザは暗い眼附で彼を眺めると、そのまま黙りこくってしまった。そして又もや向ふへ顔をそむけてしまつて、意固地に顔を伏せたまま動かない。彼は一所懸命に少女を宥めすかしはじめた。熱心こめて話してきかせてゐるうちに、自分までが熱病にかかつたみたいになつてしまつた。リーザは疑はしげな敵意を含んだ態度ではあつたが、それでも耳を傾けてゐはした。とにかく彼女の注意を惹き得たと思ふと、彼はひどく嬉しくなつた。で、そもそも酒飲みといふものはどういふものであるか、といふことまで講釋して聽かせたりした。私はあなたが可愛くてならない、だからお父さんが悪いことをしないやうによく見張りをして上げよう、とも言つた。やがての果てにリーザもやつと眼を上げて、まじまじと彼の顔を眺めた。それから彼は、お母さんもよく知つてゐたといふ話をしはじめて、この話が彼女の心を惹くのを見てとつた。次第に彼女の口もほどけて来て、少しづつ彼の質問に返事をするやうになつたが、相變らず用心深く、強情な態度で、ほんの一言か二言しか口に出さなかつた。肝腎な質問になると、彼女はやはり一言も答へなかつた。話が以前の彼女と父親との關係に觸れると、彼女は一切片意地な沈黙を守り通すのだつた。話をしてゐるあひだ、ヴェリチャーニフは先刻のやうに彼女のかぼそい手を握りしめて、それを放さなかつた。彼女の方でも別に振りほどかうとはしなかつた。とはいへまた、この少女がその間ぢうずつと沈黙を守つてゐた譯でもなくて、曖昧な返事の

合間合間には、やはり色々口を滑らしてしまふのであつた。例へば、前にはお父さんの方がお母さんよりも私を可愛がつて呉れた、お母さんは私をあまり可愛がつて呉れなかつた、だから私お母さんよりお父さんの方が好きだつたとか、けれどお母さんがいよいよもう駄目だといふ時になつて、ちやうどみんなが部屋を出てゐて私と二人きりになつたとき、お母さんは一所懸命に私に接吻してさめさめとお泣きになつたとか……だから今ではお母さんが誰よりも好きだ、世界ぢうの誰よりも好きだ、そして毎晩毎晩この一番好きなお母さんのことを思ひ出しては泣いてゐる——とかいつた類ひのことである。しかしこの少女は實に傲慢な娘で、ふと餘計なことを喋つたと氣がつくと急にまた自分に閉ぢ籠つてしまつて、それなり固く口をつぐんでしまふのであつた。そればかりか、自分に餘計なことを喋らせたヴェリチャーニフをさも憎らしさうに睨んだりするのである。

向ふへ着く頃になると、彼女のヒステリックな興奮状態は殆んど消えてしまつたが、その代りに怖ろしく陰氣になつてしまひ、まるで頑なな人嫌ひのやうに、挺でも動かぬ暗鬱な意固地さで、むつつりと不機嫌な様子になつてしまつた。その一方、これまで一度も鬨をまたいだことのない見知らぬ人の家へ連れて行かれるといふ事の方は、今のところでは大して苦にしてはゐないらしかつた。彼女を苦しめてゐるのは全く別の事であることが、ヴェリチャーニフには見てとられた。彼女は父のことが恥かしいのだ。つまり父親が、まるで彼女を彼の手へ投げ渡しでもするやうに、頗る手つとり早く



彼と一緒に出して寄越したといふことが、彼女には恥かしいのだ——とヴェリチャーニノフは推量した。

『この子は病氣なんだ』と彼は考へた、『それも、よほど重いのかも知れない。苛めて苛めて苛め抜かれたんだ。……ええ、酔ひどれの汚らはしい畜生め！ 今こそ奴の正體が分かつたぞ！』

彼は馭者を急ぎたてた。靜かな別荘、新鮮な空氣、ひろびろした庭園、子供達、彼女には初めての變つた生活、それからまたやがて……さうしたものに彼は望みをかけてゐた。そして、やがてその先がどうなるかと云ふことについては、彼は全く樂觀し切つてゐた。充實した明るい希望が輝いてゐるのである。ただ一つ彼がはつきりと意識してゐたのは、——自分がこれまでについぞ、今この瞬間に味はつてゐるやうな感じを経験したことがない、この感じこそ一生涯自分の胸から消え去ることはあるまい！ といふことであつた。『これこそ生の目的なのだ、これこそ人生といふものなのだ！』と彼は勝ち誇つたやうに心に叫んだ。

色んな想念が今や彼の腦裡をかすめるのだつたが、彼はそれらを皆やり過して、そのどれ一つにも氣を留めようとはせず、細々した點からは頑固に眼をつぶつてゐた。さうした細々した點を考慮の外に置くと、萬事は實に明瞭で、確固として不動のものに見えて來るのであつた。そして眼目ともいふべき一つの目論見が、ひとりでに出來あがつてしまつたのである。他でもない、彼は『われわれが總

掛かりになれば、あの胴慾野郎を諸<sup>うん</sup>といはせることも出來さうなものだな』と空想したのである、『そして彼奴はリーザをベテルブルグに置いて行く、ポゴレーリツェフの家に残して行く。もちろん初めはほんの一時とか、假りにとか云ふつもりでだが、とにかく一人で發つて行つてしまふ。そしてリーザは俺の手に残る。それでも結構だ。これ以上何を望むことがあらう？ それに……それにあの男だつて、勿論さうなることを望んでるんだ。でなけりや、何であんなにあの子を苛めることがあらう。』

やつと目ざす家に着いた。ポゴレーリツェフ家の別荘は、實に素晴らしい場所であつた。まづ一番先に彼等を出迎へたのは、どやどやと別荘の表段へ躍り出た子供の一團であつた。ヴェリチャーニノフは随分久しくこの家に顔を見せなかつたので、子供達のはしやぎやうといつたらなかつた。みんなこの小父さんが大好きだつたのである。中でも年かきな連中は、彼がまだ馬車を降りないうちから、早速もうこんなことを言つて囃し立てた。

「裁判はどうなつたの、裁判はもう済んだの、小父さん？」

すると一番ちいさな子までがそのあとについて、上の子達の眞似をしてきやつきやつと騒ぎ廻つた。彼はこの家に來ると、きまつて例の訴訟の一件でなぶり物にされるのである。がやがてリーザの姿を認めると、子供達は早速ぐると彼女のまはりに輪を作つて、子供に特有の物珍らしげな顔附で、無口のまま穴の明くほど彼女の姿を點檢しはじめた。そこへクラウヂヤ・ペトロローヴナも出て來、つ



づいて主人も姿を現はした。夫人も主人もやはり笑ひながら、裁判の方はいかがと、初手からその質問を浴びせかけた。

クラーク・ペトロ・ヴナは年の頃三十七八の、まるまると肥つた褐色髪ブロンズヘアの婦人で、つやつやと林檎のやうな顔をして、まだなかなか美しかった。良人の方は五十六の、利口で抜目のない男だったが、それでゐて無類の好人物であつた。この家庭はヴェリチャー・ニノフにとつて、どんな意味からしても彼自身の言ふやうに『わが生まれた家』も同然なのであつた。だがまたそこには、或る特殊の事情もひそんでゐたのである。といふのは、二十年ばかり前にこのクラーク・ペトロ・ヴナが、當時まだ學生でまづ一介の少年に過ぎなかつたヴェリチャー・ニノフのところへ、すんでのことで嫁に來ようとしたことがあつたのである。それは熱烈な、それでゐてたわいもない、美しい、二人にとつては初戀なのであつた。結局はしかし、彼女がボゴレーリツェフのところへ嫁ぐことによつて幕を閉ぢたのである。それから五年ばかりして二人は再會して、お互ひのあひだの感情はつひに明るい靜かな友情に形を變へたのであつた。二人のあひだには一種の溫かみが永遠に消えずに残ることになり、その一種特別の光明がお互ひの仲を照らすのだつた。この關係についてのヴェリチャー・ニノフの追憶には一點の疚しいところもなく、すべては清らかであつた。そしてこれが、一點の汚れもない美しいものとして残つた唯一の場合であつたといふことが、いよいよ彼をしてこの關係を尊く思はせること

になつたのであらう。この家に来てゐるときは、彼は率直で、無邪氣で、親切で、よく子供の相手をし、偽惡家をきどることもなく、自分の間違ひは何によらず素直に認めるし、何事もかくさずに告白するのであつた。彼はよくボゴレーリツェフ夫婦にこんな誓ひを立てたものである。それは、もう少ししたら俗世間からさつぱりと足を洗つて、彼等のところへ引き移つて來る、そしてもう一生彼等から離れずに餘生を送ることにするといふのである。この計畫のことを彼はひとりで大眞面目に考へてゐたのである。

彼はリーザに關しての必要な事柄を、かなり詳細にわたつてこの夫婦に説明した。だがわざわざそんな説明をするまでもなく、彼がひとこと頼むと言ひさへすれば事足りたのである。クラーク・ペトロ・ヴナはこの『孤兒』に頼ずりをして、私の力の及ぶ限りのことは盡しませうと約束して呉れた。子供達はリーザをひつたくるやうにして、早くも庭へ遊びに連れて行つてしまつた。半時間ほどの賑かな談笑ののち、ヴェリチャー・ニノフは起ちあがつて別かれを告げはじめた。彼は一同がやがて氣づかすにはゐなかつたほど、ひどくいらしてゐた。みんな呆氣にとられてしまつた。三週間も姿を見せずにて、やつと來たかと思ふと僅か半時間で歸つて行かうとするのである。自分でも可笑しいと見え、からからと笑ひながら、明日また伺ひますと約束するのだつた。夫婦は彼に、どうも非常に興奮してをられるやうだがと注意した。すると彼はいきなりクラーク・ペトロ・ヴナの手を



とつて、頗る大切な用件を言ひ忘れたといふ口實のもとに、彼女を別室へ連れ出した。

「あなたは覚えておいでせうが、——私があなたに、あなたにだけ申し上げて置いたことを。それは御主人さへ御承知ないことなんですが——つまりT市時代の私の生活のことです。」

「ええ、よく覚えてをりますわ。そのことなら、たびたび話して下さいましたものね。」

「いや私はお話ししたのぢやない、懺悔をしたのですよ。しかもあなたお一人にだけね！ 私はこれまでついぞ、その女の苗字をあなたに明かしたことがありませんでした。實は——その女はトルウソツカヤといふんです、先刻お話ししたトルウソツキイの女房なんです。亡くなつたといふのはその婦人なんです、リーザはその娘——つまり私の娘なんです！」

「まあ本當？ 間違ひはありませんの？」とクラトヴヂヤ・ペトロヴナは多少の興奮を見せて訊き返した。

「絶対に、絶対に間違ひぢやありません！」とヴェリチャーニノフは熱狂して叫んだ。

そして彼は、そはそはとひどく興奮しながら、できるだけ手短かに一部始終を彼女に物語つた。クラトヴヂヤ・ペトロヴナは前々からその話はすつかり知つてゐたが、その婦人の苗字だけは知らなかつたのである。實はヴェリチャーニノフとしては、誰か自分の知合ひの人間がひよつとしてトルウソツカヤ夫人に出會ひでもして彼ともあらうものがこんな女に、あれほどのぼせ上がつてゐるとはと意

外の感を催しはしまいかと思ふと、ひどく空恐ろしい氣がして、自分のただ一人の心友であるクラトヴヂヤ・ペトロヴナにさへ、今の今まで『その女』の名を明かす勇氣が出なかつたのであつた。

「そしてあの娘のお父さんは何にも知らないんですの？」と、彼の話を聴き終ると、夫人はさう訊いた。

「いいや、ちゃんと知つてゐるんです……。ですが實は、そこんところがまだはつきり見透せない、それが私には實に辛いのですよ！」とヴェリチャーニノフは熱した口調で言葉を續けた、「知つてゐるんだ、知つてゐることは確かなんです。今日も昨日もその氣振りが讀めたんです。ただ私は、奴が果たしてどの程度まで知つてゐるか、そこをはつきり突きとめたいんです。だからいま私はこんなにそはそはしてゐるんですよ。今晚あの男は私のところへやつて來るんです。だが然し、一體どこからあの男はそれを——といふのは一切を、といふ意味ですがね——嗅ぎつけたのだらう、そこがどうも合點が行かん。バガウトフのことならすつかり知つてゐるんです、これは疑ふ餘地がありません。だが私のことになる？ 御承知のとほり人妻といふものは、かうした場合に良人をまるめてしまふことにかけては、なかなか達者なものですからね！ 天使がわざわざ天降つて來て搔き口説いたにしてもいつかな信用しない良人が、女房の口にかかる所と丸められちまふんですからね？ ああお願いです、そんなに非難するやうに首を振らないで下さい、自分を非難することなら私が自分でやつ



てゐます。それどころかずつと前々から、われとわが身に苛責の筈を當ててゐるのです！……正直の話が、現に今朝あの男の宿にゐた時なんども、私には何としても向ふが一部始終を知り抜いてゐるものと思へず、彼奴の眼の前でわれから進んで危い橋を渡つて見せたりして、奴の氣を引いてみた始末なんです。これはまるで嘘みたいな話ですが、實のところ私は、昨夜あいつを酷くぞんざいにあしらつてやつたことが、妙に氣恥かしく厭な氣持なんです。（この話はまたあとで詳しくお話しますがね！）あの男が昨日わたしのところへやつて來たのも、もとはと云へば、俺は自分の恥辱をよく心得てゐるぞ、しかもその當の侮辱者も知つてゐるぞといふことを、私に知らせたいばかりに、つまりその毒々しい慾望がおさへ切れなくなつたからこそ、のこのこやつて來たんです！へべれけに酔つ拂つて、非常識極まる時刻にやつて來た理由は、残らずここにあるんです！尤も彼奴の身にしてみれば、それもさらさら無理はありませんや！つまり怨みのたけを述べ立てにやつて來たといふ次第でね！それをまたこの私が、昨夜といひ今朝といひ馬鹿にのほせ上がった應待ぶりをやつちまひましてね！いやはや輕率とも何とも、全く馬鹿げ切つた話ですよ！自分からのめのめと白狀したやうなものでしてね！それにしても何だつて彼奴は、選りに選つて私があんなに平靜を失つてゐる時を狙つてやつて來たもんだらう。これは確と申し上げときますがね、あの男はリーザを、あの年端も行かないリーザをまで、そりや酷くいびるんですよ。せめて子供を相手にでも怨みを露らしてや

れ、腹いせをしてやれつていふ魂膽なんです！實に彼奴は執念深い奴ですよ——取るに足らん奴には違ひないが、實に執念深い奴ですよ、むしろ惡鬼羅刹みたいな奴です。もとはあれでも精一ばい紳士きどりで構へてゐたもんですが、もともと彼奴は大たわけに過ぎんです。だから御覽なさい——あの男が身を持ち崩したのだつて、元來が自然の成行きに過ぎないんですよ！といった哀れ憫然たる男なんですから、ねえ奥さん、われわれは基督者の目をもつて眺めてやらなきやならないんですよ！ですからね、私はその——あの男に對する態度を斷然變へて見ようと思ふんです。つまりあの男を愛し劬つてやらうと思ふんですよ。これは私の立場から見れば、むしろ『いい功德』になる譯ですよ。だつて、何といつたつて私はあの男に濟まんことをしてゐるに違ひないのですからなあ！それにね、序でだからこれも申し上げちますが、T市にゐたとき私は急に四千ルーブルの金が入用になつたんですよ。するとあの男は、お役に立ちさへすればどんなに嬉しいことかと本心から喜んで、證文一枚とるではなしに、卽座にその金を用立てて呉れたんです。そしてまあどうでせう、この私はそれをあの男の手から手渡しに受け取つたんですよ。ねえ、そのお金をあの男から受けたんですよ、まるで親友から受けでもするやうな平氣な顔をしてね！

「けどねえ、もう少し仰しやることにお氣をつけ遊ばせな」と、今までの話全體に對して、クララ・ヴヂヤ・ペトロ・ヴナは氣遣はしげに注意した、「とても何だか有頂天になつてらつしやるわ。それが



私ほんとに心配ですよ！ そりやリーザは今ぢやもう私の娘も同然には違ひありませんわ、けれどまだまだそこには、未解決な問題がどつさりありますわ！ 何よりも大切なことは、この際あなたがもつと慎重におなりになることですよ。あなたが今のやうな幸福な、有頂天な氣持になつてらつしやる時には、尙更のこと慎重におなりになる必要があるのよ。一たいあなたといふ人は幸福な氣持になると、とても鷹揚に何でもかでも赦したくなるのが癖ね」——と彼女は微笑しながら附け加へた。

そこへヴェリチャーニノフを見送りに一同が出て來た。今まで庭でリーザと遊んでゐた子供達も、彼女を連れて現はれた。打ち見たところ、子供達は先刻よりも一層リーザを扱ひ兼ねてゐるらしくつた。やがてヴェリチャーニノフが左様ならを言ひながら皆の前で接吻を與へて、明日はきつとお父さんを連れて來るからと、眞情をこめて約束を繰り返したときには、リーザはすっかり怯氣づいてしまつた。彼女は黙りこくつたまま、彼の方へ眼をあげずにゐたが、いよいよ彼が馬車に乗り込まうといふ瞬間になると、いきなり彼の袖にしがみついて、哀願するやうな眼でちつと彼を見上げながら、皆のゐない方へ引つ張つて行つた。何か彼に言ひたいことがあると見える。で彼は早速、彼女を別間へ連れて行つた。

「どうしたの、リーザ？」と彼は優しく勵ますやうに問ひかけたが、彼女はまだびくびくとあたりを見廻しながら、彼をもつと離れた隅の方へ引張つて行くのだつた。一同の視線の全く届かない場所へ

行くつもりらしい。

「どうしたの、え、リーザ、どうしたのさ？」

彼女はやはり無言のまま、まだ口を開く決心がつかないらしくつた。例の空色の大きな眼でまじまじと彼の眼に見入つてゐる、そのいたいけな顔は残る隈なく、狂氣じみた恐怖の色に蔽はれてゐる。

「あの人は……首を縊るわよ！」と彼女は謔言のやうに呟いた。

「首を縊るつて、誰が？」とヴェリチャーニノフは仰天して問ひ返した。

「お父さんが、お父さんがよ！ お父さんは夜なかに細引で首を縊らうとしてたのよ！」と少女はせかせかと息を切らしながら言つた、「あたし見たのよ！ こないだも細引で首を縊らうとしたんですつて、自分でさう言つてたわ、さう話して聽かせたわ！ もつと前にだつて縊らうとしたの、しよつちう縊らうとしてゐるのよ。……あたし夜なかに見たの……。」

「そんなことがあるもんか！」とヴェリチャーニノフは半信半疑で囁くやうに言つた。

と、彼女は急に彼に飛びついて手に接吻した。泣きだして、こみあげて來る涙のため息もたえだえに、何かしきりに頼んだり哀願したりするのだつたが、何しろヒステリックな片言の連續なので、彼にはさつぱり意味がつかめなかつた。そしてこの責め苛まれた子供が、狂氣じみた恐怖にとらはれながら、しかも最後の望みの綱にすがるやうに、彼にじつと注いだ疲れ惱める眼差しは、その後にな



つても永久に彼の記憶から消え去らず、夢に現にまざまざと浮かんで来るのであつた。

『それにしてもあの子は、それほどあの男を愛してるのだらうか?』——熱に浮かされたやうな苛立たしい氣分で町へ戻つてくる途々、彼は嫉妬とも羨望ともつかぬ氣持で考へるのだつた、『現にあの子はいずれ先刻も、お母さんの方が好きだと言つてゐたぢやないか……いやいや、恐らくあの子は彼奴を憎んでゐるんだ、愛してなんぞゐるものか!……』

『それにまた、あの首を縊るといふのは一體どうしたことだらう? 一たいあの子は何のつもりでそんなことを言ひ出したんだらう? あの男が、あの太たわけが首を縊るつて?……いや、これは突きとめる必要がある。是が非でも突きとめなくちやならん! そして出来るだけ早く萬事を解決せにやならん——洗ひざらひ解決をつけにやならん!』

## 七 良人と情夫が接吻し合ふ

彼は『突きとめる』ことをひどく焦つた。

『今朝おれは呆氣にとられてぽかんとしてゐたんだ。ほんとに今朝は冷靜に物を見る餘裕がなか

つたんだ』と彼は、はじめてリーザを見掛けたときのことを思ひ出しながら考へた、『だが今度こそは——突きとめてやらなくちやあ。』一刻も早く突きとめたい一心で、彼は眞直ぐにトルッソツキイの宿へやれと馭者に命じかけたが、すぐそれぢや性急すぎるわいと思ひ返した。『いやいや、それよか奴の方から出掛けて来るのを待つた方が上策だ。俺はその間に、この忌々しい訴訟の一件を急いで片付けちまはう。』

そこで彼は熱にでも浮かされたやうに、事件の整理にとりかかつた。ところが間もなく、今日のやうな落着かぬ氣持では、とてもそんな仕事に手をつける譯には行かぬことに氣がついた。彼が食事に掛けたのは五時だつたが、その時になつて不意と或る笑止な想念がはじめて彼の頭を訪れた。『待てよ、かうして俺は自分からこの事件に嘴を突込んで、裁判所から裁判所へとせかせか駈けずり廻つたり、今ではもう俺を敬遠しかけてゐる辯護士を捉まへて御託を並べたりしてゐるが、その實おれは、ただ事件の運びの邪魔をしてゐるのに過ぎないのぢやあるまいか』と、不圖さう思つたのである。彼はこの自分の推量が面白くなつて、愉快さうにからからと笑つた。『ところで、もしこんな考へが昨日おれの頭に浮かんだとしたら、俺はさだめしひどく消げ返つたに相違あるまいて』と彼は益々面白くなつて、かう附け足したところが、かうした愉快な氣持になつたにも拘はらず、その一方では彼はますます落着きのない苛々した氣分になつて行くばかりだつた。やがての果てには陰氣な氣持に沈ん



でしまつた。平靜を失つた彼の想念は次から次へと色んな題目に取り縋つて行つたが、結局のところ彼が本當に求めてゐるものは一つとして捉へられはしなかつた。

『俺に必要なのは彼奴なんだ、あの男なんだ!』と、彼はやがて斷案を下した、『まづ彼奴の謎を解かなくちやならん。裁斷するのはその上でのことだ。よおし——決闘だぞ!』

七時に宿へ歸つて見ると、パーヴェル・パーヴロヴィチがまだ來てゐないので、ひどく意外な氣がした。やがて意外さは忿怒に變り、暫くすると今度はがっかりと氣落ちがして來、たうとう仕舞ひには心配になりはじめた。『分からない、分からない、ああ一體この結末はどうつくんだらう!』と彼は、部屋の中を歩き廻つたり、安樂椅子にごろりと横になつたりしながら、一刻も時計から眼を放さずに、さう繰返した。そろそろ九時ちかくなつて、やつとこのことでパーヴェル・パーヴロヴィチが姿を見せた。

『もしこの男が初めから一杯喰はす氣でゐたのなら、俺をやつつけるに今みたいな機會は又とないに違ひない——御覽のとほり、俺は土臺もうこんぐらかつてゐるからなあ』と、急に元氣づいて、怖ろしくはしやぎ出しながら、彼は心に思つた。

なぜこんなに遅くなつたのかと、勢ひ込んだ浮々した調子でヴェリチャーニノフは浴びせかけたがパーヴェル・パーヴロヴィチは妙に歪んだ微笑でそれに答へ、昨夜とは打つて變つたうち融けた態度

で椅子に腰をおろし、例の喪章つきの帽子を氣輕にぽいと傍の椅子へ抛つた。ヴェリチャーニノフは早くも相手のうち融けた態度を見てとつて、それを先づ胸に疊んだ。

先刻までの興奮はどこへやら、至極おだやかな口調で、餘計な言葉は交へずに、彼はまるで上役に報告でもするやうな調子で、リーザを先方へ送りとどけた話から、向ふの人達が彼女を親切に迎へて呉れた話、あそこの生活が彼女にはどんなに藥だか知れないといふことを物語るのだつたが、そのうち段々とリーザのことはまるで忘れてしまつたやうな顔をして、目だたぬやうに話の向きを變へながら、しまひにはポゴレーリツェフ一家のことに話を聚中してしまつた。つまり、實に氣心のいい人達であるとか、自分がどんなに昔から彼等と馴染であるとか、ポゴレーリツェフといふ男がどんなに立派な、のみならず有力な人物であるとか、さういつた話をしだしたのである。パーヴェル・パーヴロヴィチは放心したやうな様子で耳を傾けてゐた。そして時々ぢろりと上目を使つて、氣むづかしげな狡猾さうな薄笑ひを浮かべて、相手を見やつた。

『あなたは燃え立ち易い方かたですな』と、何か特別に厭味つたらしい微笑を浮かべては、呟くやうに言つた。

『ところであなたは、今日は妙にひねくれていますね』と、ヴェリチャーニノフはさも心外さうにやり返した。



「だが私だつて、人並みにひねくれて見たつてよささうなもんですな？」と、いきなり部屋の隅から躍り出るやうな勢ひで、パーヴェル・パーヴロヴィチは突然嘔鳴り立てた。まるでその一言をきつかけに躍り出してやれと、待ち構へてゐたやうであつた。

「そりや全く御隨意ですがね」とヴェリチャーニノフは、にたりと笑つた。「實は、何事かあなたの身にあつたのぢやないかと思つたもんで。」

「そりや大ありでさあ！」と、まるで何事かあつたといふことを自慢するやうな口吻で、相手は叫び立てた。

「そりやまた、何事がね？」

パーヴェル・パーヴロヴィチは、ちよつと返事をためらつたが、

「實はね、例によつてあのステパン・ミハイロヴィチに、まんまと一杯喰はされたんで……。ほら、あのバガウトフですよ、上流社會出の、ちやきちやきのペテルブルグつ兒でさあ。」

「またしても玄關拂ひを喰つたんですかね？」

「いいや、さうぢやない。今度はどうぞお上がり下さいつて譯でしてな、はじめて中へ通されて、拜顔の榮を得たんです。……ただその、御當人はもう亡者だつたんで！……」

「な、なんですと！ バガウトフが死んだつて？」とヴェリチャーニノフは、何もそんなに吃驚す

る義理合もなさうなものを、ひどく仰天して叫び返した。

「その通り！ 思へばこの六年のあひだ、渝らざる親友でした！ それもつい昨日、正午おひるちかくに亡くなつたのを、私は夢にも知らなかつたんです！ 考へてみると、私は丁度その臨終の瞬間に、時候見舞ひに訪ねて行つた譯でした。明日葬式を出して埋葬してしまふとかで、もうお棺に入れてありました。お棺には暗紅色の天鵝絨の蔽ひがかけてあつて、縁どりは金の組紐でしたつけ……さうさう、死因は神経熱だつたさうですよ。ちゃんと奥へ通されて、つくづくと死顔を拜んで來たんです！ あがるとき、故人の莫逆の友人だと名乗つたもので、それで奥まで通して貰へたんですな。ところで、あの男がこの期に及んでやつと、六年間の渝らざる友情で結ばれた心からの友達になつて呉れたのは、これは一體どうした譯でせうかね？——そこですよ、私の伺ひたいのは！ 實をいふと私の方はどうかといふと、ただあの男に會ひたいばかりに、ペテルブルグ三界までのこのこ出掛けて來たとも言へるんですからね！」

「だが、あなたは何だつてあの男のことですんなにぷりぷりしてるんですね」とヴェリチャーニノフは笑ひ出した。

「まさかあの男が、故意と死んだんぢやあるまいし！」

「だから私だつて、この通り哀悼の意を表しながら物を言つてるぢやありませんか。何ものにも代



へがたい親友でした。あの男は私にとつて、つまりこれだつたんです。」

と言ひざま。パーヴェル・パーヴロヴィチは、いきなり全くだしぬけに、禿げ上がった自分の額のうへに二本の指で角の形をこしらへて（譯者註。他人の妻と通すること、その良人に「角を」生やさせる」といふ。この慣用句に基く動作である。）小聲で連続的にひゅゝゝと笑つた。彼はものの三十秒ほどさうして角をこしらへたまま、ひゅゝゝと笑ひながら、自分の毒々しい鐵面皮さにさながら陶醉したもののやうな眼附で、ぢつとヴェリチャーニノフの眼を覗き込みながら坐つてゐた。こつちはまるでもう、幽霊でも見たやうな具合に、その場に釘づけになつてしまつた。しかし彼の釘づけの態は、ただほんの一瞬間つづいたに過ぎなかつた。次の瞬間ヴェリチャーニノフの口邊には、せせら笑ふやうな、それでゐて鐵面皮なほど落ち着き澄ました微笑の影が、ゆるやかに浮かびあがつて來た。

「それは一たい何のおつもりですかね？」と彼は空とぼけて、又言葉を長く引つぱりながら訊いた。

「これは角のつもりでさ」と、パーヴェル・パーヴロヴィチはずばりと切つて返し、やうやうのことで額から指を離した。

「といふと……あなたの角ですか？」

「いかにもこの私のです、私の授かり物なんですよ」とパーヴェル・パーヴロヴィチは、又もや實に厭らしい顰め面を見せた。

二人は暫く無言だつた。

「いやこれは、あなたもなかなか勇敢な人だ！」とヴェリチャーニノフは口に出した。

「それは私が角をお目につけたからですか？ 時にどうです、アレクセイ・イヴァーノヴィチ、それよか何か御馳走しては頂けませんかなあ！ あなたがTにおいでの際は、まる一年といふもの毎日のやうに、あんないい御馳走をして上げたぢやありませんかね……。一杯飲ませて下さいよ、咽喉がからになつちまつた。」

「ようござんすとも。さうならさうと、早く仰しやつて下さればよかつたのに。——時に何を召上りますかな？」

「召上りますか、ぢやありませんよ。何を一緒にやりませうと仰しやい。ねえ、ひとつ一緒に飲らうぢやありませんか、いかがです」と挑みかかるやうな、それでゐて同時にまた一種奇妙な不安さうな様子で、パーヴェル・パーヴロヴィチはぢつと彼の眼に見入つた。

「シャンパンにしますか？」

「でなくて何にしますかね？ まだヴォトカの出る幕でもなし……。」

ヴェリチャーニノフは緩くりと起ちあがつて、呼鈴を鳴らしてマーヴラを階下から呼び、酒の仕度を命じた。



「よろこばしき再會をことほいで、祝杯を擧げるわけですね。何しろ相見ざること九年でしたからなあ」と、要りもせぬ文句を取つてつけたやうにパーヴェル・パーヴロヴィチは言つて、くすくす獨り笑ひをした、「今ぢやもうあなたが、いやあなたお一人だけが、私にとつてのまことの友達といふ譯ですからね！ ステパン・ミハイロヴィチ・バガウトフ今や亡しですからなあ！ 詩人の文句で言へばかうですよ。――」

大いなるパトロクルス（譯者註。「イリアッド」中の希臘の勇士。アキレスの親友で、トロイ勢を追撃中へクトルのため仆された。）は今や亡く

卑しきテルシーテス（譯者註。トロイ攻圍の希臘陣營中で最も醜惡で卑劣な漢。オメロスによればアキレスに殺されたといふ。）は残りける！」

この「テルシーテス」といふ言葉を口にしたとき、彼は自分の胸を指さきでとんと突いた。

『ちえつ、この豚野郎め、さつさと腹の中をぶちまけたらいいぢやないか、もともと俺は當てこすりは大嫌ひなんだ』とヴェリチャーニノフは心に思つた。憎念に胸は煮えくりかへつて、彼はもう先刻からやつとこのことで自制してゐたのである。

「ちよつと伺ひますがね」と彼はさも忌々しげに口を切つた、「そんなに眞向からステパン・ミハイロヴィチを非難されるのでしたら（彼は今ではもうこの男をバガウトフなどと呼び棄てにはしなかつた）、――その當の侮辱者が死んだことは、あなたには嬉しい筈ぢやありませんか。それを何だつてあなたはぶりぶりしてゐるんです？」

「そりやまたどんな嬉しさですね？ 何だつてまた嬉しいんでせう？」

「私はあなたの氣持になつてさう考へるだけですよ。」

「えへへ、その點に關する限り、あなたは私の氣持を誤解してらつしやるですね。さる賢人の言ひ草ぢやないが、『死せる敵はよし、されど生ける敵は更によし』つてね、ふ、ふ！」

「だがあなたはその生ける敵なるものを、たしか五年間も毎日見てらした筈ぢやありませんか。いかげん見飽きはしませんでしたかね」とヴェリチャーニノフは、底意地わるくつけつけと斬り込んだ。

「ぢやその頃から……その頃から私が感じてたと仰しやるんですか？」と突然パーヴェル・パーヴロヴィチは、又もや隅から躍り出るやうな勢ひで叫び立てた。その様子には、たうとう待ち構へてゐた問ひを相手が掛けて來た、とでもいひたげな喜びの色さへ見えた。――「ぢや一たいあなたといふ人は、アレクセイ・イヴァーノヴィチ、この私をどんな人間だと思つてらつしやるんです？」

と、遽かに彼の眼差しには、或る全く新しい思ひもかけぬやうな色が閃めいた。それは、今まで厭らしい澁面ばかり作つてゐた、毒念に満ちた彼の顔を、全く別の顔附に變へてしまふほど烈しいものであつた。

「ぢや、あなたは本當に何一つ感づかなかつたんですか！」とヴェリチャーニノフは、あまりの事の



意外さに途方に暮れて口走つた。

「どうして感づく筈がありませんか？ 感づく譯がないぢやありませんか！ おお、エピテルのともがら（譯者註。自らを全智全能と思ひあがつた人々）よだ！ あなたにかかつちや、人間も犬つころと同じなんだ。何でもかでも自分の狭い了簡で判断しようとなさる！ さあ、これだ！ これを一つ鵜呑みにして貰ひませうか！」  
——と言ひざま、彼は憤然としてテーブルを拳で叩いた。が、直ぐさま自分の方がその音にびつくりして、おどおどした眼附きをした。

ヴェリチャーニノフはきつと相手を見返した。

「いや、パーヴェル・パーヴロヴィチ、あなただつてお分かりでせうが、そもそもあなたが感づいておいでだつたらうと、おいででなかつたらうと、私にとつては全くどつちだつていいことぢやありませんか？ もしあなたが知らずにをられるのなら、それは何といつてもあなたの名譽になるんだし……それはさうと、私にはどうも腑に落ち兼ねるんだが、何だつてあなたは私なんぞを、打明け話の聴き役に選ばれたんですか？……」

「私は何もあなたのことを……怒らないで下さい、何もあなたのことを言つてゐるんぢやないんです……」とパーヴェル・パーヴロヴィチは眼を落として、呟くやうに言つた。

マーヴラがシャンパンを持つてはいつて來た。

「そうら來た！」とパーヴェル・パーヴロヴィチは一條の血路を見出した者の喜びを明かに見せて、叫び立てた。

「コップは、姐さん、コップはどうしたね、よう、素敵、素敵！ いやもうこれで何一つ不足はありませんよ。おまけに栓まで抜いてあるんですかい？ 大した氣の利きやうだ、全く恐れ入つたね、別嬪さん！ ぢや、もう向ふへ行つてもよござんすよ！」

そして、みるみる勢ひを盛り返して、またもや不敵な眼附をヴェリチャーニノフに注いだ。

「まあ白狀するんですね」と彼はいきなり忍び笑ひをした、「かういつた話はあなたにとつて實に興味津津たるものがあるんでせう。いま仰しやつたやうに『全くどつちだつていいこと』どころぢやないんでせう。だから、もし私がこのまま話を打ち切つて、今すぐ起ちあがつて歸つてしまつたら、あなたは定めし情け返るに違ひないですな。」

「なあに、平氣ですよ。」

『へ、嘘つけ！』パーヴェル・パーヴロヴィチの微笑がさう言つた。

「ところで、ぼつぼつ始めませうか！」と彼は二つのグラスをなみなみと満たした。

「乾杯を致します！」と彼はグラスを上げながら宣言した、「天國に眠る友ステパン・ミハイロヴィチの健康を祝す！」



彼はグラスを舉げてぐつと飲み乾した。

「そんな乾杯は御免を蒙りませう」とヴェリチャーニノフはグラスを下に置いた。

「何故ですか？ 愉快な乾杯ぢやありませんか。」

「ねえ、あなたは今ここへいらしたとき、もう酔つてらしたんぢやありませんか？」

「ちよつと飲つて來ました。それがどうかしましたかね？」

「いや別に何でもありませんがね。ただ私には、あなたが昨夜も今朝も、わけても今朝などは、亡くなつたナターリヤ・ヴァシーリエヴナのことを心から悲しんでをられるやうに見えたものでね。」

「で、今は家内のことを心から悲しんでゐないと、どこの誰があなたに言ひました？」と勿ちパーヴェル・パーヴロヴィチは、またもや撥條を引き抜かれてもしたやうに、躍りかかつて來た。

「いや私はそんなことを言つてゐるんぢやない。御自分でもお分かりのことと思ふが、ステパン・ミハ일로ヴィチの一件はひよつとしてあなたの思ひ違ひかも知れんですからねえ。そして、何しろことは重大ですからなあ。」

パーヴェル・パーヴロヴィチはにやりと狡るさうに笑つて、妙なめくばせをした。

「ははあ讀めた。あなたは、この私がどうしてステパン・ミハ일로ヴィチのことを嗅ぎつけたか、それが知りたいと見えますなあ！」

ヴェリチャーニノフはさつと顔を赤らめた。

「もう一度言はせて貰ひますが、私にはどつちであらうと同じことですよ」と言つて、『こいつめ、この酒壇もろとも今ひと思ひに抛り出せないもんかなあ』と、ぷりぷりしてさう考へ、そのため益々赤くなつた。

「なあに、いいでさ！」と、相手を力づけでもするやうにパーヴェル・パーヴロヴィチは言つて、自分のグラスを再び満たした。

「ぢや只今すぐ、如何にして私が『一部始終』を嗅ぎつけたかをお話しして、あなたのその火のやうな熱望を満たして差上げることにしませう……だつて、何しろあなたは燃え立ち易い方ですからね、アレクセイ・イヴァーノヴィチ、おつそろしく燃え立ち易い方ですからねえ！ えへへ！ ときに先づ煙草を一本頂きたいですな、といふのはこの三月からこつち、私は……」

「さあどうぞ。」

「三月からこつち、すつかり身をもち崩しちまひましてねえ、アレクセイ・イヴァーノヴィチ。それといふのも、みんなかうした事からなんですよ——では聽いて頂くとしませうかね。——そもそもですな、あの肺病といふ奴は、あんたも先刻御承知のとほり——彼は次第に狎々しい口の利きやうをしだした、「まことに面白い病氣でしてなあ。肺病患者といふものは、自分が明日死ぬなんてことは



夢にも考へずに、時々刻々に死に近づいて行くものなんです。そこであのナターリヤ・ヴァシーリエ  
 ヴナも御多分に漏れず、息を引きとる五時間前だといふのに、もう二週間したら四十露里はなれた町  
 に住んでゐる叔母さんのところへ出掛ける心算でゐたんです。それからもう一つ、これは多分あなた  
 も御存じのことと思ふが、世の婦人達に共通な、いや恐らくその婦人達をめぐる紳士方にさへも共通  
 な、一つの習慣——といふより寧ろ悪習がありますな。つまりそれは、戀文に屬する古反古を手許に  
 藏くつておくといふ奴ですな。安全なことを言つたら煖爐へ抛り込むに越したことはないでせうにね、  
 さうぢやありませんか？　ところが連中と來たらどんな紙屑の切れつ端でも、後生大事に手文庫や  
 針箱のなかに藏ひ込んで置くんです。それどころか、年代や日附や部類わけにして、番號まで打つて  
 あるといふ始末なんです。そんなのが御當人に見りやあ餘程心の慰めになるんでせうかね——そ  
 こんところは私には分かりませんが、とにかく楽しい思ひ出のための所作には違ひないですな。——  
 —さて、何しろ亡くなる五時間前までは叔母さんの誕生祝ひに出掛けるつもりでゐたほどですから、  
 ナターリヤ・ヴァシーリエヴナはむろん自分が死ぬなんてことは考へてもゐませんでしたし、いよい  
 よ息を引きとるといふ時まで、相變らずコッホ先生の來られるのを待つてゐたやうな譯です。そんな  
 様子でナターリヤ・ヴァシーリエヴナが亡くなると、螺鈿と銀で象眼のしてある黒檀の手文庫が、そ  
 のまま彼女の書卓の中に残つてしまつたのです。それは妻が祖父から受けついだ謂はば父祖相傳の手

文庫でしてね、ちゃんとかう鍵のかかるやうになつた、なかなか綺麗なものでしたよ。ところです  
 ————實にこの手文庫からして、一切の事情が暴露することになつたんですよ。つまり何もかも洗ひざ  
 らひ、凡そこの二十年來あつたことが一つ残らず、御丁寧に日附別け年代別けになつて、ばれちまつ  
 たんです。おまけにまたあのステパン・ミハイロヴィチといふ男が頗る文學好きと來てたもんでね、  
 一篇の頗る情熱的な戀愛小説を物して雑誌に投稿したことさへあるくらゐですから、件んの手文庫に  
 發見された彼の作品は百篇に垂んとするといつた始末でしてね——尤も五年の月日でしたからなあ。  
 中にはナターリヤ・ヴァシーリエヴナが手づから番號を記入した奴までありましたつけ。でどうでせ  
 うな、こんなことは一たい良人の身にとつて、愉快なことではせうかね？　どうお考へですか？——  
 ヴェリチャーニフは素早く當時のことを思ひ合はせて、自分が一通の手紙も一通の覚え書きもつ  
 いぞナターリヤ・ヴァシーリエヴナ宛に出した覚えのないことを確かめた。ペテルブルグへ舞ひ戻つ  
 てからは、なるほど手紙を二通出すには出したが、それは豫ての申合はせに従つて上書きを夫妻連名  
 にして置いたのである。またお拂箱を宣言して來たナターリヤ・ヴァシーリエヴナの最後の手紙には  
 彼は返事も出さなかつた。

物語を終へたパーヴェル・パーヴロヴィチは、たつぷり一分間は口を噤んで、にやにやと押しつけ  
 がましい微笑を口邊に漂はし、相手の返事を暗にうながすのであつた。



「どうしてあなたは、私の質問に返事をなさらないんですね？」と、たうとう痺れを切らして、苦痛の色をありありと浮かべながら、彼は口走った。

「と仰しやると、どんな質問でしたつけ？」

「それ、手文庫の蓋を開いた良人の氣持が、愉快なものかどうかといふことですよ。」

「おやおや、それが私の知つたことですかい！」とヴェリチャーニフは苦々しげに片手を振り、椅子を離れて、部屋の中をあちこち歩きはじめた。

「して私は敢へて斷言しますがね、あなたはいま私のことを、『自分から寢取られの一件をしやあしやあと白狀するなんて、この汚らしい豚野郎め』とお考へですな、へ、へー 何ともはや口喧ましい人だな……あなたといふ人は。」

「そんなことはちつとも思つちやゐませんよ。それどころかあなたの方が、當の侮辱者に死なれておそろしく氣が立つていらつしやるんですよ。おまけに酒もやり過ぎてをられるやうだ。尤も私としちゃ、それもこれもさうさう御無理のない次第だと思ひますがね。あなたが生きたバガウトフを求めてらした氣持は、私には實によく分かるんです、だからあなたの御無念さはさぞかしと察し入る次第ですがね。ただ……」

「だが、そのあなたの御見解によると、私は何でバガウトフを求めてゐたことになるんですか？」

「それは私の知つたことぢやないですなあ。」

「いや、てつきり決闘のことを仰しやつてらしたんでせう？」

「ちえつ、下らない！」ヴェリチャーニフはますます自制を失つて來た、「私の考へてゐたのはこれですよ——つまり、苟も紳士たる者は……かうした場合にあつても、茶番じみた寢言や、愚にもつかないお芝居や、笑止千萬な愚痴や、へどの出さうな當てこすりや——さういつた仕事にまで身を落とすことは敢へてしないものだ、何故つてそれぢや益々恥の上塗りになるばかりですからね。それより、正々堂々と正面きつて行動するものだ、と思ふですよ——紳士としてね！」

「ほほう成程、ですがこの私が紳士なんかぢやないとしたらどうなりますね？」

「それも矢張り私の知つたことぢやないですな……それはさうと、さういふ事のあつた後で、生きたバガウトフがあなたに入用になつたのは一體どうした譯なんですか？」

「いやそれは、ほんの一目でも友達の顔が見たかつただけですよ。まあ一本買つて、ともに杯を擧げたかつたんですな。」

「あの男があなたと一杯やらうとは思へませんなあ。」

「そりやまた何故ね？ *Noblesse oblige* (貴族の義務) ですかね？——だが、現にあなただつて、かうして私と差向かひで飲んでをられるぢやありませんか。あの男のどこがあなたより立派だといふんで



す？」

「私はあなたと一杯やつた覚えはありませんよ。」

「何だつてまたあなたは、急にそんなに高慢になられたんです？」

ヴェリチャーニノフはいきなり、引擧つたやうな神経質な笑ひ聲を立てて、

「へつ、糞つ！ あんたと云ふ人は、實にその一種『肉食型』の人ですなあ！ 實をいふと今の今まで、あなたは二介の『永遠の良人』に過ぎんと思つてたんだが、なかなかどうして！」

「そりや何のことです、その『永遠の良人』つていふのは？」とパーヴェル・パーヴロヴィチは俄然聽耳を立てた。

「いやなに、良人の一つの型タイプなんですがね……説明すると長くなります。それよかそろそろ引き上げて頂きませうか、もう歸つてお寢みになる時刻ですよ。あんたにはうんざりしましたよ！」

「それに、その肉食つていふのはどういふことです。いまたしか肉食型とか仰しやいましたね？」

「ええ、言ひましたよ、あなたは『肉食型』だつてね。——あなたに對する嘲罵としてね。」

「で、その『肉食型』つていふのは一體どういふ意味なんです？ 話して下さいよ、アレクセイ・イヴァーノヴィチ、お願いです、後生です。」

「いや、もう澤山だ、澤山ですよ！」と急に又もや怖ろしく腹を立てて、ヴェリチャーニノフは嘔鳴

つた、「もうお歸んなさい、出て行つて下さい！」

「どつこい、澤山ぢやないですよ」とパーヴェル・パーヴロヴィチも憤然として躍り上がった、「よしんば私の方でもあなたにうんざりしてゐるにしても、まだまだ澤山どころの騒ぎぢやありませんや。だつて私達はまづ一杯やらなければならんですからね、プロジェクト、かちんと行かなければならんですからね！ それが濟んだら引き上げますがね、今ところはまだまだでさあ！」

「パーヴェル・パーヴロヴィチ、あなたは今夜ここを出て失せて下さるんですか、否ですか應ですか？」

「それや、いかにも出て失せては上げますがね、その前にまづ一杯いきませうや！ あなたはこの私とは飲みたいくないと仰しやつたが、私の方ぢやまた、この私と一杯つき合つて頂きたいんですよ！」彼はもう道化の面をはづしてゐた。えへら笑ひもしてゐなかつた。又しても俄かに彼の相貌は一變してしまひ、つい今しがたまでのパーヴェル・パーヴロヴィチの姿や調子とは、似ても似つかぬものになつてしまつたので、さすがのヴェリチャーニノフもすつかり見當がつかなくなつた。

「さあ飲みませう、アレクセイ・イヴァーノヴィチ。嫌だなんて言はないでさ！」とパーヴェル・パーヴロヴィチは、ぎゆつと彼の手首をつかみ、異様な眼附きで相手の顔に見入りながら、言葉をつづけた。それで見ると、只の乾杯だけの話でないことは明かだつた。



「ぢやあ、やりますか」と相手は呟くやうに言つた、「だが肝腎の酒が……飲み滓ぢやあ……」  
 「ちようど二杯分のこつてる、きれいな飲み滓がね。ぢやあ飲ませう、かちんと行きませうぜー  
 さ、どうぞ杯をお取りなすつて。」

二人はグラスを打ち合はせて、ぐつと飲み乾した。

「さあ、かうなつた以上は、もうかうなつた以上は……ああ！」とパーヴェル・パーヴロヴィチは矢  
 庭に片手で額をひつ掴んで、數秒のあひだそのままの姿勢でゐた。ヴェリチャーニノフは、今こそい  
 よいよ相手が最後の言葉を吐き出さうとしてゐる、とそんな氣配を漠然と感じた。しかしパーヴェル・  
 パーヴロヴィチは一言も言ひ出さなかつた。彼はただ、ヴェリチャーニノフをぢろりと一瞥して、又  
 もや先刻のやうに、にやりと狡猾さうな、めくばせでもするやうな微笑を、口もと一ぱいに靜かに浮  
 かべただけであつた。

「一體あなたは、この私にどうしろと言ふんです、えゝ酔つ拂ひの先生！私をからかふんですね！」  
 とヴェリチャーニノフは地團駄を踏んで、狂氣のやうに呶鳴つた。

「まあお靜かに、お靜かに、何だつてさうがなるんです？」と、パーヴェル・パーヴロヴィチはあは  
 てて片手を振つた、「からかふなんて、飛んでもないこつてすよ！あなたにはお分りですか、今では  
 あなたが私にとつて——それ、この通りの方<sup>かた</sup>になられたことがですよ！」

と言ふが早い、いきなり彼の手をとつて唇を押しあてた。ヴェリチャーニノフはハツと思ふ暇も  
 なかつた。

「今ぢやあなたは、私にとつてかういふ方なんですよ！ぢやあもう——これから出て失せるとしま  
 せうかな！」

「ああ、ちよつと。ちよつと待つて下さい！」とヴェリチャーニノフは吾に返つて、呼びとめた、「つ  
 い申し忘れたんですが……」

パーヴェル・パーヴロヴィチは扉口でくると振り返つた。

「つまりですね」とヴェリチャーニノフは怖ろしく早口に、顔を赤らめて、全く外方を向いたまま、  
 呟くやうに始めた。「あなたは明日はどうしてもポゴレーリツェフの家へ顔を出さなきやいけません  
 ね……おちかづき旁々お禮につて譯ですな——どうしてもね……」

「行きますとも、かならず行きますよ、ちやあんと承知の助でさあ！」とわざわざ念を押すには及ば  
 んといふ印しに片手を素早く振りながら、待つてましたと云はんばかりの勢ひでパーヴェル・パーヴ  
 ロヴィチは相手の言葉を引きとつた。

「おまけにリーザさんもあなたのお出でを待ち焦れてゐますからね。私は連れて来ると約束を……」  
 「リーザ？」と、パーヴェル・パーヴロヴィチは矢庭にまた振返つた、「リーザですと？ だがあな



たは御存じですか、あのリーザが私にとつて何者であつたかと云ふことを。曾て何者であり、現にいま何者であるかと云ふことを？ いいですか、曾てあり現にある、ですよ！」と彼は殆んど狂せんばかりの態で、急に叫び立てた、「だが……へつ！……こりやまあ後廻しさ。その方は一切後廻しにしませうよ。……差當たつてはと、實はねアレクセイ・イヴァーノヴィチ、あんたと乾杯をしただけぢや、どうも私は物足りないんですがね。も一つ是非聴き届けて頂きたいお願いがあるんですよ！……」

彼は傍の椅子に帽子を置くと、また最前のやうに、少々息を切らしながら彼を見詰めた。

「私にキスして下さい、アレクセイ・イヴァーノヴィチ」と、だしぬけに彼は切り出した。

「酔つてゐますね？」と相手は叫んで、たじたとつた。

「いかにも酔つちやをりますがね、それはとにかくキスして下さい、アレクセイ・イヴァーノヴィチ、さあ、キスして下さいつたら！ 私だつて今しがたあなたの手にキスしたぢやありませんか！」アレクセイ・イヴァーノヴィチは、棍棒の一撃を肩間に喰つたもののやうに、暫くは口も利かなかつた。が突然、彼は自分の肩までしかないパーヴェル・パーヴロヴィチの方へ身をかがめて、その唇に接吻した。ひどく酒臭かつた。とはいへ彼は、自分が相手に接吻したといふことを、必らずしもはつきりと意識してゐる譯ではなかつた。

「さあやつと、今だからこそやつと……」と醉眼をぎらぎらと光らしながら、再び狂せんばかりの

醉態をあらはして、パーヴェル・パーヴロヴィチは叫び立てた、「今だからこそ言ひますがね、あのとき私はかう考へたもんでさ——『あの男も本當にさうなんだらうか？ もしあの男も、あの男までがさうだつたとしたら、このさき誰一人として信用は置けんことになる！』つてね。」

パーヴェル・パーヴロヴィチは急に聲を上げて泣き出した。

「だから分かつて下さるでせうね、今ぢや本當の友達はあなた一人だといふことが？……」

さう言ふと彼は帽子を抱へて、逃げるやうに部屋を出てしまつた。ヴェリチャーニフは、昨夜のパーヴェル・パーヴロヴィチの最初の來訪のあとと同じに、又もや數分間ひとつ場所にちつと立ち盡くしてゐた。

『ええ、相手はどうせ酔つ拂ひの大たわけだ、それだけの話さ！』彼は片手を振つた。

『斷じてそれだけの話さ！』と、やがて着物を脱いで寢床に横になつたとき、彼は力を籠めてもう一度繰返した。

## 八 リーザの病氣



翌る朝、ヴェリチャーニノフは、ポゴレーリツェフ家へ行くためきつと遅れずに来ると約束したパーヴェル・パーヴロヴィチを待ち受けながら、部屋の中をあちこち歩き廻つては、珈琲をちびりちびりやつたり、煙草をふかしたりしてゐた。その間ちう絶えず彼は、自分が朝ふとめざめて、その前夜おのれの頬べたに受けた平手打ちのことを絶えずじりじりと思ひ出してゐる男に、つくづく似てゐるなと思へてならなかつた。『ふうむ……さては彼奴め事の真相を知り抜いてゐるんだな、そしてリーザをだしに使つて俺に復讐を企てるんだな!』と、彼はぞつとしながら思つた。

哀れな幼女の愛らしい面影が、ふと物悲しく彼の眼の前を横切つた。今日、それも程なく、もう二時間もすれば、俺のリーザに會へるんだと思ふと、彼の胸は烈しく高鳴りはじめた。『ええつ、このうへ何の文句があるんだ!』と彼は熱を籠めて斷定した、『これこそ俺の生活の全部ぢやないか、俺の目的の全部ぢやないか! 平手打ちが何だ、じめじめした追憶が何だ! ……俺のこれまでの生活と來たら一體何のさまだ? 混亂と悲哀だけだつたぢやないか。……所が今ぢや——まるで別物だ、心機一轉だ!』

だが、かうした有頂天な氣持にも拘はらず、彼はますます憂鬱になつて行くばかりだつた。

『彼奴はリーザをだしに使つて俺を苦しめようといふのだ——これは明白だ! だからこそリーザをあんなに苛<sup>いび</sup>るんだ。つまりそれでもつて、過去の一切に對して俺に返報しようつて魂膽なんだ。ふ

うむ……勿論この俺としちや、昨夜のやうな亂暴な眞似を奴が仕掛けて來るのを、そのまま許して置く譯には行かんて——彼はさつと顔を赤らめた、『だが……しかし、これはどうだ、まだやつて來ないわい。もう十二時だといふのに!』

彼はじりじりしながら十二時半まで待つた。胸の苦悶はますます烈しくなるばかりだつた。パーヴェル・パーヴロヴィチは姿を見せない。たうとう仕舞ひに、ずつと前から彼の胸に首をもたげてゐた想念——つまり、あの男は又もや昨夜のやうな不意打ちを喰はせたいばかりに、故意とやつて來ないつもりだなといふ想念が、彼を憤激の極に追ひ込でしまつた。『奴は知つてゐるんだ、俺の行動が奴の手中に握られてゐることを! それから、このまま行かずにゐればあのリーザがどうなるかと云ふことも! だが奴を連れずにどうしてこの俺が、おめおめとあの子の前へ出られよう!』

たうとう待ち切れなくなつて、きつかり晝の一時に自分からポクロフスキイ・ホテルへ馬車を驅つた。宿の者に尋ねると、パーヴェル・パーヴロヴィチは昨夜はたうとお歸りがなく、今朝八時過ぎに歸つて見えたが、ものの十五分もたたぬうちにまたお出掛けになつた、といふ話だつた。ヴェリチャーニノフは、パーヴェル・パーヴロヴィチの部屋の扉口につつ立つて女中の話を聴きながら、錠のおりてる扉の把手を無意識のうちにひねつてみたり、押したり引張つたりしてゐた。ふと吾に返ると、彼はべつと唾を吐いて錠前を思ひ切り、マリヤ・スイソエヴナのところへ案内を頼んだ。だが彼



の来たことを耳にすると、自分からいそいそと出て来た。

この女は氣立てのいい女房だつた。ヴェリチャーニフが後になつてこの女との話の顛末を、クラ  
ーヴヂヤ・ペトロヴナに傳へた時の形容に従へば、『高尚な感情を具へた女房』であつた。昨日あ  
の『嬢つちゃん』を連れて行つた先の首尾を手短かに問ひ訊してから、マリヤ・スイソエヴナは直ぐ  
さまバーヴェル・パーヴロヴィチの行狀に話題を向けた。その言葉を借りていふと、『あの嬢つ子さ  
んさへゐなけりや、とうにあんな男は追つ立てを喰はしてやるんですよ。ホテルからこの翼屋へ無理  
やり移つて貰つたのも、實を申せば餘りと見兼ねる振舞ひが多いからなんですよ。一體あな  
た、物どころのついた子供のゐるところへ、よる夜なかな變な女を連れ込むなんて、何ほ何でもひど過  
ぎるぢやありませんかね！』『おい、この女はな、俺の氣持ひとつでお前のお母ちゃんになる人だ  
ぞ！』とかう呶鳴るんでございますよ。おまけにどうでせうね。その賣女と來た日にや、あの男の鼻  
面へべつと唾を吐きかけたんですからね。そして『お前さんがあたいの娘なもんかね、お前さんなん  
か、うらなりの鬼子だよ』つて、かうなんですよ。』

「まさか、そんなことが？」とヴェリチャーニフは眼をまるくした。

「この耳でちゃんと聞いたんです。いくら酔つ拂つてゐて、まるで正體がないからといつて、そんな  
眞似を子供の前でしていいのですかね。なんぼ年端も行かない子供だといつても、それなりにちや

んと物の見分けはつくんですからね！嬢つちゃんはしくしく泣いて、まるでもう生きた心地もないほ  
どの悶えやうなんですよ。それからまた近頃のこと、この屋敷の中で大ごとが持ち上がりましてねえ。  
何でも人の話ぢや議員さんだとか何さんだとかいふ話でしたがね、その男が晩方來てホテルの一間を  
借りたかと思ふと、翌る朝にはもうぶらんこ往生をしちまつたんですよ。お金をすつかり使ひ果  
した擧句のことだとかいふ話でしたがね。どやどやと人だかりがする。ちやうどパーヴェル・パーヴロ  
ヴィチが留守だつたものですから、あの子は鬼のゐない間といふ譯でその邊を駆けすり廻つてゐたん  
ですね。私が見てゐると、あの子はその部屋の廊下で、ぎつしりの人垣のあひだから、その有様を覗  
いてるぢやありませんか。さも不思議だといつた顔附きで首つり人を眺めてゐるんですよ。私はびつ  
くりして、大急ぎでこつちへ引つ張つて來たんですがね、まあどうでせう、あなた——あの子はどう  
身體ぢゆうぶるぶる顫へが來て、まるで土色になつてゐるんですよ。おまけにやつとここまで連れて來  
たと思ふと、そのままばつたり倒れちまつたんです。それからまあそのものがき廻ることと云つたら、  
あなた。でもそのうちに、やつとのことと氣がついて呉れましたんですよ。きつと驚風か何かにとつ  
つかれたんでせう、その時からどつと寝ついてしまつたんですの。やがてあの人が話を聞いて歸つて  
來る——それからが大變、もう無暗矢鱈に振り廻すんです。あの人はめつたに手を上げることはない  
代りに、もうひどく抓るのが癖でしてねえ。暫くすると今度は一杯ひつかけて歸つて來てからに、傍



へ寄るなり威かし文句を並べたもんなんですよ、『俺も首を縊るぞ、お前が悪いばかりに首を縊つちまふぞ。それこの紐で、あの窓掛のところで首を縊つちまふぞ』つて、さう言ひましてね、あの子の眼の前でわざわざ輪を結んで見せるんですよ。あの子は可愛さうにもう人心地も何もなくなつて——小ぢやな手であの人の袖にしがみついてね、喚き立てる始末なんですよ、『もうしないわ、もうきつとしないわ』つてね。みじめで、とても見ちゃられませんでしたわ!』

ヴェリチャー・ニコフは何か異様な話を聞かされることと覺悟はしてゐたものの、この話にはすつかりもう度膽を抜かれてしまつて、暫くは本當にすることも出来なかつた。マリヤ・スイソエヴァはなほも言葉をついで、次々に色んな話をして聴かせた。例へばある時のごときは、幸ひ傍にマリヤ・スイソエヴァがゐたからよかつたものの、さもない日にはリーザはきつと窓から飛び降り自殺を圖つたに違ひない、とも言つた。

彼はまるで自分までが酔つ拂つたやうな氣持になつて、その宿屋の門を出た。『よし、あいつめステッキで殴り殺してやるぞ、犬つころみたいに腦天をがぁんと!』そんな文句が頭にちらつくだつた。そして彼は長いことその文句を繰返し繰返し呟いてゐた。

彼は辻馬車を傭つて、ポゴレーリツェフの家をめざした。そろそろ郊外へかからうといふ頃、溝河にかかつた小橋の袂の四辻で、馬車は停車を餘儀なくされてしまつた。その狭い橋を、長い葬式の行

列が、やつとすり抜けるやうにして渡つてゐるところであつた。橋の向ふ側にもこちら側にも、幾臺かの馬車が犇めき合つて、葬列の渡り終へるのを待つてゐた。歩行者もやはり堰かれてゐた。なかなか立派な葬式で、お棺に従つた馬車の列は颯々と打ち連なつてゐた。ところが驚いたことには、それらの馬車の一つの窓から、パーヴェル・パーヴロヴィチの顔がいきなりヴェリチャー・ニコフの眼に飛びついて來たのである。もしこのときパーヴェル・パーヴロヴィチが、馬車の窓から身を乗り出して、にやりと頷いて見せなかつたなら、彼は自分の眼を信じなかつたに相違なかつた。打ち見たところ、彼はヴェリチャー・ニコフが眼に留まつたことをひどく喜こんでゐるらしく、馬車の中からお出でお出でをしはじめた程であつた。ヴェリチャー・ニコフは馬車を飛び降りると、人垣を無理矢理に掻き分け、警官の制止を振り切つて、パーヴェル・パーヴロヴィチの馬車がそのときはもう橋にかかつてゐたにも拘はらず、その窓のところへ走せ寄つた。中にはパーヴェル・パーヴロヴィチが一人ゐるだけだつた。

「こりやどうしたことです!」とヴェリチャー・ニコフは呶鳴りつけた、「何故あなたは來なかつたんです? 何だつてこんな中にゐるんです?」

「義理を果たしてるところですよ。——まあお静かに、さうがなり立てないで——義理を果たしてるところなんですから」とパーヴェル・パーヴロヴィチは面白さうに眼を細めて見せながら、くすくす



笑ひだした、「莫逆の友ステパン・ミハイロヴィチの哀れ無常なる亡骸を、かうして送つて行くところですよ。」

「ばかばかしい！ ええ、この飲んだくれのへべれけ先生！」ヴェリチャーニノフは一瞬われにもあらずたじろいだだが、すぐまた前より一層の大声で囁鳴り立てた、「さあ降りるんです、そして私の車に乗りなさい、さあ直ぐ！」

「そりや出来ませんな。何しろ義理を……」

「引きずり出しますぜ！」とヴェリチャーニノフは咆え立てた。

「そんなことをしたら悲鳴をあげますよ！ 悲鳴をね！」とパーヴェル・パーヴロヴィチは、相變らず面白さうにくすくす笑ひながら應酬した。まるで遊戲でもしてゐるやうな調子だつたが、そのくせ坐席の向ふの隅へ身をにじり退つた。

「さあ危い、危い、轢き殺されたらどうする！」と警官が叫んだ。さう言はれて氣がついてみると、ちようどこの馬車が橋を渡り切つたところだつたが、そのとき誰か他所の人の馬車が行列を無理やりに突つ切つたため、大騒ぎが持ち上がつてゐたのである。ヴェリチャーニノフがやむを得ず飛びすすると、忽ちのうちに色んな馬車や群衆が割り込んで來て、彼はぐんぐんと押し距てられてしまつた。彼はべつと唾を吐くと、そのまま自分の馬車へ引き返した。

『まあいいさ、どうせあんな男を連れて行くわけには行かんからな！』と、驚愕のあまり胸騒ぎのまだ収まらぬ状態で、彼はさう考へた。

やがて彼がクライヴヂャ・ペトロヴナに會つて、マリヤ・スイソエヴナから聞いた話や、今しがたの葬列の中の奇怪な邂逅のことを傳へると、夫人はすつかり物思ひに沈んでしまつた。「私、あなたのことが心配ですわ」と彼女は言つた、「あなたはその方との關係を一切お絶ちにならないといけませんわ。それもなるべく早い方がよござんすわ。」

「なあに、飲んだくれの大たわけですよ、それだけの話ですよ！」とヴェリチャーニノフは、むつとじてやり返した、「そんなことをしたら、私があいつを怖がつてることになりまさあね！ それにリーザといふものがあるのに、どうして彼奴と關係を絶つなんてことが出来ませう。少しはリーザのことも考へて下さいよ！」

一方リーザはといふと病氣で寝てゐたのである。昨日の晩方から熱が出たので、今朝は夜が明けるのも待ち兼ねるやうにして都へ急ぎの使を出して、或る有名な醫者を迎へにやつた。その醫者の到着を待つてゐるところなのであつた。又もや降つて湧いたこの出來事に、ヴェリチャーニノフはもうすつかり滅茶苦茶になつてしまつた。クライヴヂャ・ペトロヴナは彼を病床へ案内した。

「わたしは昨日、じつとあの子を見てゐましたんですけどね」と彼女はリーザの部屋の前で立ちど



まつて、相手に注意するやうな口調で言ひ出した、「傲慢な氣むづかしい子ですことね。あの子は私どものところにゐるのが恥かしいんですのよ。それにまた父親に悪いと棄てられたことがね。それが今度の病氣のもとだと私は思ひますわ。」

「棄てた？ 何だつてあなたは、棄てたなんてお考へになるんです？」

「だつてさうぢやありませんの、あの子をかうして見も知らぬ家へ、それもあなたのやうな……やつぱり見も知らぬ人同然の方、といふより今のやうな關係にある方と一緒に、平氣で手離してよこすんですもの……。」

「だがあの子を連れ出したのはこの私なんですよ、私が力づくで連れ出して來たんですよ、私には別に不都合があらうとも……。」

「まあまあ、あなたはまだそんなことを！ そこに不都合があることくらゐ、年端もゆかぬあのリーザだつて、ちゃんと見抜いてゐますことよ！ 私の考へでは、あの人ではんでここへ寄りつきもしまいと思ひますわ。」

ヴェリチャー・ニノフが一人で來たのを見ても、リーザは別に驚きもしなかつた。彼女は、つと悲しげな微笑を洩らすと、そのまま熱に火照つた自分の頭を壁の方へ向けてしまつた。ヴェリチャー・ニノフのおづおづした慰めの言葉にも、明日はきつとお父さんを連れて來るからといふ熱心こめた約束に

も、彼女は一言も返事をしなかつた。病室を出ながら、彼は突然聲をあげて泣き出した。

醫者は夕方になつてやつと到着した。患者の診察が済むと、彼は最初のひと言でまづ一同の度膽を抜いてしまつた。こんなに手遅れにならんうちになぜ早く呼んで下さなかつたか、と咎めるやうに言ひ放つたのである。それに答へて、つい昨夜發病したばかりだと説明してやつても、彼ははじめのうちは本當にしなかつた。

「まあ今夜の模様次第と見る他はありませんな——とどのつまり彼はさう斷定して、醫者としての注意を與へ終ると、明日はなるべく早く伺ひますと言ひ残して歸つて行つた。ヴェリチャー・ニノフは何としても今夜はここに泊りたかつた。ところが、さつきあんなことを言つたクラーヴヂヤ・ペトロ・ヴナが、今度は自分の方から、『あの人非人を引つ張つて來る試み』をもう一度やつて御覽なさいと言ひだして、どうしても聽かなかつた。

「もう一度ですと？」と、のぼせあがつてゐるヴェリチャー・ニノフは鸚鵡がへしに訊きかへした、「よし來た、今度こそはふん縛つて、この手で引つ擔いで來てお目にかけますよ！」

パーヴェル・パーヴロヴィチをふん縛つてわが手で引つ擔いで來るといふ想念は、忽ちのうちに彼を、ゐても立つてもをられぬほど烈しく捉へてしまつた。

「今ぢやもう、あの男に對して濟まんなんて氣持はこれつばかりもしませんよ、これつばかりもね」



と彼は、クラウヂヤ・ペトロヴィナに別かれの挨拶をしながら言ふのだつた、「きのう私がここでした、あの卑屈なめそめとした言葉は、みんなもう打消しです！」と彼はぶりぶりしながら附け加へた。リーザは眼をどちて臥せつてゐた。どうやら眠つてゐるらしく、持ち直して來たやうに見受けられた。歸る前にせめて着物の端にでも接吻しようと思つて、ヴェリチャーニノフがそつと彼女の頭の方へ身をかがめたとき、——彼女はまるで待ち受けてゐたやうに不意にぱつちり眼をみひらいて、かう囁くやうに言つた。

「あたしを連れてつて。」

それは物靜かな、悲しげな願ひで、昨日の興奮などは跡方も見えなかつたが、また同時に、とてもこの願ひが聴き届けては貰へないことを自分でも深く信じてゐるやうな、一種あきらめの響きが籠もつてゐた。そしてヴェリチャーニノフが絶體絶命の氣持で、それはとても出來ない相談だといふことを説きにかかるが早いか、彼女は黙つて眼をどちてしまひ、まるで彼には耳も目も借さないといった風に、それつきり一言も口を利かなかつた。

馬車が町へはいると、彼は眞直ぐにポクロフスキ・ホテルへ乗りつけろと命じた。もう夜の十時だつたが、パーヴェル・パーヴロヴィチは宿にゐなかつた。ヴェリチャーニノフは、病的にじりじりして來る心を無理に抑へて、廊下を行きつ戻りつしながら半時間はたつぷり待つた。マリヤ・スイ

ソエヴナは見るに見兼ねて、パーヴェル・パーヴロヴィチは夜の明けるまではとても歸つて來まいと斷言する始末だつた。『ぢや俺も夜明けに出直して來るとしよう』とヴェリチャーニノフは決心してしぶしぶわが家へ歸つた。

ところが、まだ自分の部屋にはいらぬ先にマーヴラの口から、昨夜のお客が十時前からお歸りを待つていらつしやいますよと聞かされたときの、彼の愕きはどうかだらう。

『私どものところでお茶を召し上がつて、——それからまたお酒を買ひにおやりになつて、そのお代に青札を一枚下さいましたよ。』

## 九 幽 靈

パーヴェル・パーヴロヴィチはさも居心地よげにお神輿を据ゑてゐた。昨夜と同じ椅子に腰をおろして、くはへ煙草と洒落れながら、酒壺を傾けて、四杯目の最後のグラスを満たしてゐるところだつた。土瓶と飲みさしのコップが、卓上のすぐ手近かのところに置いてある。眞赤に色あげのできた顔は、柔和さうにてらてらしてゐた。おまけに夏場らしく上着をぬいで、チョッキ一つになつてゐた。



「いやあこれは、つい御交誼に甘えましてな！」と彼はヴェリチャーニノフの姿を見ると、上着をひっかけようと急いで席を立ちながら、大聲をあげた、「東の間の歡樂を一入ならしめんとて、かくは上着をとり……」

ヴェリチャーニノフは物凄い劍幕でつめ寄つて來た。

「あなたはまだ正氣が残つてゐますかね？ まだ話が通じますかね？」

パーヴェル・パーヴロヴィチは些かどきまぎした。

「いやその、まだそれほどでも……。亡友を偲んで一杯やりましたがね、しかし——まだそれほどでも……。」

「私の言ふことが分かりますかね？」

「それを伺ひにかくは參上……。」

「よろしい、ぢやあのつけからびしびしやりますがね、先づ第一にあんたは——碌でなしだ！」とヴェリチャーニノフは吐き出すやうな聲で呶鳴りつけた。

「のつけからそれぢやあ、お終ひにはどうなりますかね？」とパーヴェル・パーヴロヴィチはひどく恐れをなしたらしく、情ない聲で異議の申立てにかかつたが、ヴェリチャーニノフは耳もかさずに呶鳴り立てた。――

「あんたの娘さんは死にかけてるんですよ、病氣なんですよ。あんたはあの子を棄てたんですが、棄てたんぢやないんですか？」

「死にかけてるつて、そりやまた本當ですか？」

「病氣も病氣、極めて重態なんです！」

「いや多分、例のちよつとした發作で……」

「馬鹿なことを！ あの子はき・は・め・て・重態なんです！ それでなくてもあなたは當然顔を出すべき……。」

「お禮を申し上げにね、御款待にあづかつた御禮を言上にね！ もとより百も承知でさ！ アレクセイ・イヴァーノヴィチ、まあ聽いて下さいよ」と言ひさま、彼はいきなり兩手でもつて相手の手首をしつかと捉へ、涙を醉漢特有の感動にあやふくこぼさんばかりの態で、まるで謝罪でもするやうな調子で叫び立てた、「アレクセイ・イヴァーノヴィチ、まあお靜かに、お靜かに！ よしんばこの私がですな、くたばつたにしたところで、たつた今ぐでんぐでんのままネヴァ河へはまり込んだにしたところで、――目下の局面から見て別に大したこともないぢやありませんか？ それにまた、ボゴレーリツェフさんのところなら、行かうと思へば何時だつて行けるんですし……。」

ヴェリチャーニノフははつと氣づいて、腹の蟲をすこし抑へつけた。



「あなたは酔つておいでですよ。だから私には、あなたがそんなことを仰しやる意味が呑みこめな  
いのです」と彼は嚴かな口調で言ひ出した。「あなたとつくり話し合ふためなら、私はいつ何時でも  
時間を割く用意がありますよ。それも成るべく早くとさへ思つてゐるんです。……だから現に今もあな  
たのお宿へ……。いや、それはさうと今日は駄目ですよ。そんなことより先づ、私はもう斷乎たる手  
段を執ることに定めたんです。つまり、あなたは今晚ここに泊るんですよ！ 明日の朝になつたら、  
私はあなたを連れてあの家へ行きます。斷じて放さんですよ……」と又もや彼は喚き立てはじめた、  
「あなたを縛り上げて、両手で抱へて持つて行くんだ！……ところで、その安樂椅子で寝られます  
か？」——と息を切らしながら彼は、自分が寝ることにしてゐる安樂椅子の丁度反對の壁際にある、  
幅のひろいふかふかした安樂椅子を指した。

「寝られる段ぢやありませんよ、私はもうどこでも……」

「どこでもぢやありません、その安樂椅子になさい！ さあ受取つて下さいよ、そうら敷布、それ  
から夜着、枕と（といつた物をヴェリチャーニノフは戸棚から引きずり出して、おとなしく手を差し  
出してゐるパーヴェル・パーヴロヴィチめがけて、大急ぎでぼんぼん抛り出した）——すぐ床を取る  
んです、床・を・取・るんですよ！」

寢道具を抱へさせられたパーヴェル・パーヴロヴィチは、醉眼朦朧とした顔に醉漢特有のだから

した微笑を浮かべて、さも決心しかねたといつた様子で部屋の真中につつ立つてゐた。が、ヴェリチ  
ャーニノフの二度目の大喝に逢ふと、急にそくさと全速力で仕度にとりかかり、卓子を横へ片寄せ、  
ふうふう云ひながら敷布をひろげて敷きはじめた。ヴェリチャーニノフは傍へ寄つて來て手傳つてや  
つた。客のびつくり仰天した有様とその從順な様子に、彼は幾分溜飲を下げたのである。

「その杯を乾して、横におなりなさい」と彼はまた命令を下した。命令せずにはゐられない氣持だ  
つたのだ。「一體その酒はあなたが買ひにやつたんですかね？」

「ええ、私が買ひに……。私はその、アレクセイ・イヴァーノヴィチ、とてももうあなたが買ひにや  
つては下さるまいと思つたもんでね。」

「それを御存じなのは結構。だが序でのごことに、その先まで心得て置いて頂きたいもんですね。も  
う一度繰返して申し上げますがね、私はもう斷乎たる手段をとることに定めたんですよ。つまり  
ですな、あんな道化芝居の眞似なんかすると、今度こそは承知しませんよ。昨夜みたいな酔つたまぎ  
れの接吻なんか、もう我慢はしませんよ！」

「そのことなら、アレクセイ・イヴァーノヴィチ、私だつて心得てますよ。あんなことは只の一度  
しか許されないことだ位はね」とパーヴェル・パーヴロヴィチは、にやりと笑つた。

この返事を耳にすると、部屋の中を大股に歩きまはつてゐたヴェリチャーニノフは、莊重といつて



もいい程の眞面目くさつた顔附で、急にパーヴェル・パーヴロヴィチの前に歩をとめた。

「パーヴェル・パーヴロヴィチ、ごまかさずに本音をお吐きなさい！ あなたは利口な方だ、これは繰返し認めることを躊躇しません。だが、はつきり申し上げますがね、あなたは道を踏み違へてをられるんだ！ 思つたことを眞直ぐに口になさい、思つたことを眞直ぐに行動にお移しなさい。さうなつたら私も、お望みのことは何なりとお答へしますよ——これは確<sup>しか</sup>とお約束します！」

パーヴェル・パーヴロヴィチは例のだらしない微笑でにやりと笑つた。それを見ただけでヴェリチヤ・ニコフは赫となつてしまつた。

「やめなさい！」と彼はまた呶鳴りだした、「胡麻化さうたつて駄目ですよ、あんたの腹の底は見透しなんだ！ もう一度いひますがね、私は何なりとよろこんでお返事をするつて、ちゃんと約束したんですよ。つまりお返事の出来ることならどんなことでも申し上げて、御満足の行くやうにする心算なんです。いや、それどころか、お返事の出来兼ねることだつて、申し上げる決心なんですよ！ ああ、この私の氣持が分かつて下すつたらなあ……」

「あなたにそれまで御親切があたりだとすれば」とパーヴェル・パーヴロヴィチは用心しい彼の傍へにじり寄つて來た、「差し當たつて伺ひたいのはこれですよ。昨夜あなたは『肉食型』とやらいふことを仰しやいましたな、私はあれに頗る興味を覺え……」

ヴェリチヤ・ニコフはペツと唾を吐いて、前よりも早足に、ふたたび部屋の中を歩きはじめた。

「駄目ですよ、アレクセイ・イヴァーノヴィチ、さう素氣なくしないで下さいよ。實はあれに頗る興味を覺えましてね、それでわざわざ御高説を拜聴に伺つたやうな譯なんです……どうも私は口不調法でいけません、まあお許しを願ひますよ。實はね、その『肉食型』といふ奴と、も一つ『草食型』といふ奴のことは、私も雑誌の評論欄で讀んだことがありましてね——それを今朝ひよいと思ひ出した譯なんです……ただちよいと忘れてゐたんで。いや正直に言ふと、讀んだときは分からなかつたんですな。そこで私が一つはつきりさせて置きたいのは、あの亡くなつたステパン・ミハイロヴィチ・バガウトフですな、——あの男は一たい『肉食型』だつたんでせうか、それとも『草食型』の方でせうか？ どつちの部類へ入れたもんでせうな？」

ヴェリチヤ・ニコフは相變らず黙りこくつて、大股に歩き續けてゐた。

「その肉食型といふのはですね」と彼は憤然としていきなり立ちどまつた、「昨夜のあなたが私と一杯やられたときのやうな、再會の歡びを表するために假りにバガウトフと『シャンパンの杯を擧げる』ことになると、相手の杯に一思ひに毒を盛つちまふやうな手合ひのことを言ふんですよ。さうした手合ひは、あんたが先刻なすつたやうな、相手のお棺を墓地まで見送るなんて手緩い眞似はしないもんですよ。ええ思つても胸くそが惡くなる——一體あなたは、どんな汚らはしい、とても明るみには出



せないやうな、秘密な下心があつて、葬式へなんぞ出かける氣になつたんです！ そんな道化芝居は、ただもうあんた自身の面汚しになるだけなんだ！ あんた自身のね！」

「そりや全く仰しやるとほりで、葬式へなんぞ行く手はなかつたんですよ」とパーヴェル・パーヴロヴィチは合槌をうつた、「だがあなたはまた、何だつてさう私のことを……。」

「また、さういふ手合ひはですね」とヴェリチャーニフは相手に構はず、かんかんになつて喚き立てた、「愚にもつかんことを考へ出して獨りでよくよしたり、善惡正邪の總ざらひをやらかしたり、自分の受けた恥辱をまるで學科を暗誦するみたいに何時までもうごち考へたり、やきもきしたり、道化てみたり澄ましてみたり、他人の頸つ玉へしがみついたり、——あつたら自分の大事な時間をそんなことで潰してしまふやうな、そんな人間ぢやありませんよ！ ときに、あなたが首を縊らうとしたつて話は、あれは本當ですか？ え、本當ですか？」

「酔つたまぎれに或ひは口走つたかも知れませんがね——覺えがありませんな。だがね、アレクセイ・イヴァーノヴィチ、どうもその毒を盛るといふやつは、われわれには少々うつりが悪いですなあ。かう見えても歷乎とした官吏だなんてことは二の次にしても、——何しろ私には資産もあるんですし、且つはまた再婚したいとも思つてゐるものでしてね。」

「それに、そんな事をすりや赤いおべも着なきやならんし。」

「さうさう、その通りでさ。今どき裁判所でも色々と情狀酌量の餘地を考へて呉れるとはいへ、やっぱりどうも不愉快なことは違ひないですからなあ。それはさうと、アレクセイ・イヴァーノヴィチ、飛び切り滑稽な逸話を一つお聞かせしませうか。先刻あの馬車の中でふいと思ひ出しましてね、あなたに聞いて頂かうと思つてたんですよ。ところが今あなたが『他人の頸つ玉へしがみつく』つて仰しやつたもので、圖らずもまた思ひ出した次第ですがね。あのセミョーン・ペトロヴィチ・リフツォフ、多分覚えておいでせうな、あなたがTにいらした時分よく私共へやつて來た男ですよ。さてこの男の弟でね、これもやはりちやきちやきのペテルブルグで兒でしたがV縣の知事の下に勤めてゐたのがあつたんです。これも矢張り色んな點で鳴らしてゐた男でしたがね。ある日のことです、さる集りの席上、満座の婦人はいはすもがな自分が思ひを寄せてゐる當の婦人の面前で、この男がゴルベニコといふ大佐とちよつとした口論をやらかしたんです。そして相手からひどい侮辱を受けたと思つたが、ちつとそれを腹におさめて、表にあらはさなかつたんですな。と、さうかうするうちに、そのゴルベニコが、例の彼の意中の婦人を横取りしましてね、たうとう求婚するといふ始末になつたものです。さあそこで、どうなつたとお考へですな？ 件んのリフツォフはですな、誠心を披歴してベルベニコと親交をむすんだんですよ、すつかり仲直りをしてしまつたんです。そののみか、——結婚式には自分から無理やり新郎の介添人を買つて出ましてね、婚禮の冠を捧げ持つ役を引き受けたものです。さて、



新郎新婦がその冠の下をくぐつて式場へ來着しますとね、奴は祝辭と接吻をやりてゴルベンコの傍へ寄りましてね、それがどうかと云ふと縣知事をはじめお歴々の居並ぶ前ですな、自分もちやんと燕尾服を着込んで髪を捲き縮らせた姿ですな——矢庭にぐさりとばかり新郎のどてつ腹へ小刀を突き立てた——ゴルベンコはひと堪りもなくどうと倒れるつて騒ぎなんですよ！それが、わざわざ新郎の介添役を買つて出た上での話なんだから、いや何ともはや破廉恥きはまることですよ！ところがまだそれだけぢやないんです！ここが大事なところですがね、ぐさりとやつてしまふと、今度はいきなりそこらぢう駈けずり廻つてね、『ああ、飛んだことをしちまつた！ああ俺は大變なことをしちまつた！』つてね、おいおい泣きだして齒の根も合はん始末なんです。おまけに誰かれの見境もなく、婦人達の頸つ玉へまでしがみついてね、『ああ、大變だ！ああ、飛んだことをしちまつた！』——へ、へへ！まつたく笑つちまひましたね。ここに哀れをとどめたのはゴルベンコですが、これは間もなく元の身體になりましたよ。』

「何だつてそんな話をなさるのか、私には合點が行きませんな」とヴェリチャーニノフは嶮しく眉をひそめた。

「いやつまり、その小刀でぐさりとやつた所をお聴かせしたいと思ひましてね」とパーヴェル・パロヴィチはくすくす笑ひ出した、「何しろ恐怖のあまり禮儀も何も忘れちまつて、知事閣下の御面

前で婦人の頸つ玉へしがみつくやうな男ですから、これはもう仰しやるやうな型ぢやなく、洩つ垂れの大供に過ぎませんさ。——だがね、とにかくぐさりとやつてのけた、一念を通したのですな！申し上げたかつたのはそこだけですよ。』

「ええ、さつさと出て失せろ！」と、何物かが胸の中の堰を切りでもしたやうに、まるで別人のやうな上ずつた聲で、ヴェリチャーニノフは急に喚き出した、「ええ出て失せろ、その人の腹を探るやうな小汚ない話と一緒に、とつと出て失せろ。第一あんたからして、縁の下の鼠みたいな小汚ない根性なんだ——この私を嚇かさうと企らんだな——子供ばかりいびりやがつて——この下種男め——卑劣漢、卑劣漢、この卑劣漢！」彼は吾を忘れて、一言ごとにはあはあ息を切らしながら、喚き立てた。パーヴェル・パロヴィチは俄かに引攣つたやうな顔になつた。一時に酔ひもさめて、唇はわなわなと顫へだした。

「それはこの私のことですか、アレクセイ・イヴァーノヴィチ、あなたが卑劣漢とお呼びになるのは、あなたがこの私をさうお呼びになるんですか？」

その間にヴェリチャーニノフは早くも吾に返つてゐた。

「いやこれは、いつでもお詫びしますよ」と彼はちよつと間を置いて、暗い沈思のうちに答へた、「だがそれは、あなたの方が今この瞬間から、思つたことを眞直ぐに言動に移すと約束される場合に限り



ますね。」

「私ならさういふ場合、無條件で謝罪しますがねえ、アレクセイ・イヴァーノヴィチ。」

「宜しい、ぢやさうしませう」と言つて、ヴェリチャーニノフは再びちよつと沈黙した、——「どうも済みませんでした。ところでこれはお断りして置きますがね、パーヴェル・パーヴロヴィチ、かうなつた以上私は、今後はもう一切あなたに對して債務があるとは認めませんよ。それも、單に今しがたの問題についてばかりぢやなく、一切の事柄について言ふのです。」

「いいですとも。何です、ね、認めるとか認めないとかいつて？」パーヴェル・パーヴロヴィチはにやりと笑つたが、しかし眼は足もとに落してゐた。

「あなたがさう仰しやつて下さるなら、なほさら結構です、一層結構ですよ！ さあそのコップを空けてお寝みなさい、とにかく今夜はお歸しはしないんだから……。」

「いやお酒はもう、……。」とパーヴェル・パーヴロヴィチは稍々たじろぎの色を見せたが、それでも矢張り卓子へ歩み寄つて、先刻から注ぎつ放しになつてゐた最後の一杯を乾しにかかつた。もうその前にさんざ引つけてゐたらしく、杯をもつ手はしきりと顫へて、酒を床あかやルバーシカやチョッキの上へだらしなく零すのだつたが、とにかく最後の一滴まで乾すには乾した。——まるで飲みさしのままでは置けないとも思つてゐる風だつた。そして空つぽの杯を恭しく卓子の上に置くと、おとなし

く自分の寢床の前へ行つて着物を脱ぎはじめた。

「だがやつぱり……泊らない方がよくはないでせうかね？」と彼は、何と思つたか急にそんなことを言ひだした。もう片つ方の靴は脱いで、それを両手に抱へてゐる。

「いや、斷じてよかありません！」まだ根氣よく歩き廻つてゐたヴェリチャーニノフは、彼の方を見やらずに吐き出すやうに答へた。

相手は着物をぬいで横になつた。それから十五分もするとヴェリチャーニノフも寢床にはいつて、枕もとの臘燭を吹き消した。

彼はうとうとと不安な眠りに入りかけた。何かしら新たな事が、不意にどこからとも知れず湧いて出て、問題を益々こんぐらかしてしまつた——それがいま彼の胸を騒がせてゐるのであつた。しかも同時に、どうした譯だか、この自分の不安な氣持が妙に氣恥かしいのであつた。そのうちにやつと深い眠りが訪れたかと思ふと、不意に何やら衣すれのやうな音がして、彼の眼をさましてしまつた。彼は突嗟にパーヴェル・パーヴロヴィチの寢床の方を振り向いてみた。部屋の中は眞暗だつた（厚地の窓掛がすつかりおろしてあつたのである）が、彼の眼には、パーヴェル・パーヴロヴィチが横になつてはゐずに、半身を起こして、寢床の端に腰かけてゐるやうに思はれた。

「どうしたんです！」とヴェリチャーニノフは呼びかけた。



「なんだか影のやうなものが」と暫くたつてから、ほとんど聞きとれぬほどの聲で、パーヴェル・パーヴロヴィチが言つた。

「なんですと、どんな影です？」

「あすこに、向ふの部屋の、扉口のところに……何だか幽霊みたいなものが見えたんです。」

「幽霊つて、誰のです？」と暫く間を置いて、ヴェリチャーニノフは訊ねた。

「亡くなつた家内のです。」

ヴェリチャーニノフは寢床をすべり出て足を絨毯へおろすと、控室ごしに、いつも扉をあけ放しにしてある向ふの部屋をさし覗いた。その部屋には窓掛がなく、薄い捲上カーテンだけだったので、こちらに比べるとずつと明るかつた。

「向ふの部屋には何にも見えはしませんよ。あなたは酔つてゐるんです、お寝みなさい！」ヴェリチャーニノフはさう言ひ棄てて、横になると毛布にくるまつてしまつた。パーヴェル・パーヴロヴィチは一言も口を利かずに、やはり横になつた。

「これまで一度も幽霊を見たことはなかつたんですか？」と、ものの十分もたつてから、ヴェリチャーニノフは思ひ出したやうに訊いた。

「一度何だか見たことがあるやうな気がしますよ」と微かな聲で、やはり間を置いてから、パーヴェ

ル・パーヴロヴィチは答へて來た。

それから再び沈黙がやつて來た。

ヴェリチャーニノフは自分が眠つてゐるのかゐないのか、はつきりとは斷定できないやうな状態であつたが、そのまま小一時間もたつたと思はれる頃、またしても彼はくると半身をねぢ向けた。何か衣ずれのやうな音でもして再び彼の夢を破つたのか——そのところは自分でも分からなかつたが、とにかく漆のやうな部屋の闇のなかに、何やら白いものが、彼のうへにのしかかるやうにして立つてゐるやうな氣がした。もつともその氣配は、まだ彼の身近かに迫つてゐるわけでもないが、もう部屋の中央には達してゐた。彼は寢床の端に起き直つて、たつぷり一分間じつと眼を凝らしてゐた。

「あなたですか、パーヴェル・パーヴロヴィチ？」と彼は力の無い聲を出した。とつぜん靜寂を破つて深い闇のなかに響いたこの聲は、吾ながら何か異様なものに思はれた。

返事はなかつた。しかし誰かがそこに佇んでゐるといふことは、もはや一點の疑ふ餘地もなかつた。「あなたなんですか……パーヴェル・パーヴロヴィチ？」と彼は前よりも大聲で同じ問ひを繰り返した、假りにパーヴェル・パーヴロヴィチが自分の寢床ですやすや眠つてゐたとしても、必らず目をさまして返事をするに違ひないほどの大聲だつた。

だが返事はやつぱりなかつた。その代り彼には、その白つぽい、辛うじて見分けがつくほどの人影



が、一層自分の方へ近づいて来たやうに思はれた。それから、或る奇怪なことが起こつた。ちようど最前と同じやうに、不意に彼の身裡で何物かが堰を切つたのである。そして彼は、満身の力をふりしぼつて、殆んど一言ごとにはあはあ息を切らしながら、途方もない狂氣じみた聲で喚き立てはじめた。

「ええ、この酔ひどれの大たわけめ——この俺がそんな嚇しに——乗るだらうなんて——よくものめめと——思ひつきやがつたな——そんなら俺は壁の方へ向いちまつてな、頭からすつぽり毛布を引つかぶつて、一晩ぢう振り向いてもやらんからさう思へ——さうすりや、そんな嚇しなんぞこの俺には屁でもないことが、貴様にだつて納得が行くだらうて——馬鹿面さげて……夜明けまでさうして突つ立つてたつて同じことだぞ……ちえつ、唾でも喰へ!……」

さう言ひざま、彼はパーヴェル・パーヴロヴィチだと思はれる姿が立つてゐる方をめがけて、怖ろしい劍幕でべつと唾を吐きかけ、くると壁の方へ寢返りを打つと、約束どほり毛布を頭から引つかぶつて、そのままびくりともせず鳴りをひそめてしまつた。死のやうな静寂が襲つた。その人影がまだ近寄つて来るのか、それとも同じ場所に突つ立つてゐるのか、彼は知るよしもなかつたが、胸の動悸は刻一刻と今にもはち切れさうに高まるばかりだつた。……そのままの状態で、少くとも五分間はたつぷり經つた。と突然、彼からつい二歩ほどのところで、弱々しい、ひどく哀れつぽいパーヴェル・

パーヴロヴィチの聲が響いた。——

「私はね、アレクセイ・イヴァーノヴィチ、さがし物があつて起きたんですがね……(そして彼は必要缺くべからざる或る家庭用品の名を言つた) (譯者註。尿)——自分のところを探したけどないもんですから……そつとあなたの寢床の邊りをさぐつて見たいと思ひましてね。」

「ぢやなぜ黙つてたんです……あんなに私が呟鳴つたのに!」とヴェリチャーニコフは三十秒ほどぢつと相手の氣配を窺つてゐたが、やがてとぎれとぎれの聲で訊いた。

「びつくりしちまつたんですよ。あなたの呟鳴りやうが物凄かつたんで……度膽を抜かれちまつたんですよ。」

「その左手の隅の、扉口の近くにある、小さな戸棚の中です、臘燭をつけて御覽なさい……」

「いや、明りなんかなくても……」と隅の方へ行きながら、パーヴェル・パーヴロヴィチは恐縮したやうな聲を出した、——「ねえ、ひとつ堪忍して下さいよ、アレクセイ・イヴァーノヴィチ、すつかりどうもお騒がせしてしまつて……何しろ一時に酔ひが出たもんですから……」

しかし相手はもう何も答へなかつた。彼は依然として顔を壁へ向けたままだつたが、たとつて夜どほしその姿勢で押し通して、ただの一度もこちらを振り向かなかつた。果して彼は、かうして先刻の約束を守つて輕蔑の情を示したいと思つたのであらうか?——實をいふと彼は無我夢中で、自分がど



うしてゐるかも知らなかったのである。神経の錯亂は次第に募つて、やがては殆んど意識の濁濁状態にまで進み、彼は長いあひだ寝つかれなかつた。

あくる朝彼が眼をさました時は、もうとつくに九時を廻つてゐた。まるで脇腹を小突かれてもしたやうに、矢庭にはね起きると、寢床の上に坐り直つた。——がパーヴェル・パーヴォヴィチの姿はもはや部屋の中にはなかつた！ もぬけの空の、敷つばなしの寢床が残つてゐるだけで、本人は夜が明けるか明けぬうちに姿を晦ましてしまつたのである。

『先づこんなことだらうと思つてたよ！』ヴェリチャーニノフは掌で自分の額をぽんと叩いた。

## 十 墓地で

醫者の心配は不幸にして適中して、リーザの容態は急に悪くなつた。——それは、その前夜ヴェリチャーニノフやクララ・ヴヂャ・ペトロ・ヴナが思ひも寄らなかつたほどの、悪化のしやうだつた。ヴェリチャーニノフがその朝駆けつけて來た時、病人はまだ意識はあつたけれど、全身はまるで火のやうに熱かつた。その状態で彼の顔をみたとき、彼女はにつこりと笑ひかけ、燃えるやうな小さな手を

差しのべて來たと、彼は後になつてしきりに言ひ張つたものである。果してそれが事實であつたか、それとも彼が氣安めのためわれ知らず思ひついたことに過ぎなかつたか——その點は彼も確かめてみる暇はなかつた。夜が更けるに及んで病人はすでに意識を失つて、その後はずつと昏睡状態をつづけた。別荘に引き取られて十日目に彼女は息をひきとつた。

それはヴェリチャーニノフにとつては、歎いても歎ききれぬ日々であつた。ポゴレリツェフ夫婦が彼の身を案じたほど、彼の歎きやうはひどかつた。その惱ましい日々の大部分を、彼はこの別荘で過ごした。いよいよリーザが危篤に陥つた最後の數日などは、彼は何時間もぶつ通しにそこらの隅つこに、無念無想の體で坐り込んでゐたものである。クララ・ヴヂャ・ペトロ・ヴナはさういふ彼の傍に寄つて來て、氣を紛らさうとするのだつたが、彼はろくろく返事をしないばかりか、時によると彼女と話をするのがいかにも苦痛らしかつた。『かうしたことが、これほどまでの心の激動を』彼に與へようなどとはクララ・ヴヂャ・ペトロ・ヴナにとつては寧ろ案外なほどだつた。さうした中でとにかく彼の氣を粉らしたのは子供達で、時によると彼等を相手に笑ひ興することさへあつた程である。が然し、ほとんど一時間おきには椅子を立つて、爪先だつてそつと病人の様子を覗きに行くのであつた。折り折りは病人が彼の顔の見わけがついてゐるやうな氣もした。彼女が恢復するなどといふ希望は、彼も皆の者と同様に爪の垢ほども抱いてはゐなかつたけれど、それでも矢張りリーザが臨終の身を横



たへてゐる部屋から離れようとはせず、大抵は次の間に坐り込んでゐた。

とはいへ、さういふ間にも彼は二度ばかり、急に思ひ立つたやうに非常な活動振りを示したこともあつた。いきなりお神輿をあげて、醫者を迎へにペテルブルグへ飛んで行つて、幾人かの名醫をすぐつて連れて来て、立會診斷をやつて貰ふのであつた。二回目の立會診斷は、患者が息をひきとる前の晩に行はれた。その三日ほど前にクラヴヂヤ・ペトロヴィナは、今度こそはどうしてもトルウソツキイさんを何處かで探し出してゐる必要があると、ヴェリチャーニノフに向かつてしつこく口説き立てた。『リーザにもしものことがあつた場合、あの人がゐないぢやお葬式も出せないぢやありませんか』と言ふのである。ヴェリチャーニノフは、ぢや手紙でさう言つてやりませうと言葉を濁した。すると今度はボゴレリツエフ氏が、そんならいつそ自分が警察の手を煩はして搜索してやらうと言ひ出す始末だつた。で到頭ヴェリチャーニノフは二行ほどの通知を走り書きして、ボクローフスキイ・ホテルへ持つて行つた。パーヴェル・パーヴロヴィチは例によつて不在だつたので、彼はその手紙をマリヤ・スイソエヴァに頼んで歸つた。

やがてリーザは、とある夏の夕べ、落日の光とともに息をひきとつた。そのときになつてやつと、ヴェリチャーニノフははつと現實に立ち返つた様子だつた。クラヴヂヤ・ペトロヴィナの娘の一人の祭日用にとつてあつた純白の晴着をきせて最期いまだの装ひをさせ、合掌した手には花を握らせて、亡骸

を廣間のテーブルの上に安置したとき、——彼は矢庭に眼をぎらぎら光らせながらクラヴヂヤ・ペトロヴィナの傍へ進んで行つて、今この足で『あの殺人野郎』を引張つて來ますと宣言した。明日まで待つて見てはといふ夫人の勧めには耳も假さずに、彼はすぐさま都まちへ出掛けて行つた。

彼にはパーヴェル・パーヴロヴィチのとぐろを巻いてゐる場所の目當てがついてゐたのである。彼が前後二度もペテルブルグへ出て來たのは、何も醫者を迎へに出て來ただけではなかつたのだ。あの惱ましい日ごろ、時として彼には、死にかかつてゐるリーザの枕頭へ父親を連れて來たら、きつとその聲を聞きつけて彼女は氣がつくだらうと、そんな考へが頭にのぼるのであつた。すると彼はもう矢も楯もたまらず夢中になつて、彼の居場所をつきとめにかかるのであつた。パーヴェル・パーヴロヴィチは相變らず例の宿に泊つてゐることにはなつてゐたものの、その宿へ行つて在否を訊ねるなどは、訊ねるだけでも野暮だつた。『もうこれで三日も、寢に歸つて來るところか、てんで寄りつきはしないですよ』といふのがマリヤ・スイソエヴァの返事であつた。『さうかと思ふと、ひよつこり酔つ拂つて歸つて來ちや、一時間もしないうちに、またひよろひよろ出掛けて行くんでございますよ。すつかりもう撚りが戻つちまつたんですわね。』

その一方ヴェリチャーニノフは、色んな話の間にふとボクローフスキイ・ホテルの給仕の口から、パーヴェル・パーヴロヴィチが以前よくヴォズネセンスキイ通りに巢喰ふいかがはしい女達のところ



へ出掛けたものだ、といふ話を聞き込んだ。ヴェリチャーニノフは早速その女達の巢窟をさがし當てた。そして彼女達にうんと鼻薬を利かせたり、おどつてやつたりして見ると、向ふでは苦もなくそのお客のことを思ひ出したのであつた。勿論それは主としてあの喪章のついた帽子のお蔭であるが、思ひ出すが早いか忽ちにして彼に對する罵詈雑言が、彼女たちの口を衝いて出はじめたのは、流石のヴェリチャーニノフも驚いた。つまりそれは近頃さつぱり颯の道なので、女達の怨みを買つてゐた譯である。なかでもカーチャといふ女などは、『あのパーヴェル・パーヴロヴィチなら何時でも探し出したげるわよ』と、簡単に引き受けて呉れた、『だつてあの人つたら、この頃はすつとマーシカ・プロスターヴァんとこに入り浸りなんだもの。それはさうと、あの人はとつても金使ひの荒い人だわねえ。でね、そのマーシカつていふのは、プロスターコヴァ(譯者註。なはだの意)なんて苗字は勿體なさ過ぎるのよ、プロフヴォーストヴァ(譯者註。なはだの意)で結構なんだわ。そりや酷い女なのよ、いま病院へはいつてるけどね。あんな女なんか、私にちよいとその氣がありさへすりや、今すぐにだつてシベリヤへ流し者にされちまふんだよ。たつた一言で片がついちまふんだよ。』——さうは言つたものの、その日はたうとうカーチャにも彼の行方は尋ね當たらず、その代り又の目を固く約束して呉れたのであつた。ヴェリチャーニノフが今あてにしてゐるのは、つまりこの女の助力なのである。

ペテルブルグに着いたのはもう十時だつたが、彼は早速その女に口をかけて、抱へ主に女の不在中

の玉代を拂ひ、さて一緒に連れ立つて搜索に出かけた。パーヴェル・パーヴロヴィチを見つけ出してさてその彼を一體どうしようといふのか、何か因縁をつけて叩き殺してやる氣なのか、それともただ娘の死を告げて、埋葬には是非とも立ち會つて貰はなければ困ると傳へるために、かうして捜し廻つてゐるのに過ぎないものか——そこところは自分でもまだ見當がついてゐなかつた。最初に當つて見た先では、まんまと失敗してしまつた。つまりマーシカ・プロフヴォーストヴァがつい一昨日パーヴェル・パーヴロヴィチと大喧嘩をおつ始めてしまひ、用心棒か何かに『パーヴェル・パーヴロヴィチがベンチで頭をぶち割られたんで』といふ顛末が判明したのである。手短かにいふと、長いことかかつて中々捜し出せなかつたのであるが、とどのつまり夜なかの二時になつてやつとヴェリチャーニノフは、どうもそれらしいと教へられて行つた或る樓うちから出てくるその出會ひ頭に、突然ばつたりと彼にぶつかつてしまつたのだつた。

べろんべろんのパーヴェル・パーヴロヴィチを、街の淑女が二人がかりでその樓へ案内して來るところだつたのである。淑女の一人は彼の腕を支へてゐたが、もう一人彼等のうしろからは、恐喝おど漢と思ほしい見るからに逞ましい大男がくつついて來て、あらん限りの聲を張り上げて何やら凄文句を並べ立てながら、しきりにパーヴェル・パーヴロヴィチを脅かしてゐた。その男が嘸鳴り立てたなかには、『さんざ人をこき使ひやがつて、よくも俺をこんな目に逢はせやがつたな』といふ文句もあつた。



何でも金のことだ、基でのいざこざらしかつた。街の淑女たちはひどく怯氣づいて、しきりに先を急いでゐた。ヴェリチャー・ニノフの姿を目にすると、パーヴェル・パーヴロヴィチはいきなり兩手を擴げて飛んで来て、今にも斬り殺されさうな聲で喚き立てた。

「ああ貴方か、助けてえ！」

腕つぶしの強さうなヴェリチャー・ニノフの姿を認めると、恐喝漢は忽ち掻き消すやうに逃げ失せてしまつた。勝ち誇つたパーヴェル・パーヴロヴィチは、その後姿に向かつて握り拳を振りかざし、何やら勝ちどきを揚げはじめた。それを見るとヴェリチャー・ニノフは、憤然として彼の肩をひつつかんで、吾ながら譯も理由も分からずに、相手の齒がちがち鳴りだすほどの猛烈な勢ひで、兩手でもつて揺すぶり始めた。パーヴェル・パーヴロヴィチは忽ち喚きやんで、いかにも酔漢らしいどろんとした驚きの色を浮かべながら、自分の拷問者を見守るのだつた。そのさき相手をどうしてやつたらいいのかわからなかつたのだらう、ヴェリチャー・ニノフはぐいと相手を握ち伏せると、歩道の小柱の上に腰を据ゑさせた。

「リーザが死んだんですぞ！」と彼は口早やに言つた。

それでもパーヴェル・パーヴロヴィチは依然として彼から眼を放さずに、街の淑女の一人にからだを支へられながら小柱の上に坐つてゐた。がそのうちに、言葉の意味がやつと呑み込めたと見え、み

るみるげつそりしたやうな顔附になつた。

「死んだ……」と彼は何か異様な聲で、囁くやうに言つた。その彼が、例の酔漢に特有の厭らしいだらだらした薄笑ひを洩らしたか、それとも何かの情感に驅られてひん曲つたやうな顔つきになつたか——その邊はヴェリチャー・ニノフには見別けがつかなくかつた。が、ほんの一瞬間するとパーヴェル・パーヴロヴィチは、ぶるぶると顫へてゐる右手をやつとのことと持ち上げて、十字を切らうとした。しかしその十字も切り終へないうちに、わななく腕はだらりと垂れてしまつた。それから暫くすると、彼はそろそろと小柱から立ちあがつて、傍の女にしがみついて、その女に凭れかかりながら、まるで自失したもののやうに——そしてヴェリチャー・ニノフが其の場にゐるのも忘れ果てたもののやうに、ふらふらと今來た道を先へと歩きはじめた。相手は、又してもその肩をひつつかんだ。

「おい分かんのか、この酔ひどれの碌でなしめ、貴様がゐないことにや葬式も出せんだぞ！」と彼は息を切らせながら喚き立てた。

相手はくると首を振り向けた。

「砲兵の……少尉補……あの男を覚えておいでかな？」と彼は呂律の廻らぬ舌でむにやむにや言つた。

「なに、何だと？」ヴェリチャー・ニノフは病的にぶるぶると身を顫はして、わめき返した。



「それがお前さんの捜してゐる親父さあね！ まあ見つかるがいいや……葬式を出すにな……」  
 「嘘つけ！」とヴェリチャー・ニノフは狂氣したやうに叫び立てた。「憎い一念から貴様はそんなことを……大方そんなことでも言ひ出すつもりだらうと、こつちは先刻御承知なんだぞ！」

彼は吾を忘れて、その物凄い拳固をパーヴェル・パーヴロヴィチの頭上に振りあげた。もう一瞬間で、あはや相手を一撃のもとに打ち殺しさうな剣幕だった。街の淑女たちはきやつと悲鳴をあげて飛びのいたが、パーヴェル・パーヴロヴィチはびくりともしなかつた。凄まじい獸的な憎惡から来る一種狂暴な表情が、彼の顔を醜く引き歪めてしまつてゐた。

「お手前は御存じかな？」と彼は、今までに比べればずつとしつかりした、殆んど酔つた人とは思へぬほどの語調で言つた。「われわれロシアの……をさ？（ここで彼はとても筆にすることの出来ないやうな罵詈の言葉を發した。）——知つてゐるなら、さつさと其處へ出て失せやがれ！」

さう言ひざま、無理矢理にヴェリチャー・ニノフの腕を振りもいだ拍子に、よろよろつとして危く倒れさうになつた。淑女たちはその彼を抱きとめて、けたたましい聲をあげながら、パーヴェル・パーヴロヴィチを殆んど引きずらんばかりにして、今度はもう一散に逃げだした。ヴェリチャー・ニノフは後を追はなかつた。

その翌日の午後一時に、通常官服を着た、人品卑しからぬ中年の一人の官吏がポゴレーリツェフの

別荘に現はれて、自分はパーヴェル・パーヴロヴィチ・トルソツキイに頼まれた者だがと名乗り、恭々しくクラヴヂャ・ペトロヴナに彼女名宛ての一通の封書を手渡した。その中には、三百ルーブルの金と、リーザの身柄に關する必要な證明書類を封入した手紙がはいつてゐた。パーヴェル・パーヴロヴィチが書いて寄越した文面は、手短かではあつたが鄭重をきはめ、しかも頗る几帳面なものであつた。このたび閣下夫人が天涯の一孤兒に寄せられた恵み深き御同情については、ただただ感謝の他はなく、その善行に報いることはただ神のみがよくするところでありませう、と書いてゐた。そして漠然と、自分は只今極度に健康を害してゐるため、わが最愛の薄倖なる娘を手づから葬つてやるため、そちらへ出向くことは叶ひませぬが、萬事はただ閣下夫人の天使のごとき御心ばえにお縋り申し上げます、とも記してゐた。なほそれに續く文面の説くところに依れば、封入の三百ルーブルは葬儀萬端および娘の病中の諸かかりに宛てて頂きたいと云ふことであつた。萬一またこの金額中のそこばくが餘つた場合には、故リーザの冥福のための永代供養の資に宛てて頂きたく、この段つしんで願ひ上げます、とも記してあつた。手紙を別荘に齎らした官吏は、それ以上のことは問はれても何一つ説明できなかつた。そればかりか彼の洩らした二三の言葉によつて判ずると、彼はただパーヴェル・パーヴロヴィチの切なる依頼によつて、この封書を閣下夫人に親しく手渡しする役目を引き受けたに過ぎないことが分かつた。ポゴレーリツェフは「病中の諸がかり」といふ文句を見ると、殆んど腹を立



てさうになり、ともかくも父親たる者にその子の葬式を営むことを禁ずる譯には行かないから、このうち五十ルーブルだけは埋葬費として申し受けるとして、残る二百五十ルーブルは即刻トルウソツキ、イ氏に返却するがよいと裁定を下した。いろいろ考へた擧句クラウヂヤ・ペトロウナは、その二百五十ルーブルはその儘では返さずに、亡き少女リザヴェータ（譯者註。リザの正式の名）の魂の永代供養料としてその金額を受領した旨の菩提寺の受取を、彼に送りとどけることに決めた。この受取はやがて、すぐさま先方に渡すやうにヴェリチャーニノフの手に托された。彼はそれを例のホテル宛てに郵送して置いた。

葬式が済むと、彼の姿は別荘に見えなくなつてしまつた。まる二週間といふもの、彼は何の目當てもなしに、ただ一人で都會の中をさまよひ歩き、それもすつかり考へ込んでゐるのでよく他人に突き當るのであつた。時によると、日常の最もありふれた事柄をまで忘れ果てて、幾日もぶつ通しに自分の宿の安樂椅子にのうのうと身を伸ばして、寝つづけてゐることもあつた。ポゴレリツェフ夫婦からは再三迎への使がやつて來た。その都度彼に伺ひますと約束するのだつたが、すぐけろりとその約束を忘れてしまつた。クラウヂヤ・ペトロウナはわざわざ自分で見舞ひに出掛けて來たが、あひにくと彼は留守であつた。例の辯護士もそれと同じ目に逢はされた。しかも辯護士は、彼に報告すべき要件を抱へてゐたのである。つまりあのさしも行き難みになつてゐた訴訟事件が、彼の手で頗る手

際よく片附けられて、相手方では、問題になつてゐる遺産の極めて僅かな部分を補償として受けるだけで、示談にすることを承諾したのであつた。あとは當のヴェリチャーニノフの承認をさへ得ればよい段取りになつてゐたのである。やつとのことで彼を宿でとつかまへた辯護士は、ついこの間まであれほどに口喧ましい依頼人であつたこの男が、折角の手柄話をまるで別人のやうな無氣力な冷淡な態度でふんふんと聞き流す有様に、呆れ返らずにはをられなかつた。

やがて一ばん暑氣のきびしい七月の日々がやつて來たが、ヴェリチャーニノフは季節のことなどは忘れてゐた。彼の悲哀は、熱みきつた腫物のやうに胸のなかでしきりに疼いて絶えず苦しいほどはつきりと意識の表面に浮かび出て來るのであつた。なかでも最も大きな悩みは、リーザがろくろく彼を知る暇もなく、彼がどんなにか苦しいほどの愛情を彼女に抱いてゐたかを知りもせず、死んで行つたことであつた！彼の眼の前に、あれほど愉しい光明に照らされて姿をちらりと見せた彼の生き甲斐の全部が、俄かに永遠の闇にとざされてしまつたのである。その生き甲斐といふのは、あのリーザが來る日も來る日も、毎時間、いや一生のあひだ、絶えず彼の愛情をわが身のほとりに感じてゐて呉れる、ただそれだけのことに他ならなかつたのだ——それを今、彼はひつきりなしに思ひ返すのであつた。『どんな人間にしろ、これ以上の生き甲斐は決してありもせず、またあり得るものでもないのだ！』と彼は時折り、暗い法悦にひたりながら思ひ耽つた、『よしんばまだ他に生き甲斐があるにし



ても、これより聖らかな奴は一つだつてありはしないのだ！』……また、『リーザの愛によつて』と彼は夢想するのであつた、『俺の今まで腐れ果てた無益な生活は、すっかり淨められ贖はれたに違ひないのだ。これまでの安逸な、墮落した、老い朽ちた俺をいとしむ代りに、——俺はあの清らかな美しい存在を己れの生き甲斐として愛しはぐくむ筈だつたのだ。そしてあの存在のお蔭で、俺の過去の一切は赦され、また自分でも過去の一切を赦すことができた筈だつたのだ。』

すべてかうした意識面の想念は、常にありありと眼前一寸に焼きつけられ、しかも常に彼の魂を掻きむしりつづける亡兒の追憶と、かたく結びついて現はれて來るのであつた。彼はリーザの蒼ざめた小さな顔を心に描き返し、その顔の表情の一つ一つを想ひ起こした。お棺のなかに花に埋もれて横たはつてゐた姿を、思ひ浮かべ、またまださうならぬ前、高熱のため意識を失つたまま、動かぬ眼をぱつちりと見ひらいてゐた姿を、思ひ浮かべるのであつた。と不意に彼は、彼女がもう廣間の方へ移されて卓子のうへに横たへられてゐたとき、その指が一本だけどうした譯なのか病中に黝すんでしまつてゐたのを、ふと發見した時の自分の氣持を思ひ出した。それを見たとき彼は烈しい感動を覚え、その哀れな一本の指がひどく可哀相になつて來た。今すぐにもあのパーヴェル・パーヴロヴィチを捜し出して打ち殺してやらうといふ考へが、はじめて頭に閃いたのも實にこのことだつたので、それまでの彼は『まるで失神してゐたも同然』だつたのである。——あの子の可憐な心臓を責め苛んでゐたも

のは、生れつき傲慢な氣持が辱かしめられたといふ事實だつたのだらうか、それとも、俄かに今までの愛情を憎しみに變へて、破廉恥な言葉の限りをつくして彼女を面罵し、愕き怖れる彼女を嘲り笑ひ、舉句の果てに彼女を他人のなかへ抛り出したあの父親から受けた、三ヶ月のあひだの苦惱の生活だつたのだらうか？——かうした疑問を彼は絶えずわれと吾が胸につきつけ、無限に形を變へて繰り返して見るのであつた。『あなたは一たい御存じなんですか、あのリーザが私にとつて何者だつたかと云ふことを？』——彼は突然、酔ひつづれたトルソツキイが發したこの叫びを思ひ浮かべ、今にしてはじめて、この叫びが決してお芝居ではなくて、彼の本心の聲だつたことに思ひ當つた。そこには愛のひびきが籠もつてゐたことを感得した。『何だつてあの人非人は、それほどに可愛い子供にああも辛く當たれたんだらうか、そんなことがあり得ることだらうか？』しかし、この疑問がきざすたびに彼は急いで、まるで拂ひのけでもするやうに、振り棄ててしまふのであつた。この疑問のなかには何かしら怖ろしいものが、彼にとつてとても堪へられぬ——しかも未解決の何ものかが、潜んでゐるのであつた。

ある日のこと例によつて當てもなく歩いてゐると、いつの間にやら彼はリーザの葬られてゐる墓地にさまよひ込んで、彼女の小さな墓の前に出てゐた。葬式の日からこのかた、彼は一度も墓地を訪れたことはなかつた。來れば來るで、餘りにも多くの苦痛を味はなければなるまいと思はれたので、訪



れる勇氣が出なかつたのである。ところが意外なことには、彼女の墓に伏しかがんで接吻をしたとき、彼は急に心の軽くなるのを覺えた。晴れわたつた夕暮で、太陽は西に沈まうとしてゐた。一面にみづみづしい緑草が生ひ繁つて、あたりの墓標を埋めてゐた。遠からぬ野薇薔の茂みでは、蜜蜂がにぶい羽音を立ててゐた。埋葬が済んでからクライヴヂャ・ペトロヴィナとその子供達がリーザの墓の上に残して行つた花束や花環が、半ば葉を落としたまま、まだ同じ場所に横たはつてゐた。ながい懊惱の日々のあとで、はじめて何かしら希望に似たものが、彼の心を生き生きと蘇へらせさへした。

『ああ、いい氣持だ!』と彼は、墓地の静寂にひとりながら、澄み渡つた穏やかな空に眺め入つて、心にさう思つた。何ものかに對する清純な和やかな信念が、満ち潮のやうに彼の魂をひたひたと満たした。——『この氣持はリーザが送つてよこしたのだ、いまあの子は俺と話をしてゐるのだ!』——ふと彼はさう思つた。

彼が墓地を出て家路についたときは、もう日はとつぷりと暮れてゐた。墓地の門からほど遠からぬ道傍に、屋根の低い木造の家が一軒あつて、何か小料理屋か居酒屋のやうなことをしてゐた。開けはなしの窓の中には、テーブルを前にした客達の姿が、遠目にもそれと見分けられた。と突然、その中ですぐ窓ぎはに陣どつてゐる男が、他ならぬパーヴェル・パーヴロヴィチのやうな氣がした。向ふでもやはり、好奇の眼をみはりながら、窓ごしにこちらをちつと見てゐるらしかつた。彼がそのまま先

へ歩いて行くと、間もなく追つかけて來る人の足音がきこえた。後から駈けて來たのは、果たしてパーヴェル・パーヴロヴィチであつた。さつき窓から覗いてゐたとき、ヴェリチャーニノフの面上に讀みとられた和解放的な表情が、恐らく彼を惹きつけ且つ勵ましたものに相違ない。追ひついて肩を並べると、彼はおづおづと微笑みかけた。が然しそれは、もはや先頃の酔ひ痴れた笑ひではなかつた。それどころか、彼は少しも酔つてはゐないのであつた。

「御機嫌よう」と彼は言つた。

「御機嫌よう」とヴェリチャーニノフも答へた。

## 十一 パーヴェル・パーヴロヴィチの結婚

この『御機嫌よう』を返してしまつて、彼は忽ちはつと自分に驚いた。今この男に出喰はしても、何の憎惡も浮かんでは來ないばかりか、今この瞬間における自分の彼に對する感情の中には、何かしらこれまでとは全く異つたもの、そのみならず新らしい何物かへの願望までが動くのを感じて、ひどく意外な氣がしたのである。



「實にいい晩ですなあ」と、彼の眼色をぢつと窺ひながら、パーヴェル・パーヴロヴィチは言つた。  
 「あなたはまだお發ちぢやなかつたんですか？」と、ヴェリチャーニノフは別に問ひかけるつもりはなく、思ひ耽りながら歩みを續けながら、何氣なくさう呟いた。

「どうも用件がのびのびになりましたね。しかし、——とにかく椅子は手に入れましたよ、しかもそれが昇進なんですね。明後日は必らず發つつもりです。」

「椅子がみつかつたんですか？」と彼は、今度は本式に問ひかけた。

「それがいけませんかね？」と急にパーヴェル・パーヴロヴィチは厭な願をした。

「いや、たださう言つて見ただけで……」とヴェリチャーニノフは相手の言葉をそらして、眉根を寄せて横目でちらりとパーヴェル・パーヴロヴィチの様子を窺つた。ところが驚いたことには、着てゐる服といはず、例の喪章のついた帽子といはず、トルソツキイ氏の風采たるや實に頭のでつぺんから足の先まで、二週間まへとは似もつかぬほどきちんとしてゐた。『だのに何だつて奴さん、あんな居酒屋になんぞ坐り込んでたんだらうな？』と彼は依然として黙想をつづけた。

「私はね、アレクセイ・イヴァーノヴィチ、實はもう一つ聞いて頂きたい吉報があるんですよ。」とパーヴェル・パーヴロヴィチは再び口を切つた。

「吉報？」

「私は結婚することになつたんですよ。」

「え？」

「苦あれば樂あり、これが世間の常道でしてね。ところで私は、アレクセイ・イヴァーノヴィチ、非常にその何したいんですがね……だが、あなたの御都合が——今夜はお急ぎらしいですね。どうやらそんな御様子が見えるもんで……。」

「ええ、急ぐんです。……それに、身體の工合もよくないんですよ。」

彼は急に、この男の傍から離れたくて堪らなくなつた。つい今しがたの、何ものか新しい感情を待ち設けるやうな心構へは、瞬くまに消えてしまつた。

「實はそのちよつと……。」

と言ひかけて、パーヴェル・パーヴロヴィチは自分の希望を言ひ出さずにやめた。ヴェリチャーニノフは默然としてゐた。

「さういふ譯でしたら、いづれ後日といふことに致しませう。またお目にかかる折りがありましたらですな……。」

「さうさう、いづれまた後日に」とヴェリチャーニノフは、相手には目も呉れずに歩みつづけながら、口早やに呟いた。また暫く沈黙が來た。パーヴェル・パーヴロヴィチは依然として並んで歩いてゐた。



「ぢやあ、またお目にかかるとしませう」と彼はやがて口を切つた。  
「ではいづれ又、なにぶんと……。」

ヴェリチャーニノフは又しても氣分を臺なしにされて、家に戻つて來た。「あの男」の思ひもかけぬ邂逅は、彼にとつては荷が勝ち過ぎたのである。寢床にはいりながら、彼はもう一ぺん心に繰り返した、「何だつてあいつ、墓地の傍へなんぞ來てゐたんだらう？」

あくる朝、彼はたうとうポゴレーリツェフの別荘へ出掛けることに決心した。嫌々ながら決心したのである。今は他人から受ける同情が、よしんばポゴレーリツェフ夫妻のそれであつても、彼にとつては餘りにも辛いものだつたのである。然し夫妻の方であれほどまでに彼の身を案じて呉れる以上、義理にも一度は顔を出さなければ濟まなかつた。で、思ひきつて出掛けることに決めると、不意に彼には、あのあとで初めて夫妻と顔を合はせるとき、自分が何故かひどく氣恥かしい思ひをすることだらうと、そんな氣がした。「行かうか、行くまいか？」と彼は、いそいで朝食をしたためながら、心の中で押問答をしてゐた。と突然その瞬間に、のつそりとパーヴェル・パーヴロヴィチがいつて來たのには、さすがの彼ものけぞらんばかりに仰天してしまつた。

昨夜あんな工合にして出逢つたとはいへ、ヴェリチャーニノフの方ではまさかこの男が何時かまた押しかけて來ようなどとは夢にも思つてゐなかつたので、すつかり面くらつてしまつて、相手の顔を

見守るばかりで、きつかけの言葉も口に浮かんで來ない始末だつた。ところがパーヴェル・パーヴロヴィチはさつさと自分で事を運んで、朝の挨拶を濟ませると、三週間前の最後の訪問のときに腰をおろしたその椅子に、どつかり坐り込んでしまつた。ヴェリチャーニノフは突差に、あの最後の訪問のときの有様を實にまざまざと思ひ浮かべた。不安と、それに嫌惡の情をもつて、彼は客の顔をぢろぢろと眺めてゐた。

「びつくりなさいましたか？」とパーヴェル・パーヴロヴィチは、ヴェリチャーニノフの眼色を讀んで口を切つた。

全體の調子から見ると、彼は昨夜よりもずつと打ち融けた様子に見えはしたものの、同時にまた、昨夜より一層おどおどしてゐる氣配もうかがはれた。のみならず今朝のいでたちと來たら、何ともはや珍妙極まるものであつた。トルソツキイ氏は管にきちんとした身なりをしてゐるにとどまらず、寧ろ伊達者の服裝に近かつたのである。——輕やかな夏の上衣、ぴつちりした淡色のズボン、それに同じく淡色のチョッキ、といふいでたちで、そのほか手袋といひ、どうした譯だか急に出現に及んだ金縁の折疊み眼鏡といひ、眞新らしい下着といひ、——全く五分のすきもなかつた。おまけに香水までぶんぶんさせてゐた。さうした姿を全體として見ると、何かしら滑稽な感じがしたが、それと同時に見る者の心に或る奇怪な、不愉快な思ひを抱かせる、何ものかがあつた。



「勿論そりや、アレクセイ・イヴァーノヴィチ」と彼は、しきりに身をくねらせながら言葉をつづけた。「かうしてひよつくり伺つたんぢやあ、びつくりなさるのも無理はありませんや——それは私だつて思はないぢやありません。しかしね、人間同志の仲には、或る高尚なものが常に存在してゐる、とかう私は思ふんですよ。しかも私に言はせれば、それはそのままに保存されなけりやならん。ではありませんかね？　ここで高尚なものと申すのは、つまり周囲一切の事情とか、そこから生ずべき一切のごたごたなどに較べて、一層高尚なといふ意味なんですよ……ではありませんかね？」

「パーヴェル・パーヴロヴィチ、改まつた前置きなんかは抜きにして、一つさつさと願ひたいものですな」と、ヴェリチャーニノフは顔をしかめた。

「いや、ほんの一言ですよ」とパーヴェル・パーヴロヴィチは急ぎ込んで、「私は結婚することになりましてね、實はこれからすぐこの足で、未來の花嫁のところへ参らうと思つてゐる譯です。その家の人達もやはり別荘へ行つてますんですが、そこで一つ折入つてお願いと申すのは、甚だ不躰ながらあなたに、その一家の人達とお知己ちかつきを願ひましたら、實に光榮至極に存する次第なんです。といふわけです、まことに何ともはや申し兼ねる次第なんですが（とパーヴェル・パーヴロヴィチは恭しく頭を下げた）、ひとつ御同道をお願いできませんでせうか……。」

「どこへ同道しろと仰しやるんですか？」とヴェリチャーニノフは目を丸くした。

「その連中のところ、つまりその別荘へなんです。どうもまるで熱に浮かされたみたいな喋りやうで、さだめし前後も轉倒、さぞお聞きづらいこととせうが、その邊は重々お許しを願ひますよ。ただあなたが厭だと仰しやりはしまいかと、そればかりが心配で……。」

と彼は泣きだしさうな顔になつて、ヴェリチャーニノフの方を見た。

「といふと、この私に今、あなたのお嫁さんのところへ一緒に行つて呉れと、さう仰しやるんですね？」と相手の様子に素早く眼を走らせながら、自分の耳も眼も一切信じられずに、ヴェリチャーニノフは確かめるやうに相手の注文を繰り返した。

「さうなんです」とパーヴェル・パーヴロヴィチは俄かにひどくおどおどし出した、「どうぞお腹立ちなく、アレクセイ・イヴァーノヴィチ、決して是非ともなと厚かましいお願いをする譯ぢやないんです。ただもう七重の膝を八重に折つて、かうして御懇願申し上げるだけなんです。ひよつとしたらあなたが、諸と言つて下さらんものでもあるまいと、實はさう思ひましたやうな次第で……。」

「第一、そんなことは全然不可能ぢやありませんか」とヴェリチャーニノフは不安さうにやり返した。

「これはただ私の切なるお願いなんです、別に他意あるわけではないんです」と相手は哀願をつづけた、「それにまた、これにも矢張り相當の理由のあることは、決して包みかくさうとは思つとりま



せん。ただ、その理由は後日あらためて打ち明けさせて頂くとして、今日のところはただ切にお願いを……。」

と彼は、敬意を表するため椅子から立ちあがりさへした。

「ですが、何と仰しやられてもそれは不可能ぢやありませんか。あなただつてお分かりでせう……」とヴェリチャーニノフも席から起ちあがつた。

「何で不可能なことがあるもんですか、アレクセイ・イヴァーノヴィチ、——これを機会に、あなたを友人としてお引合はせしたいと思つてゐたんですよ。それにまた、わざわざお引合はせするまでもなく、あなたは先刻あの人達とはお知合ひの筈ぢやありませんかね。それ、あのザフレービンの別荘にお供しようとしてゐるんですよ。あの五等官のザフレービンですよ。」

「え、何ですつて？」とヴェリチャーニノフは頓狂な聲をあげた。

そのザフレービンといふのは、彼が一と月ほど前ほとんど毎日のやうに捜し廻つて、たうとう在宅のところを捉へることの出来なかつた、あの五等官に他ならなかつたのである。判明した事實を綜合してみると、この男が例の訴訟事件で相手方の利益を圖つてゐることは、疑ひのないところであつた。

「さうですとも、正にさうなんですよ」と、ヴェリチャーニノフの度外れな驚愕ぶりに力を得たもの

のやうに、パーヴェル・パーヴロヴィチはにこにこした、「正にあの人なんです。ほらまだ覚えておいででせう、何時ぞやあなたが、あの人と一緒に歩きながら話をしていらしたことがありましたつけね。あるとき私は、あなたがたの方を見ながら、往來の反対側に立つてゐたんですよ。あなたのお話が済んだら、あの人の方へ行かうと思つて、待つてゐたんですよ。二十年ほど前には、一つ役所に椅子を並べてゐたほどの仲なんです。但し、あなたのお話が済んだら傍へ行かうと待つてゐた頃は、まだ別にそんな考へがあつた譯ぢやないんです。ほんの最近、つい一週間ほど前から、だしぬけにそんな氣になつたもんでして。」

「ですがね、あなた、先方はどうして中々きちんとした家庭のやうに見受けられますがなあ？」とヴェリチャーニノフは、無邪氣な驚嘆の色を浮かべた。

「きちんとした家庭だつたらどうだと仰しやるんです？」と、パーヴェル・パーヴロヴィチは佛頂面をした。

「いや勿論、そんなつもりで言つたんぢやありませんがね……ただあの家へ行つて、私の見た限りでは……」

「向ふでは覚えてゐますよ、あなたのいらしたことを、ちゃんと覚えてゐますよ」と、パーヴェル・パーヴロヴィチは嬉しさうに話を引きとつた、「ただあなたの方では、あの家の者とはお會ひになれ



なかつた譯ですな。ところが主人はちゃんとあなたのことを覚えてゐて、尊敬してをりますよ。私はあなたのことを、あの家の人達の前で、大いに敬意を籠めて吹聴して置いたんです。」

「だが、まだ奥さんが亡くなつて三月にしかならないのに、一體どうしたことなんです？」

「いやそれは、何も今すぐ式を擧げる譯ぢやないんです。婚禮の方は九ヶ月か、もしかすると十ヶ月後のことになりませう。それで丁度一年の服喪期もおしまひになるわけですからね。そこでこれはもう保證しますがね、萬事は實に巧い工合に運んでゐるんです。何よりも有難いことには、フェドセイ・ペトロヴィチは子供の時分からこの私といふ人間を知つてゐるんですし、亡くなつた妻のことも知つてゐましたし、また私の暮らし向きのこと、世間の信用、それから相當の資産のあること、また今度はいかに榮轉することになつたことまで、知つてゐますんで、——何から何までが有利な條件になつてゐるわけなんです。」

「とすると、あの人の娘さんを貰はれるんですか？」

「その一部始終をひとつ詳しく申し上げるとしませうかね」とパーヴェル・ペトロヴィチは嬉しうに首をちぢめて、「失禮して煙草を一本つけさせて頂きますよ。それにどうせあなたも、今日御自身で御覽になることですからな。そもそもあのフェドセイ・ペトロヴィチのやうな敏腕家になると、一たん世人の注目を惹き了せさへすれば、このペテルブルグではなかなか大した椅子に坐れるもので、

してね。ところがですな、定まつた俸給と、そのほかに何やかやと——まあ臨時加俸とか、賞與金とか、追加手當とか、膳部料とか、それから一時賜金とか——そんなものを除いては何一つその、つまりこれと言つた資産になるやうな、重みのある金はないといふ譯なんです。なるほど見た目にはいい暮らしはしてゐる。しかしあれで家族を抱へてゐるとなると、どうして蓄財なんかとても出来るもんぢやありません。まあ考へても御覽なさい、フェドセイ・ペトロヴィチには娘が八人もあるのに、一人息子はまだほんの子供と來てゐるんです。今あの人にもしもの事があつて御覽なさい、——あとはもう雀の涙ほどの遺族扶助料が下るきりぢやありませんか。そこへもつて來て女の子が八人ですぜ。——いやはや、まあちよいと考へて見ても下さい、假りにその一人一人に靴を一足づつ買つてやるにしても、一體いくらかりますかな！ おまけにその八人のうち五人までが、もう嫁入り盛りなんです。一ばん上のは二十四ですし——（實に素晴らしい美人ですぜ、まああとでとつくり御覽なさい！）六番目のは十五で、まだ女學校へ通つてゐるんです。ところで、この上の五人の娘にはお婿さんを見附けてやらなけりやなんのですし、それも婚期を逃がさんやう出来るだけ早くしなければなりません。従つて一家の父たるもの、その娘達を飾り立てて社交界へ出してやらなければならん譯ですが、——それがまた大變な物いりでさあね。ね、さうでせう？ そこへ突如としてこの私が出現したんです。しかもただ出現したばかりぢやない、實にあの家にとつての最初の花婿候補者としてなんです。



かてて加へてこつちの身上は先様で先刻御承知だつた。といふのはつまり、れつきとした財産のあることですがね。さつとまあ、かうした次第なんですよ。」

と、パーヴェル・パーヴロヴィチはいい氣持で續けて來た説明を結んだ。

「で、あなたはその一番上の娘さんに求婚なすつたんですか？」

「いやその、私は……一番上のぢやないんです。私が貰はうといふのは、その六番目の方なんですよ、今も申したやうにまだ女學校へ通つてゐる。——」

「へえ？」とヴェリチャーニノフは思はず薄笑ひを漏らした、「だつて今のお話ぢやまだ十五だといふぢやありませんか！」

「今は十五ですがね。しかしもう九ヶ月すれば十六になりますよ、十六歳と三ヶ月になる勘定です。別に仔細はないぢやありませんか？ 尤も、今すぐこんな話を持ち出すのもどうかと思はれるので、まだ公然とは何も切り出してないんです。ただ両親との話し合ひだけなんです。……何はともあれ、萬事は實に上首尾なんですよ！」

「すると、まだ決まつた譯ぢやないんですね？」

「いや、決まつてゐるんです、ちゃんと決まつてゐるんですよ。まあ安心して下さい、萬事は上首尾なんですから。」

「で、本人は知つてゐるんですか？」

「つまりそこは體裁の上から、表向きはまだ聞かされてない振りをしてはゐますがね。なあに知らない筈があるもんですかね？」とパーヴェル・パーヴロヴィチは嬉しさに眼を細めて見せたが「どうでせう、あなたに祝福して頂けるでせうか、アレクセイ・イヴァーノヴィチ？」と、今までとは打つて變つたひどくおづおづした調子で、彼は言葉をむすんだ。

「だつて何も、私なんぞの出る幕ぢやないぢやありませんか？——それにまた」と彼は急いで附け足した、「私はどうあつてもお供はしないつもりですから、従つてあなたの方でも、先刻のお話のその理由とやらは仰しやつて下さらないでも結構ですよ。」

「アレクセイ・イヴァーノヴィチ、まあさう……。」

「まつたく、私があなたと馬車に並んで坐つて、のこのこ出向いて行けるものかどうか、まあ自分でも一つ考へて御覽なさるがいい！」

花嫁に關するパーヴェル・パーヴロヴィチの寢言のおかげで一時は紛らされてゐたものの、このとき又もや最前の嫌惡と敵意の感じが、むらむらとヴェリチャーニノフに返つて來た。もう一分もこの睨み合ひが續いたら、彼はこの厭らしい客を追ひ出してしまつたに違ひない。そればかりでなく、彼は何かしら自分自身にまで腹が立つてならなかつたのである。



「そこを是非ひとつ、アレクセイ・イヴァーノヴィチ、御一緒にお出向き願ひたいんですよ！」とパーヴェル・パーヴロヴィチは感極まつた聲で哀願した。「駄目ですよ、ねえ駄目ですよ。そんなことを仰しやつちやあ！」と、ヴェリチャーニノフの苛立たいと同時に決然とした身振りを讀んで、彼は両手を振りながら言葉をつづけた。「アレクセイ・イヴァーノヴィチ、ねえアレクセイ・イヴァーノヴィチ、まあさう手つ取り早く決めちまはないで下さい！　どうも私の見るところでは、あなたは私のことを曲解してらつしやるやうですよ。つまりその、あなたにとつても私にとつても、——お互ひ同志が友達ぢやないことぐらゐ、私だつて重々承知してをりますものね。何ほ私が頓馬だつても、まさかそれが分からない程ぢやありませんさ。それに、只今願ひしてゐることにしたつて、決してあなたにとつて後々の御迷惑になるやうな筋合ひのものぢやないんです。第一この私自身が、明後日はもう御當地からきれいさつぱり足を洗つて發つて行くんですからねえ。つまり、今までのことは一切何もなかつたと同然になつちまふ譯なんです。ですから今日のところは一つ、ほんの物のはずみといふことにして、是非願ひしますよ。私は實のところ、あなたのお心に宿る格別の感情に甘えて、謂はばそれに望みをつないで、かうして伺つた次第なんです、アレクセイ・イヴァーノヴィチ。——つまり私は、最近になつてあなたのお心のなかに目覺めて來たと想像される、あの感情のことを申すんですが……。これではつきりと申し上げてゐるつもりですけれど、それともまだ足りませんか？」

な？」

パーヴェル・パーヴロヴィチの興奮状態は極點に達した。ヴェリチャーニノフは怪訝さうに相手を眺めてゐた。

「つまりあなたは、この私に何かして貰ひたいことがあるんですね」と、彼は考へ込みながら訊いた、「そしてひどく頑強に主張なさる。——どうもそこが私には腑に落ちないですよ。もつと詳しくいところを伺ひたいもんですな。」

「ただもう私と一緒ににお出向き下さるだけで結構なんです。そのあとで、またこちらへ戻つて來てから、何もかも洗ひさらひ、懺悔のつもりでああなたにお打ち明けますよ。アレクセイ・イヴァーノヴィチ、どうぞ私の口を信じて下さい！」

しかしヴェリチャーニノフはやはり斷りつづけた。しかもその拒絶は、自分の胸に或る重苦しい毒念に満ちた考への募るのが感じられれば感じられるだけ、ますます頑強になつて行つた。その毒念に満ちた考へは、先刻パーヴェル・パーヴロヴィチが花嫁の話をやりだしたそもその初めから、彼の胸にきざしかけてゐたもので、果たしてそれが單なる好奇心なのか、それともまだ全く漠然としてゐる何かの誘惑なのか、そのところは定かでなかつたけれど、とにかく「承知してやれ、承知してやれ」としきりに彼を唆かすのであつた。さうして唆かす聲が内心に強まれば強まるだけ、ますます彼



は頑張るのであつた。彼は頬杖をついて坐つたまま、あれやこれやと思ひ迷つてゐた。パーヴェル・パーヴロヴィチはしきりにその彼の鼻息をうかがつて、うるさくせがむのであつた。

「よろしい、行きませう」と彼は突然、不安さうな、殆んど惑亂したやうな様子で承知すると、同時に腰をもちあげた。パーヴェル・パーヴロヴィチは有頂天になつて喜んでしまつた。

「それぢや駄目ですよ、アレクセイ・イヴァーノヴィチ、今日はひとつおめかしをして下さいよ」と彼は、着替へを済ませたヴェリチャーニノフの周りに、小躍りしながら纏はりついた、「もう一段上等の奴を奮發して下さいよ。つまり御身分に恥かしからぬ奴をね。」

『何だつてそんなことにまで口を出すんだらう、をかしな男だなあ?』と、ヴェリチャーニノフは心にさう思つた。

「ところで私は、實はもう一つ他にお願ひがあるんですがね、アレクセイ・イヴァーノヴィチ。一たん行つてやらうと御承諾下すつたからには、序でのことに私の引き廻し役になつて下さいよ。」

「と云ふと?」

「早い話が、たとへばこの喪章を如何にすべきか、といふ大問題があるんです。外したものでせうか、それともこの儘つけて置いたものでせうかね?」

「それあ御隨意ですなあ。」

「いや、そこをあなたに決めて頂きたいんですよ。もしあなただつたら、どうなさいますかね? つまりその、あなたが喪章を附けてをられたらばですな。私一個の考へとしては、喪章をこのままにして置けば、つまり心の操が堅固だといふ證據になるでせうし、従つてまた先方の受けもいい筈だとかう思つてゐたんですがね。」

「いや勿論、お外しになる方がいいです。」

「え、勿論と仰しやるんですか、勿論外す方がいいと?」パーヴェル・パーヴロヴィチは小首を傾げた、「いや、やつぱりこの儘つけとくとしませうよ……。」

「ぢや御隨意に。」

とヴェリチャーニノフは答へて、『やつぱり奴さん、俺の言ふことを眞に受けちやゐないんだ。こりやあいい工合だわい』と心に思つた。

二人は表へ出て行つた。パーヴェル・パーヴロヴィチは、めかし立てたヴェリチャーニノフの姿をさも満足さうに見かう見するのだつた。それどころか彼の顔には、今までよりも一層深い敬意と莊重の色が浮かんでさへゐるしかつた。ヴェリチャーニノフは相手の様子に呆れると同時に、自分自身についても更に一層呆れ返つてゐた。宿の門のところに、豪勢な馬車が一臺、彼等を待ち受けてゐた。



「ほう、車までちゃんと用意してあるんですか？　してみると、はじめから私が行くものと思ひ込んでいらしたんですね？」

「いや、車は自分のために備つたんですがね、しかしあなたが一緒に行つて下さるだらうとは、九分どほり信じてをりましたよ」とパーヴェル・パーヴロヴィチは、さも幸福な人間のやうな顔で返事をした。

「ねえ、パーヴェル・パーヴロヴィチ」と、やがて二人が馬車に乗り込んで、車が動きだしてから、ヴェリチャーニノフは何か苛だたしげな聲で笑ひだした、「それぢやあんまり、私の肚の中を一人合點なさり過ぎるといふものぢやありませんかね？」

「しかし、アレクセイ・イヴァーノヴィチ、だからと云つてそのあなたが、私のことを頓馬だなどとは眞逆おつしやるお心算ぢやありませんまいね？」と、パーヴェル・パーヴロヴィチはしみじみした聲できつぱりと答へた。

『だがリーザは？』とヴェリチャーニノフはふつと心にさう思つた。が、聖い物を潰さうとしてゐる自分に愕然としたもののやうに、あはててその想念を振り拂つた。するとまた突然、自分といふものがこの瞬間じつに小つぽけな、取るにも足らない物のやうに思はれた。自分を今まで誘惑してゐた想念が、實にけち臭い、實に汚らはしいものに思はれて來たのである。……そして又しても、是が非

でも一切を抛擲して、せめて今すぐにでもこの馬車から出てしまひたい、そのためもし必要とあらば、パーヴェル・パーヴロヴィチを叩き伏せたつて構はない、とそんな考へがむらむらと湧いて來た。その途端に相手が喋りだしたので、またもや例の誘惑が彼の心を俘にしまつた。

「アレクセイ・イヴァーノヴィチ、あなたは寶石の鑑定ができますかね？」

「寶石つて何ですか？」

「ダイヤですよ。」

「そんなら出來ます。」

「贈物を持参したいと思ふんですがね。ひとつ御助言を願ひますよ、その必要があるでせうか、それともないでせうか？」

「私の考へでは、ありませんね。」

「でも、どうしても私は持つて行きたいんですがねえ」とパーヴェル・パーヴロヴィチは言ひ返した、「ただ問題は、何を買つたものかといふことなんです。一揃へそつくり——つまりブローチ、耳環、腕環を組みにしたものか、それともその中の一品だけにしたものか、どんなもんでせうねえ？」

「一たい幾らお出しになるつもりなんです？」

「まあ四五百ルーブルですね。」